POD XT
ULTIMATE TONE FOR GUITAR

POD XT PRO
ULTIMATE TONE FOR GUITAR + DIG I/O

取扱説明書

LINE 6

安全上のご注意

ご使用になる前に必ずお読みください

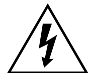
ここに記載した注意事項は、製品を安全に正しくご使用いただき、あなたや他の方々への危害や損害を未然に防ぐためのものです。
注意事項は誤った取り扱いで生じる危害や損害の大きさ、または切迫の程度によって、内容を「警告」、「注意」の2つに分けています。これらは、あなたや他の方々の安全や機器の保全に関わる重要な内容ですので、よく理解した上で必ずお守りください。

マークについて

製品には下記のマークが表示されています。



マークには次のような意味があります。



このマークは、機器の内部に絶縁されていない「危険な電圧」が存在し、感電の危険があることを警告しています。



このマークは注意喚起シンボルであり、取扱説明書などに一般的な注意、警告、危険の説明が記載されていることを表しています。

火災・感電・人身障害の危険を防止するには

図記号の例

	△記号は、注意（危険、警告を含む）を示しています。 記号の中には、具体的は注意内容が描かれています。左の図は「一般的な注意、警告、危険」を表しています。
	⃠記号は、禁止（してはいけないこと）を示しています。 記号の中には、具体的な注意内容が描かれることがあります。左の図は「分解禁止」を表しています。
	●記号は、強制（必ず行うこと）を示しています。 記号の中には、具体的な注意内容が描かれることがあります。左の図は「電源プラグをコンセントから抜くこと」を表しています。

以下の指示を守ってください

⚠警告

この注意事項を無視した取り扱いをすると、
死亡や重傷を負う可能性が予想されます



- **電源プラグは、必ずAC100Vの電源コンセントに差し込む。**
- **電源プラグにほこりが付着している場合は、ほこりを拭き取る。**
  感電やショートの恐れがあります。
- **本製品はコンセントの近くに設置し、電源プラグへ容易に手が届くようにする。**



- **次のような場合には、直ちに電源を切って電源プラグをコンセントから抜く。**
  ○電源コードやプラグが破損したとき
  ○異物が内部に入ったとき
  ○製品に異常や故障が生じたとき
  修理が必要なときは、お買い上げの販売店、最寄りのコルグ営業所、またはサービス・センターへ修理を依頼してください。



- **本製品を分解したり改造したりしない。**



- **修理/部品の交換などで、取扱説明書に書かれている以外のことは絶対にしない。**
- **電源コードを無理に曲げたり、発熱する機器に近づけない。また、電源コードの上に重いものを乗せない。**
  電源コードが破損し、感電や火災の原因になります。
- **大音量や不快な程度の音量で長時間使用しない。**
  万一、聴力低下や耳鳴りを感じたら、専門の医師に相談してください。
- **本製品に異物（燃えやすいもの、硬貨、針金など）を入れない。**
- **温度が極端に高い場所（直射日光の当たる場所、暖房機器の近く、発熱する機器の上など）で使用や保管はしない。**
- **振動の多い場所で使用や保管はしない。**
- **ホコリの多い場所で使用や保管はしない。**



- **風呂場、シャワー室で使用や保管はしない。**



- **雨天時の野外などのような湿気の多い場所で、使用や保管はしない。**
- **本製品の上に液体の入ったもの（水や薬品等）を置かない。**
- **本製品に液体をこぼさない。**



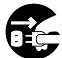
- **濡れた手で本製品を使用しない。**

⚠注意

この注意事項を無視した取り扱いをすると、傷害を負う可能性
または物理的損害が発生する可能性があります



- **正常な通気が妨げられない所に設置して使用する。**
- **ラジオ、テレビ、電子機器などから十分に離して使用する。**
  ラジオやテレビ等に接近して使用すると、本製品が雑音を受けて誤動作する場合があります。また、ラジオ、テレビ等に雑音が入ることがあります。
  本製品をテレビ等の横に設置すると、本製品の磁場によってテレビ等の故障の原因になることがあります。
- **外装のお手入れは、乾いた柔らかい布を使って軽く拭く。**
- **電源コードをコンセントから抜き差しするときは、必ず電源プラグを持つ。**



- **長時間使用しないときは、電源プラグをコンセントから抜く。**



- **他の電気機器の電源コードと一緒にタコ足配線をしない。**
  本製品の定格消費電力に合ったコンセントに接続してください。
- **スイッチやツマミなどに必要以上の力を加えない。**
  故障の原因になります。
- **外装のお手入れに、ベンジンやシンナー系の液体、コンパウンド質、強燃性のポリッシャーは使用しない。**
- **不安定な場所に置かない。**
  本製品が転倒してお客様がけがをしたり、本製品が故障する恐れがあります。
- **本製品の上に乗ったり、重いものをのせたりしない。**
  本製品が損傷したり、お客様がけがをする原因となります。
- **地震時は本製品に近づかない。**
- **本製品に前後方向から無理な力を加えない。**
  本製品が転倒する危険性があります。

データについて

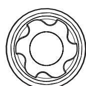
操作ミス等により万一異常な動作をしたときに、メモリー内容が消えてしまうことがあります。データの消失による損害については、当社は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

*掲載されている会社名、製品名、規格名などは、それぞれ各社の商標または登録商標です。

Please Note:

Vetta, Amp Farm, Modeler, POD, PODxt, Line 6及びLine 6ロゴは、Line 6社の登録商標です。このマニュアルに掲載されている写真、イメージ、登録商標、アーティスト名はそれぞれの所有者の権利に基づくものであり、このマニュアルではLine 6のデジタルモデリングテクノロジーを駆使し、独自に開発された音を適切に表現するためだけに使用されています。また、これらの写真、イメージ、登録商標、アーティスト名の使用において、いかなる協力やエンドースメントも関わるものではありません。

SELECTノブ／エフェクトボタンガイド













- EDIT、SAVE、TUNERボタン点灯時、ページ選択ノブ
- 上記以外はチャンネルメモリー選択ノブ

- キャビネットシミュレート使用中はCAB/A.I.R.ボタン点灯
- 各エフェクトボタンを2回押して、そのエディットページを表示
- COMP、STOMP、MOD、DELAYボタン点灯時は各エフェクトがオン



EDITページ

1. アンプ設定
2. A.I.R.設定
3. コンプレッサー、ゲート設定
4. ペダル選択、設定
5. モジュレーション選択、設定
6. モジュレーション設定（ページ2）
7. ディレイ選択、設定
8. ディレイ設定（ページ2）
9. リバーブ選択、設定
10. ワウ、ボリューム設定
11. エフェクトツウィーク 、テンポ設定



SAVEページ

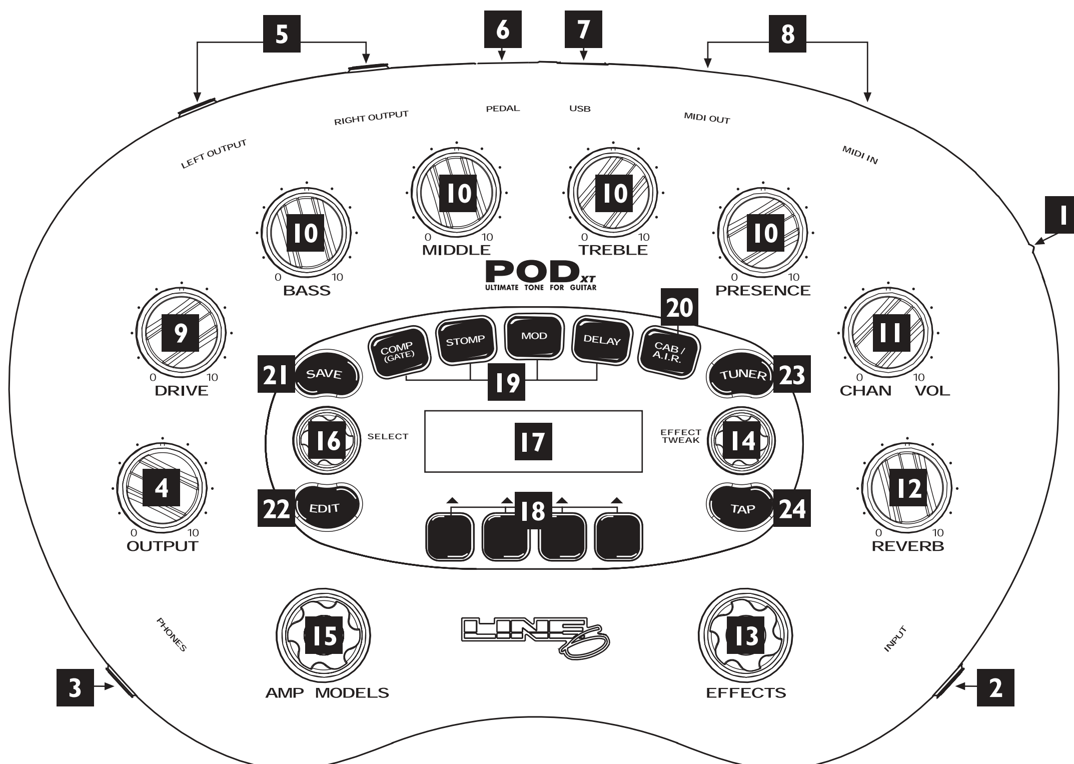
1. サウンド、チャンネルメモリーセーブ
2. アンプモデルのカスタムセーブ
3. エフェクトセットアップのカスタムセーブ
4. 1つの初期設定チャンネルのリコール
5. 初期設定リコール
6. MIDIダンプ

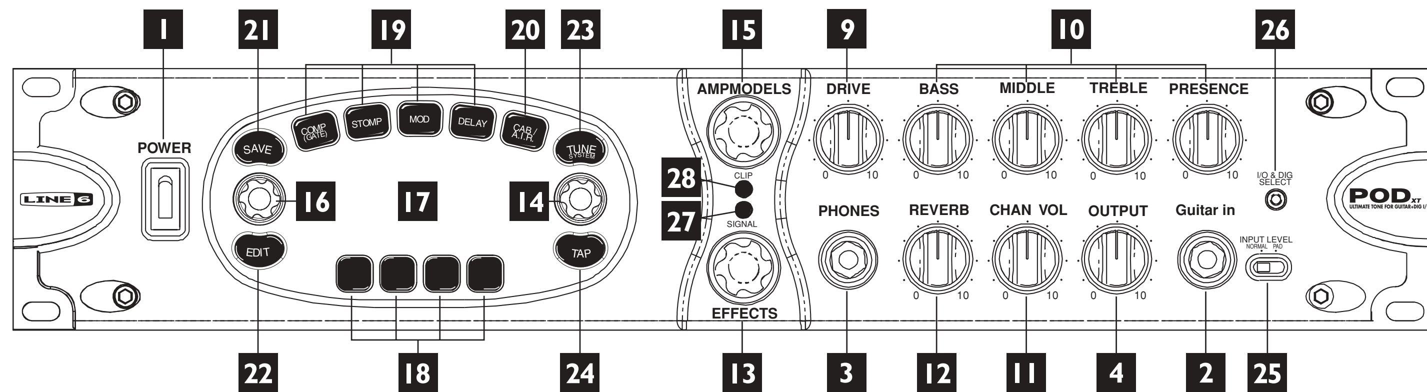


TUNERページ

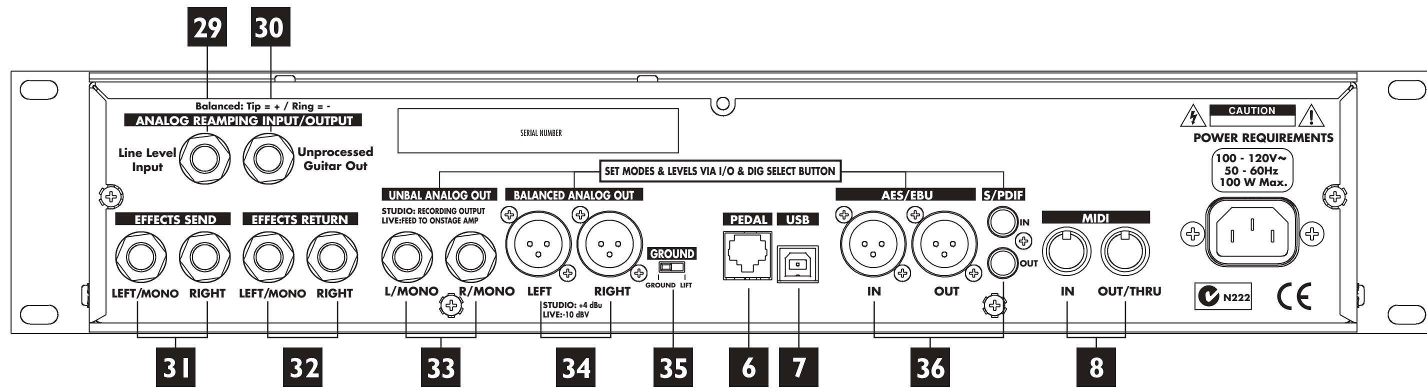
1. チューナー
2. 入力／デジタル出力（PODxtPROのみ）
3. 接続選択
4. ディスプレイコントラスト
5. MIDI
6. PODxtソフトウエアバージョン表示

PODxt コントロール／端子





1
21
19
20
23
15
9
10
26
POWER
SAVE
COMP (GATE)
STOMP
MOD
DELAY
CAB / A.T.R.
TUNE SYSTEM
AMPMODELS
DRIVE
BASS
MIDDLE
TREBLE
PRESENCE
I/O & DIG SELECT
LINE 6
16
17
14
28
CLIP
27
SIGNAL
PHONES
REVERB
CHAN VOL
OUTPUT
Guitar in
INPUT LEVEL
NORMAL PAD
POD xt
EDIT
TAP
EFFECTS
22
18
24
13
3
12
11
4
2
25



29
30
Balanced: Tip = + / Ring = -
ANALOG REAMPING INPUT/OUTPUT
Line Level Input
Unprocessed Guitar Out
SERIAL NUMBER
CAUTION
POWER REQUIREMENTS
100 - 120V~
50 - 60Hz
100 W Max.
SET MODES & LEVELS VIA I/O & DIG SELECT BUTTON
UNBAL ANALOG OUT
STUDIO: RECORDING OUTPUT
LIVE:FEED TO ONSTAGE AMP
BALANCED ANALOG OUT
AES/EBU
S/PDIF
EFFECTS SEND
EFFECTS RETURN
PEDAL
USB
MIDI
IN
OUT
GROUND
GROUND LIFT
LEFT/MONO
RIGHT
LEFT/MONO
RIGHT
L/MONO
R/MONO
LEFT
RIGHT
STUDIO: +4 dBu
LIVE:-10 dBV
IN
OUT
IN
OUT/THRU
N222
CE
31
32
33
34
35
6
7
36
8

アンプモデル

#	アンプモデル	対象モデル
0	BYPASS	(Bypasses the Amp Model)
1	TUBE PREAMP	TUBE INSTRUMENT PREAMP
2	LINE 6 CLEAN	LINE 6 21st CENTURY CLEAN
3	LINE 6 JTS-45	LINE 6 ORIGINAL
4	LINE 6 CLASS A	LINE 6 ORIGINAL
5	LINE 6 MOOD	LINE 6 ORIGINAL
6	SPINAL PUPPET	LINE 6 ORIGINAL
7	LINE 6 CHEM X	LINE 6 CHEMICAL X
8	LINE 6 INSANE	WAY TOO MANY HOURS OF SHREDDING
9	LINE 6 ACO 2	LINE 6 PIEZO ACOUSTIC 2
10	ZEN MASTER	BUDDA TWINMASTER 2x12 Combo
11	SMALL TWEED	'53 FENDER DELUXE
12	TWEED B-MAN	'58 FENDER BASSMAN
13	TINY TWEED	'60 TWEED FENDER CHAMP
14	BLACKFACE LUX	'64 FENDER DELUXE REVERB
15	DOUBLE VERB	'65 FENDER BLACKFACE TWIN
16	TWO-TONE	GRETSCH 6156
17	HIWAY 100	HIWATT CUSTOM 100
18	PLEXI 45	'65 MARSHALL JTM-45
19	PLEXI LEAD	'68 MARSHALL 'PLEXI' SUPER LEAD
20	PLEXI JUMP LEAD	JUMPERED MARSHALL SUPER LEAD
21	PLEXI VARIAC	VARIAC'D MARSHALL SUPER LEAD
22	BRIT J-800	MARSHALL JCM 800
23	BRIT JM PRE	MARSHALL JMP-1 PREAMP
24	MATCH CHIEF	'96 MATCHLESS CHIEFTAIN
25	MATCH D-30	MATCHLESS DC-30
26	RECTO DUAL	2001 MESA BOOGIE DUAL RECTIFIER
27	CALI CRUNCH	'85 MESA BOOGIE MARK IIC+
28	JAZZ CLEAN	'87 ROLAND JC-120
29	SOLO 100	SOLDANO SLO-100 HEAD
30	SUPER O	SUPRO S6616
31	CLASS A-15	'60 VOX AC-15
32	CLASS A-30 TB	'67 VOX AC-30 TOP BOOST

キャビネットモデル

#	キャビネットモデル	対象モデル
0	NO CAB	N/A
1	1X6 SUPER O	SUPRO S6616
2	1X8 TWEED	'60 TWEED FENDER CHAMP
3	1X10 GIBTONE	GIBSON EXPLORER
4	1X10 G-BRAND	GRETSCH
5	1X12 LINE 6	LINE 6 ORIGINAL
6	1X12 TWEED	'53 FENDER DELUXE REVERB
7	1X12 BLACKFACE	'65 FENDER DELUXE REVERB
8	1X12 CLASS A	VOX AC-15 W/ GRAYBELLS
9	2X2 MINI T	FENDER MINI TWIN
10	2X12 LINE 6	LINE 6 ORIGINAL
11	2X12 BLACKFACE	'65 FENDER BLACKFACE TWIN
12	2X12 MATCH	'96 MATCHLESS CHIEFTAIN
13	2X12 JAZZ	ROLAND JC-120
14	2X12 CLASS A	VOX AC-30 TB
15	4X10 LINE 6	LINE 6 ORIGINAL
16	4X10 TWEED	'58 FENDER BASSMAN
17	4X12 LINE 6	LINE 6 ORIGINAL
18	4X12 GREEN 20's	MARSHALL W/ GREENBACK 20'S
19	4X12 GREEN 25's	MARSHALL W/ GREENBACK 25'S
20	4X12 BRIT T75	MARSHALL W/ GR-T75'S
21	4X12 BRIT V30'S	MARSHALL W/ VINTAGE 30'S
22	4X12 RECTO	MESA W/ CUSTOM CELESTIONS

アンプ名、キャビネット名、エフェクト名はそれぞれの所有者の商標で、Line 6社と関係はありません。このマニュアルではLine 6のデジタルモデリングテクノロジーを駆使し、独自に開発された音を適切に表現するためだけに使用されています。

エフェクトモデル

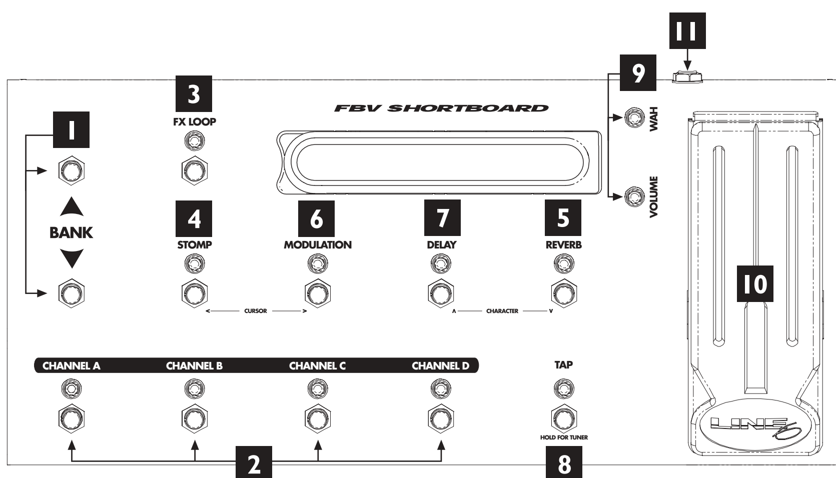
ペダル	対象モデル
FACIAL FUZZ	FUZZ FACE
FUZZ PI	BIG MUFF PI
SCREAMER	TS 808
CLASSIC DIST	RAT
OCTAVE FUZZ	OCTAVIA
BLUE COMP	BOSS CS-1
RED COMP	DYNA COMP
VETTA COMP	LINE 6 ORIGINAL
AUTO SWELL	LINE 6 ORIGINAL
AUTO WAH	MUTRON III

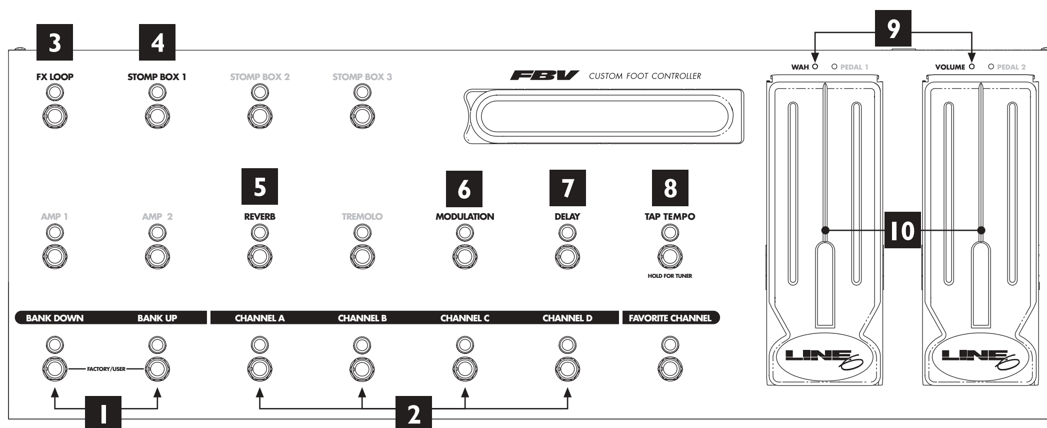
モジュレーション	対象モデル
SINE CHORUS	LINE 6 ORIGINAL
ANALOG CHORUS	CE-1 CHORUS
LINE 6 FLANGER	LINE 6 ORIGINAL
JET FLANGER	ADA FLANGER
PHASER	PHASE 90
U-VIBE	UNI VIBE
OPTO TREM	FENDER OPTO
BIAS TREM	VOX BIAS
ROTARY DRUM & HORN	LESLIE 145
ROTARY DRUM	FENDER VIBRATONE
AUTO PAN	LINE 6 ORIGINAL

ディレイ	対象モデル
ANALOG	BOSS DM-2
ANALOG W/ MOD	EH MEMORYMAN
TUBE ECHO	EP-1 ECHOPLEX
MULTI-HEAD	ROLAND SPACE ECHO
SWEEP ECHO	LINE 6 ORIGINAL
DIGITAL	LINE 6 ORIGINAL
STEREO DELAY	LINE 6 ORIGINAL
PING PONG DELAY	LINE 6 ORIGINAL
REVERSE	LINE 6 ORIGINAL

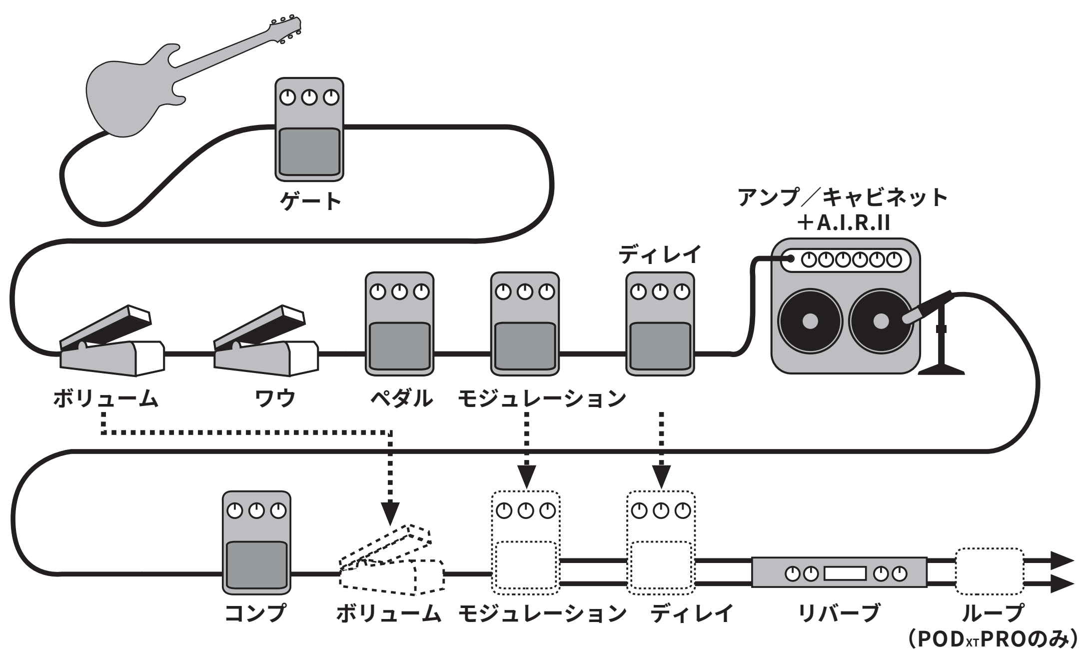
リバーブ
LUX SPRING
STD SPRING
KING SPRING
SMALL ROOM
TILED ROOM
BRITE ROOM
DARK HALL
MEDIUM HALL
LARGE HALL
RICH CHAMBER
CHAMBER
CAVERNOUS
SLAP PLATE
VINTAGE PLATE
LARGE PLATE

FBVシリーズ・フット・コントローラ



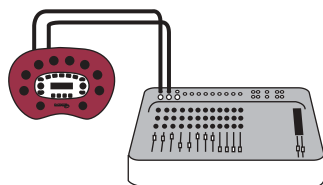


信号の流れ／エフェクトルーティング

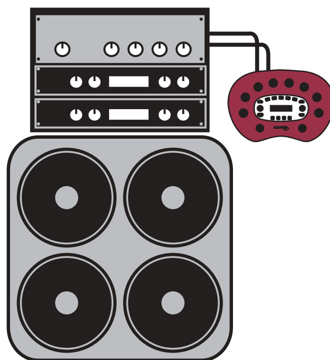


接続例

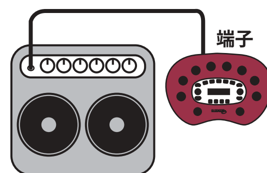
ダイレクト（スタジオ／PA）



キャビネットアンプ



コンボ



マイクのA.I.R設定

MIC 1..57 ON AXIS
MIC 2 ....57 OFF AXIS
MIC 3 ....421 DYNAMIC
MIC 4 ....67 CONDENSER

アンプ名、キャビネット名、エフェクト名はそれぞれの所有者の商標で、Line 6社と関係はありません。このマニュアルではLine 6のデジタルモデリングテクノロジーを駆使し、独自に開発された音を適切に表現するためだけに使用されています。

ユーザー登録のお願い

この度はLINE 6 PODxt/PODxt proをお買い上げいただき誠にありがとうございます。

ユーザーサービスをご利用いただくためにはユーザー登録が必要になります。（登録は無料です）

登録後、次のようなサービスを受けることができますので、必ずご登録くださいますようお願い致します。

- コルグ・カスタマー・サポートLINE 6 登録ユーザー窓口の利用（IDナンバーをご確認させていただきます）
- バージョンアップのお知らせや、機能追加などの情報提供(無料)
- メジャー・バージョンアップ時の日本語マニュアルの配布(無料)
- 日本語マニュアルの再発行（有料）
- 破損CD-ROMの再発行（CD-ROM添付商品の場合－有料）

ご登録方法

1. オンラインでのご登録
   コルグ・ホームページ（ http://www.korg.co.jp/Support/ ）にアクセスして必要事項をご入力ください。ご登録内容の変更もできます。

2. ご愛用者カードでのご登録
   保証書と対になっているご愛用者カードに必要事項をご記入の上、切り離して投函してください。登録が完了しますと、弊社から個人IDナンバーを記入したユーザー登録完了通知をお送りいたします。
   ※ メールでの連絡をご希望の方は、愛用者カードに「メール希望」とお書き添えいただき、「E-MAIL」欄にメールアドレスをご記入ください。
   ※ ご愛用者カードをお送りいただいた後に変更が生じた場合は、新旧登録内容を明記の上、FAX、郵便、eメールのいずれかでご連絡ください。

   FAX番号：03-3323-5945
   E-MAILアドレス：kid-master@korg.co.jp
   〒168-0073　東京都杉並区下高井戸1-15-12
   株式会社コルグ　KIDユーザー登録係

   注） ご登録には「シリアルNo.」が必要です！
   シリアルNo.は外箱、及び本体裏面に貼付されているバーコードの右上に記載されている数字を記入してください。
   （例 (21)SPD5H5246002059）

保証書と対になっている愛用者カードは、ソフトウェアのバージョンアップ等のお知らせのために必要になりますので、必ず弊社にご返送ください。

目 次

クイックスタートガイド .... 1•1

はじめに .... 1•2

PODXTの生い立ち .... 1•2
Line 6 のご紹介 .... 1•2
モデリング .... 1•3
アンプ／キャビネット／エフェクトモデル .... 1•3
A.I.R.マジック .... 1•4

パネルコントロールノブ、端子 .... 2•1

PODXT Pro .... 2•8

セットアップ .... 3•1

基本操作 .... 3•1

PODXT—スタジオ内でのセットアップ .... 3•1

接続先（WHAT ARE YOU CONNECTING TO?）ページ .... 3•2
入出力 .... 3•2
レベルの設定 .... 3•2
電子機器のノイズについて .... 3•3
ペダル機能 .... 3•3
MIDI機能 .... 3•3

PODXT — ライブでのセットアップ .... 3•4

ラックマウント .... 3•4
セットアップ方法 .... 3•4
接続先（WHAT ARE YOU CONNECTING TO?）ページ .... 3•4
アンプでベストなサウンドを出すには .... 3•5
外部ペダルとPODXT .... 3•5

PODXT Pro — 接続と設定 .... 3•6

入力の選択 .... 3•6
入力／デジタル出力の設定 .... 3•6
FORMATパラメータ： .... 3•7
MODEパラメータ： .... 3•7

GAINパラメータ: ... 3•7
接続先(WHAT ARE YOU CONNECTING TO?)ページ ... 3•8
FX LOOP(エフェクトループ)パラメータ ... 3•9
AES/EBUフォーマットとS/PDIFフォーマット ... 3•10
電子機器のノイズについて ... 3•10
ペダル機能 ... 3•10
MIDI機能 ... 3•10
PODxt Proでのリアンプ ... 3•11
アナログのリアンプ ... 3•11
デジタルのリアンプ ... 3•12

サウンドの作成と保存 ... 4•1

チャンネル・メモリーの呼び出し ... 4•1
エフェクト設定の呼び出し ... 4•1
ペダル感覚のコントロール ... 4•1
エディットの基本操作 ... 4•2
2回押しで簡単なアクセス ... 4•2
エディットメニューの中身 ... 4•2
アンプノブ設定 ... 4•2
キャビネット/マイク設定 ... 4•3
エフェクトのエディット ... 4•3
音色をテンポに合わせる ... 4•6
リバーブ ... 4•6
ワウとボリューム ... 4•6
FX TWEAKのノブ機能割り当て/テンポの割り当て ... 4•7
保存操作 ... 4•7
チャンネル・メモリーの保存 ... 4•8
アンプモデルのカスタ—セーブ ... 4•8
エフェクト設定のカスタ—セーブ ... 4•9
1つのチャンネルの呼び出し ... 4•10
プリセット一式の呼び出し ... 4•10
MIDIダンプ ... 4•10

アンプ&キャビネットモデル ... 5•1

モデルとなったアンプ&キャビネットについて ... 5•1
LINE 6のオリジナル ... 5•2
LINE 6 CLEAN ... 5•2

Line 6 JTS-45 ..... 5•2
Line 6 Class A ..... 5•2
Line 6 Mood ..... 5•2
Line 6 Spinal Puppet ..... 5•2
Line 6 Chemical X ..... 5•2
LINE 6 INSANE ..... 5•3
Line 6 Piezacoustic 2 ..... 5•3
Zen Master ..... 5•3
Small Tweed ..... 5•4
Tweed B-Man ..... 5•4
Tiny Tweed ..... 5•5
Blackface Lux ..... 5•5
Double Verb ..... 5•6
Two-Tone ..... 5•7
Hiway 100 ..... 5•7
Plexi 45 ..... 5•8
Plexi Lead 100 ..... 5•8
Plexi Jump Lead ..... 5•9
Plexi Variac ..... 5•10
Brit J-800 ..... 5•10
Brit JM Pre ..... 5•11
Match Chief ..... 5•11
Match D-30 ..... 5•12
Recto Dual ..... 5•12
Cali Crunch ..... 5•13
Jazz Clean ..... 5•13
Solo 100 ..... 5•14
Super O ..... 5•14
Class A-15 ..... 5•15
Class A-30 TB ..... 5•16
Tube Preamp ..... 5•16
キャビネットモデル ..... 5•18

エフェクト ..... 6•1

ペダル･エフェクターについて ..... 6•1

エフェクトの基本的なエディット ..... 6•1
詳細なエディット ..... 6•2
ペダル･エフェクター：ディストーションとオーバードライブ ..... 6•2
ペダル･エフェクター：コンプレッサー ..... 6•2

コンプレッサー／ゲート•エフェクト .... 6•3
モジュレーション•エフェクト .... 6•3
タップテンポ .... 6•4
リバーブ .... 6•5
スプリングリバーブ .... 6•5
ルームリバーブ .... 6•6
ホール .... 6•6
プレート .... 6•7
The Stomp Effects — Facial Fuzz .... 6•8
Fuzz Pi .... 6•8
Screamer .... 6•9
Classic Distortion .... 6•9
Octave Fuzz .... 6•10
Blue Comp .... 6•10
Red Comp .... 6•11
Auto Wah .... 6•11
Vetta Comp .... 6•11
Auto Swell .... 6•12
モジュレーション•エフェクト .... 6•12
Sine Chorus .... 6•12
Line 6 Flanger .... 6•12
Opto Trem .... 6•12
Bias Trem .... 6•12
Auto Pan .... 6•12
Analog Chorus .... 6•13
Jet Flanger .... 6•13
Phaser .... 6•14
U-Vibe .... 6•14
Rotary Drum+Horn .... 6•15
Rotary Drum .... 6•15
The Delay Effects — Analog Echo .... 6•16
Analog w/Mod .... 6•16
Tube Echo .... 6•17
Multi-Head .... 6•17
Sweep Echo .... 6•18
Digital Delay .... 6•18
Stereo Delay .... 6•18
Ping Pong Delay .... 6•19
Reverse Delay .... 6•19

エディットとMIDIコントロール .... 7•1

MIDIの基本 .... 7•1

MIDIとは？ .... 7•1

MIDI IN、MIDI OUT .... 7•1

MIDIチャンネル .... 7•2

MIDIメッセージ .... 7•3

PODxtのプログラムを他の機器にバックアップ .... 7•4

全チャンネルの送信 .... 7•4

一部データの送信 .... 7•4

データの呼び出し .... 7•5

MIDIを使ってできること .... 7•6

MIDIプログラムチェンジでPODxtのチャンネル切り替え .... 7•6

MIDIコントローラーを使ったPODxtのサウンド調整 .... 7•6

PODxtのMIDIオートメーション .... 7•6

MIDIセットアップ時のトラブルシューティング .... 7•7

フット•コントローラの利用 .... 8•1

FBVシリーズ•フット•コントローラ .... 8•1

FBV Shortboardについて .... 8•1

FBV Shortboardの接続 .... 8•1

スイッチ操作 .... 8•1

FBV Shortboardを使った保存とネーミング .... 8•3

EX-1の使用 .... 8•4

付録A：アンプモデル .... 9•1

付録B：MIDIプログラムチェンジ .... 9•2

付録C：MIDIコントロール .... 9•3

付録D：FBVシリーズMIDIコントロール .... 9•7

インターネットの利用

Line 6は最新のパワフルな技術をミュージシャンの皆様にご利用いただくことを使命としています。その一部としてインターネットがLine6のユーザーの皆様にとって価値ある情報ソースとなりますよう力を注いでいます。

Line6ホームページ（**http://www.line6.com**）

Line 6のホームページは皆様に情報をおとどけする効果的な手段です。PODxtを最大限ご利用いただくためにいろんな情報を満載しています。Eメールで製品サポート、使い方のヒントやコツ、USBドライバや他の無償ソフトウェアなどの情報を手に入れたり、Line 6での最新ニュースや製品情報を読んだりとさまざまなことができます。

サウンドや意見をやりとりする**Line 6フォーラム：ホームページ**では他のPODxtユーザーとサウンドやアドバイスをやりとりしたり、チャットできます。

インターネットはまだ？そんな方はこれが思いきってインターネットにのるチャンスです。

注意

Line 6のホームページは日本語表記はありません。
又、Line 6のホームページを利用して発生したいかなる問題についても弊社は責任を負いかねますのであらかじめご了承の程お願い致します。

クイックスタートガイド

*このページでは基本的な操作を手短に説明します。PODxt Proをお持ちの方で標準のギター入力／アナログ出力以外の端子を使う場合は、第2章のコントロール類についてお読みになり、***3-6ページ「接続と設定」***で入出力について詳しく学んでください。*

1. **[OUTPUT]**ノブをゼロに下げます。
2. **[LEFT/RIGHT OUTPUT]**端子をレコーダーやミキサーの入力端子に接続するか、**[LEFT OUTPUT]**端子をギターアンプの入力端子に接続します。ヘッドフォンをPODxtの**[PHONES]**端子に接続すれば、ヘッドフォンだけで演奏が聴けます。
3. 付属のACアダプタ(PODxt)、電源コード（PODxt Pro）を本機に接続し、もう一端をコンセントに差し込みます。
4. ギターをPODxtの**[INPUT]**端子（PODxt Proは**[GUITAR IN]**端子）に接続します。
5. **電源**スイッチをオンにして電源を入れます。
6. PODxtは直接レコーディングシステムに接続してすぐに使えるようになっています。*ギターアンプに接続する場合は、ベストな音色が使えるよう、どんなアンプに接続するかをPODxtに教え込むことが大切です。*
   [TUNER/SYSTEM]ボタンを押してから**[SELECT]**ノブを1目盛りだけカチッと右に回します。**DEST**（デスティネーション）パラメータの下にあるボタンを押してから**[EFFECT TWEAK]**ノブを回して、接続するアンプのタイプを設定します。この設定はヘッドフォンを接続すると自動的にキャンセルされます。
7. **[AMP MODELS]**ノブでアンプモデルを選択します。**[CHAN VOL]**ノブを最大に設定し、**[DRIVE]**ノブ、**[BASS]**ノブ、**[MID]**ノブ、**[TREBLE]**ノブ、**[PRESENCE]**ノブを好みに合わせて設定します。**[OUTPUT]**ノブで出力レベルを設定します。
8. **[EFFECTS]**ノブでエフェクトをロードし、**[REVERB]**ノブと**[EFFECT TWEAK]**ノブを回してサウンドを好みに合わせて調整します。**[TAP]**ボタンを押して、選択エフェクトのスピードを設定します。
9. **[SELECT]**ノブ、またはディスプレイ下の4つのボタンのいずれかを押してプリセットの音色を選びます。この4つのボタンのどれかを2回押すと、各ノブの実際の位置がそのまま音色に適用される、**「マニュアルモード」**になります。

はじめに

PODxtの生い立ち

このたびはPODxtをお買い上げいただきありがとうございます。PODxtはレコーディング、練習、プリアンプ、そしてクリエイティブなデジタルエフェクターとして、さまざまな用途でお使いいただけます。もちろん1台に限らず複数台使ってもOKです。ギターアンプが初めて使われて以来、PODxtの登場は画期的な出来事なのです。

PODxtはLine 6 Vettaシリーズのアンプでご好評を得た**Point to Point Modeling**（ポイント•トゥ•ポイント•モデリング）技術を採用し、今ではギターレコーディング業界の標準とまでなった、コンパクトでユニークなPODのパッケージデザインを採用し、素晴らしいサウンドを生み出します。前世紀のギターアンプやエフェクトペダルの音色を引き継ぐとともに、妥協のない優れたレコーディング／ダイレクトサウンドを可能にします。

Line 6 のご紹介

ご存じの方も多いでしょうが、Line 6は数年前、新しいタイプのギターアンプを片手にデビューしました。ギタリストのために、デジタル•ソフトウェア•モデリング技術をコンボアンプに採用した最初の会社です。ギタリストは録音時のアンプサウンドにこだわりますが、クラシックアンプを狭いスタジオに積み上げたり、お金に糸目をつけずに腕利きの録音エンジニア達に協力してもらうなどは、実際には不可能です。そこで、当社のモデリング技術をインゲン豆の形をした小さなPODという製品に集約したのです。こうしてPODはギター録音の世界を永久に塗り替えてしまいました。

PODが世界を震撼させてから、今度はこのモデリング技術をステップアップさせてみよう、ということになりました。一つの山を制覇したら次に別の山に挑戦する、というのが登山家の精神です。そこで当社の天才エンジニアたちを極秘の研究室に集め、更にアンプやペダルエフェクタ類をそろえて、Point to Point Modeling（ポイント•トゥ•ポイント•モデリング）と呼ぶ技術を開発しました。この技術は、評判の高い当社Vettaアンプに初めて採用されました。このアンプは夢のようなアンプ／キャビネット／エフェクトモデルと他に類を見ないサウンドで、世界アンプ•ヘヴィーウエイト級チャンピオンの候補になっています。そして今回、この新技術をおなじみのPODにも注ぎ込んでできたのが、PODxtです。

素晴らしいギタートーンをPODxtからいつでも生み出せる、その秘密は•••••。

モデリング

チューブ（真空管）は伝統的なギターアンプの心臓部であり、あの暖かみのある倍音豊かなアンプサウンドの源です。トランジスタではチューブアンプの暖かみと音質を再現することはできません。真空管とトランジスタを併用したアンプも、暖かみのあるサウンドを得ることはできませんでした。オールチューブアンプはそれらとは比べ物にならないのです。

ギターサウンドという課題に、チューブアンプについてのすべてを研究しようと、作業にとりかかりました。3年かかって分析し学んだ事は、色々なギターアンプの状態によって、異なる種類のチューブがどう反応するか、ということです。入力信号の処理方法、信号にトーン（音色）やシェイプ（形）ができあがる過程、歪み始める点、歪みの音質と特性、どれも複雑なものばかりですが全てをデータ化することに成功しました。

すべてを調べ上げた後、デジタルについての専門知識を駆使して、チューブやスピーカーキャビネットの信号処理をデジタル領域内でシミュレートするソフトウェアを開発したのです。

こうして革新的なDSP（デジタル信号処理）ソフトウェアを基礎にしたモデリング技術はPODxtなどのLine6製品に創造という力を与えたのです。

アンプ／キャビネット／エフェクトモデル

世界中のギタリストたちが「クラシックサウンド」「ヴィンテージサウンド」と呼ぶ数々の機材をもとにした音色とノウハウが、アンプ／キャビネット／エフェクトモデルとしてPODxtに入っています。

音量レベルや音色、ゲインコントロールの設定を変えることによってどんな効果があるかを耳でモニターしながら、ミュージシャンにインスピレーションを与えた実物の機器によるサウンドを注意深く科学的に比較して、これらのモデルをていねいに調整しました。またモデルにした機器のゲインとイコライザー特性を注意深く測定し、ノブを変更したときに、実物のアンプを使ってサウンドを調整したときと同じ効果が出るようにしました。

トーンコントロールの中心周波数、スロープ、カット／ブーストレンジの精密な分析、加えて各機器をユニークなものにしている主たるファクターをも分析しました。古いアンプやエフェクトは非常に敏感に相互反応する回路を搭載しているので、ノブを1つ回しただけで別のノブによる調整具合も変わってきます。PODxtでは、このような細部にもこだわって設計されています。

こうしてできあがったアンプ／キャビネット／エフェクトモデルがPODxtの基礎となりました。更に明言しますと、

1　Line 6のモデリングはLine 6が特許を持つ100%デジタル技術です。

2　Line 6のモデリングはサンプリングでもソリッドステートでもありません。特別なギターやピックアップ、ケーブルは必要ありません。

A.I.R.マジック

Line 6のもう一つの革新的な技術は、A.I.R.ダイレクトレコーディングアウトです。A.I.R.は**a**coustically **i**ntegrated **r**ecordingの略で、レコーディング中にアンプ、キャビネット、スピーカー、マイク、レコーディング室などの相互作用によって作り出される音色特性を十分に研究した結果生まれたものです。

多くのプリアンプ、アンプ、ダイレクトボックススタイルのアンプでは、キャビネットやスピーカーのシミュレーションに限界があり、スピーカー、木質、その他デザイン要素から生じる様々な音色や変化の再現が不可能なのです。ですから、従来の多くの製品ではマイクの選択やマイク位置が音色へ与える多大な影響なども再現できませんし、レコーディングに於ける空間の微妙なアンビエンスも再現できないのです。

その結果一見使いやすい音のように思える製品でもギターサウンドの「生命」を再現でき損なっていることがあるのです。

PODxtではアンプモデルとA.I.R.技術を組み合わせ、納得のいくギターサウンドが録音できるような土台を作り、本物のアンプやスピーカーキャビネットを通して演奏したときと同じフィーリングを持つトーンを作ることによって、優れたサウンドを提供します。

- ギターアンプ回路の違いによる音の差は、選択したアンプモデルに表われます。それぞれのモデルに長期に渡る研究の成果を見ることができます。
- ギターアンプではギターの信号が回路を通ると、スピーカーキャビネットのスピーカーに出力されます。スピーカーのスペック、スピーカーの数、スピーカーの並び方でギターのトーンがかなり違ってきますし、木の箱自体の構造によっても違ってきます。たとえば開放型のキャビネットに入った12インチのスピーカー搭載Marshallヘッドアンプでは、密閉型の4x12（12インチスピーカー4個搭載）キャビネットのMarshallヘッドアンプとはサウンドがかなり違います。Line 6はバーチャルスピーカーキャビネットとして綿密に構築して、本物のキャビネットが素晴しいギターサウンドを生む上での影響をシミュレートしました。
- サウンドがスピーカーキャビネットから出ると、レコーディング場面で次に重要なことは、そのサウンドを受け取るマイクロフォンです。ギター録音では色々なマイクロフォンを選んで、これを色々な位置に置いてサウンドを作ります。スピーカーコーンに直接向いたマイクロフォンは、方向をはずしたマイクロフォンとはまた違う音を拾います。Line 6ではマイクがギターサウンドに加える音色とマイクの位置を色々変えたときの影響を注意深く分析して、細かなマイク位置をPODxt上で設定可能にしました。
- ギターアンプ、キャビネット、マイクロフォン以外にも部屋には色々なものがあります。その部屋の様子がギターサウンドにもかなり影響します。リバーブで基本的な空間の特性をつかみ、部屋の壁や床、天井に反射するサウンドの効果をシミュレートします。ところがサウンドがスピーカーとマイクの間の空気を伝わるときの、サウンドの「広がり」にかかわってくる微妙な要素があります。この最後の要素が、部屋の中の聞き手の位置、ギターサウンドが出てくる方向、ギターと聞き手の距離に対する感覚を与えるカギとなります。

このようなサウンドを形作る重要な要素のすべてをPODxtでは考慮に入れています。[AMP MODELS]ノブを回して任意のアンプシミュレーションを選んでください。PODxtは自動的に、適切なキャビネットとマイクセットアップを使ったアンプのモードとなり、レコーディングスタジオ空間にある空気を伝わってくるようなサウンドを出します。リバーブを適当にかけてやれば、マイクで拾ったようなリアルなサウンドが録音できます。ボタンを押してノブを回せば、別のキャビネットに変えたり、マイクやマイク位置を変えたり、あるいは仮想スタジオ内の音の「広がり」を調整することができます。

A.I.R.ダイレクトレコーディングアウトはLine 6の専用であり、アンプ／キャビネット／エフェクトモデルとの組み合わせがPODxtのダイレクトレコーディングサウンドへの要となっています。

パネルコントロールノブ、端子

本取扱説明書巻頭のイラストを参照しながら、本書をお読みになることをおすすめします。また、イラストには簡単な操作方法も記載されています。本書の説明で出てくる四角の白ヌキ数字は、巻頭のイラストの番号に対応しています。巻頭のイラストページにはFBV、FBV Shortboardフット・コントローラのイラスト、信号経路図、接続図もあります。

1 電源スイッチ

PODxTの電源をオン／オフします。PODxT Proには標準のIECグラウンド電源ケーブルが同梱されています。PODxTは付属の**ACアダプターPX-2**を必ずお使いください。

2 [INPUT/GUITAR IN]端子

ギターをここに接続します。モノ、アンバランス型接続端子です。

3 [PHONES]端子

練習時など外に音を出したくないときにヘッドフォンをここに接続します。ヘッドフォンの音量は**[OUTPUT]**ノブで調整します。ヘッドフォンを付けた時に大音量で鼓膜が破れないよう、音量を必ず確認してください。最初は[VOLUME]ノブを10時の位置に設定してからヘッドフォンを付け、必要に応じて音量を調整してください。

ヘッドフォンからサウンドが適切に聞こえるよう、PODxTはヘッドフォンを接続すると自動的に「スタジオモード」に入ります（詳細は**3-2**ページ「接続先（WHAT ARE YOU CONNECTING TO?）ページ」をお読みください）。

4 [OUTPUT]ノブ

全体の出力レベルとヘッドフォンのレベルを調整します。このレベルを変更しても音質は変わりませんので、音量レベルに関係なく自分の好きなサウンドが演奏できます。PODxTのメモリーに設定を保存するとき、このレベル設定は保存されません。

*PODxT Proでは、このノブ設定はライブモード時のXLR出力レベルには影響しません。（ライブモードの詳細は、**3-5**頁「接続」をお読みください。）*

この出力レベルが最大のとき、PODxTのSN比は最適になります。低めに設定すると余分なノイズが入る可能性があります。レコーディング、ミキシングなどで出力レベルをできるだけ最大に設定するには、マイクやギターのレベル入力ではなく、**ラインレベルで動作する機器にPODxTを接続してください**。ラインレベル入力ならPODxTの出力レベルをほぼ最大まで上げると最適なサウンドが得られます。お使いの機材がマイク／ラインレベル入力端子を持っているなら、トリム設定でその入力を最小レベルに落とし、PODxTの出力レベルを最大に上げます。

5 [LEFT/RIGHT OUTPUT]端子

バランス型1/4インチTRS（チップ／リング／スリーブ）フォン端子です。業務用+4dBuのバランス型機器に対応します。また、アンバランス型−10dBV機器と標準のギターケーブルにも対応します。PODxtをモノで使用する場合は[LEFT OUTPUT]端子を使用してください。

6 [PEDAL]端子

オプションのLine 6 FBVまたはFBV Shortboardフット・コントローラを接続します。Line 6 Floor BoardおよびFB4には対応していません。

7 [USB]端子

本機の[USB]端子をコンピュータに接続し、さまざまなレコーディングソフトで録音ができます。付属のUSBケーブルと、PODxtドライバ・ソフトウェアをお使いください。このドライバ・ソフトウェアと使い方は、**www.korg.co.jp/KID/Line6/PodxtPro/**にてご確認ください。

8 [MIDI IN/OUT]端子

MIDI機器に接続して、プログラム・チェンジ・メッセージでチャンネル・メモリーを選択したり、コントローラやSysexでPODxtを自動設定します。PODxtの**MIDI OUT**端子は別のMIDI機器のMIDI IN端子に、PODxtのMIDI IN端子は別の機器の**MIDI OUT**端子に接続します。MIDI機器とのセットアップやMIDIでできることなどについては、**第7章「エディットとMIDIコントロール」**をお読みください。

9 [DRIVE]ノブ

選んだアンプモデルの入力にどれだけドライブをかけるかを設定します。マスターボリュームのないギターアンプの入力レベルコントロールと同じで、設定を大きくするほど歪んだサウンドになります。

10 トーンコントロールノブ[BASS] [MIDDLE] [TREBLE] [PRESENCE]

ふつうのギターアンプと同じで、アンプモデルを変更するとノブの反応も変わります。選んだアンプモデルの元となった実物のアンプのトーンコントロールと同様の動作をします。

11 [CHAN VOL]ノブ

使用チャンネルの音量レベルをコントロールします。2つのチャンネルメモリーに保存するサウンド（たとえばリズムギター音とリードギター音）のレベルバランスをとります。ふつうはこのノブをなるべく高く設定してS/N比を最適にします。ただし、ディスプレイにCLIPインジケータが点灯したら、ボリュームを下げてください。

[ヒント]：[CHAN VOL]を最大にしてクリーンなチャンネルを保存してから、[CHAN VOL]を下げてクランチサウンドやリード音色を保存するといいでしょう。

[ヒント：]気に入ったサウンドはなるべく音量を大きくして弾きたいけれど、リードギターとリズムサウンドとの音量差、あるいは、クリーンなサウンドと濁ったサウンドの音量差も適度に付けたい、というのであれば、うまいバランスを出すために、まず好みのクリーンサウンドから設定します。ギターを思いっきり弾いた時にディスプレイのCLIPインジケータが点灯しない程度で、各クリーンサウンドの[CHAN VOL]をなるべく高く設定して保存します。次に、各サウンド間のバランスをチェックして、音量が大きすぎるものがあれば他のサウンドと同じくらいになるよう下げます。今度は濁ったクランチ／リード音色を選び、これがクリーンサウンドとうまく噛み合うよう、[CHAN VOL]ノブのレベルを多少低く設定して保存します。

あとでPODxtを使うときは、[OUTPUT]ノブで出力レベルを必要に応じて設定するだけです。こうすれば、音色間の音量差を心配せずに各種サウンドを切り替えることができます。

12 [REVERB]ノブ

このノブでリバーブレベルを調整します。PODxtには数種類のリバーブ（スプリングリバーブ、ルームリバーブ、チェンバーリバーブ、ホールリバーブ、プレートリバーブ）があります。

13 [EFFECTS]ノブ

エフェクトやエフェクトの組み合わせの設定を選ぶノブです（エフェクトの詳細は**6章の「ペダル・エフェクトとエフェクト」**をお読みください）。エフェクト設定は、アンプモデルと組み合わせることができる、仮想のペダルボードやラックマウントのエフェクタのようなものです。このノブを回すと、ロードされるエフェクト設定が表示され、エフェクトがすぐに変わるのがわかります。エフェクトボタンが点灯するので、どのエフェクトがオンになっているかわかります。64のプリセットエフェクトが搭載されています。

14 [EFFECT TWEAK]ノブ

選んだエフェクトを調整します。ノブを右に回すほどエフェクトの効果が深く、大きく、速く、長く、あるいはもっと単調になります（つまり、効果が増大します）。調整内容はディスプレイに表示されます。エフェクトのスピードは**[TAP]**ボタンで設定します。詳細は、**4章の「サウンドの作成と保存」**をお読みください。対象のエフェクトがオフになっていると、この**[EFFECT TWEAK]**ノブを回しても何の効果もありません。また、**[EDIT]**ボタンまたは**[TUNER]**ボタンが点灯していると、**[EFFECT TWEAK]**ノブはパラメータ値を調整します。

15 [AMP MODELS]ノブ

このノブを回してアンプサウンドを切り替えます。PODxt内部の電子「回路」を変更するようなものです。（詳細は、**5章の「モデルアンプ／キャビネット」**をお読みください。）アンプモデルを選ぶと、自動的にキャビネット／マイクモデルも選択されます。たとえばBRIT HI GAINモデルを選ぶと（ちなみにこれはヴィンテージのMarshall JCM 800ヘッドアンプをモデルにしたもの）、Marshall 4x12をベースにしたキャビネットモデルもあわせて選択されます。別のキャビネット／マイクを選ぶには**[CAB/A.I.R.]**ボタン（2-6ページ参照）を使います。

つまり、**[AMP MODELS]**ノブを回すと、自動的にアンプ関連の設定がすべて選択されるわけです。DRIVE、BASS、MID、TREBLE、PRESENCE、CAB/A.I.R.、などはすべて選んだアンプモデルによって設定も決まるので、このノブを回すだけですぐに使えるサウンドが出ます。操作に慣れたらこのアンプ関連の設定を調整してアンプモデルをそれぞれ自分なりにカスタム化できます。*ただし、マニュアルモードでは、DRIVE、BASS、MID、TREBLE、PRESENCE、CHAN VOL、REVERBはアンプモデルで自動設定されるのではなく、実際のノブ位置の値が適用されます。この詳細は**5章**で説明します。*

16 [SELECT]ノブ

PODxtにはLine 6があらかじめプログラムしたアンプ／エフェクト設定の数々を保存する64個のチャンネルロケーションがあります。これが4つのチャンネルごとに16個のバンクに分類されています。（この4つのチャンネルは**A、B、C、D**と呼ばれます。）各バンクを、仮想の4チャンネルギターアンプとして考えてみるとわかりやすいでしょう。この分類は、オプションのフット・コントローラ（FBVおよびFBV Shortboard）でも使われています。このコントローラーについては**8章**で説明します。

PODxtのチャンネルは**[SELECT]**ノブで選びます。ディスプレイの下にある4つの**「ソフトボタン」**のうちの一つを押すと、現在のバンク内の別のチャンネルがロードされます。任意のチャンネルを呼び出すときに、**[BASS]**ノブが最小位置になっていても、呼び出したチャンネルではその設定が最大になっていることがあります。この場合、[BASS]の設

定を変更したい場合は、**[BASS]**ノブを適度に回してください。またマニュアルモードにするには、ディスプレイ下の任意のボタンを2回押します。**マニュアルモード**に入ったことがディスプレイに表示され、実際のノブ位置がそのままサウンドの要素に影響します。あとでもっと詳しく説明します。

[EDIT]、**[SAVE]**、**[TUNER/SYSTEM]**のいずれかのボタンが点灯していると、**[SELECT]**ノブはページ画面を切り替える役目を果たします。**[EDIT]**ボタンを押した場合はこのノブでエフェクト／チャンネルパラメータのページ画面が選択できます。また**[TUNER/SYSTEM]**ボタンを押した場合はチューナーとシステム全体の設定に関する画面が、**[SAVE]**ボタンを押した場合はアンプ／エフェクトのカスタマイズ機能やMIDIファイル操作に関する画面が選択できます。画面の左に上下のスクロールバーが表示されている場合は、その前後にもページ画面があることを示しています。

17 ディスプレイ

このLCD画面には各種パラメータや設定が表示されます。

1. **[EDIT]**、**[SAVE]**、**[TUNER/SYSTEM]**のいずれかのボタンが点灯している時、画面上の左にあるスクロールバーを見れば、一連の複数ページの中で現在どのページが表示されているかがわかります。試しに、このいずれかのボタンを押してスクロールバーを確認してみましょう。スクロールバーのドット（点表示）はページの位置を示しています。**[SELECT]**ノブを回すとページ画面が切り替わるとともに、このドットも動きます。最初のページではドットは一番上にあります。最後のページを出すと、ドットは一番下に来ます。
2. 各ページ画面の下には、調整できるパラメータ名が表示されています。該当パラメータ名のすぐ下のボタンを押してから**[EFFECT TWEAK]**ノブで調整します。

18 ソフトボタン

エディット内容によって機能の異なるボタンです。バンク内の4つのうちの1つのチャンネルを瞬時にロードしたり、2回押すごとに**マニュアルモードをオン／オフ**したり（前ページ**[SELECT]**ノブ参照）します。**[EDIT]**、**[SAVE]**、**[TUNER/SYSTEM]**のいずれかのボタンが点灯している時、任意の**ソフトボタン**を押すと、そのボタンの上に表示されているパラメータが選択されます。パラメータの値は**[EFFECT TWEAK]**ノブで調整します。

19 エフェクト切り替えボタン

該当するエフェクトをオン／オフします。オンになるとボタンが点灯します。

[COMP (GATE)]ボタン：ロードされたコンプレッサー・エフェクトをオン／オフします。

[STOMP]ボタン：ロードされたペダル・エフェクトをオン／オフします。

[MOD]ボタン：ロードされたモジュレーション・エフェクトをオン／オフします。

[DELAY]ボタン：ロードされたディレイ・エフェクトをオン／オフします。

このうちの**任意のボタンを2回押すと、**ロードされたエフェクトの調整や別のエフェクトのロードができます。たとえば**[COMP]**ボタンを2回素早く押すと、コンプレッサーとゲートのエディット画面に入ります。**[STOMP]**ボタンを2回押すと、ペダル・エフェクトの最初のエディット画面に入ります。同じボタン（あるいは[EDIT]ボタン）を2回押すとエディットモードを抜けます。

20 [CAB/A.I.R.]ボタン

このボタンを1回押すと、アンプモデルと組み合わせるキャビネットモデルを選択し、キャビネットで使用するマイク、マイクが音を拾うスペースの量を設定できます。エフェクト切り替えボタンと違って、オン／オフ切り替えではありません。**キャビネットとマイクを切り替えるボタンです。**

キャビネットがオフの時、このボタンは消灯します。

21 [SAVE]ボタン

PODxtで調整したサウンドを保存するときにこのボタンを使います。詳しくは**第4章「サウンドの作成と保存」**をお読みください。

プリセットのサウンドを使うとき、現在のバンクナンバー、チャンネルの文字、チャンネル名が画面上部に表示されます。エディットモードのページ画面でノブを回したりパラメータを変更したりすると、バンクナンバーの横に*印が表示されます。これは保存されているチャンネルの設定を変更したので、調整内容をとっておきたければ保存しなさい、という意味です。

変更内容をチャンネルメモリーに保存するには**[SAVE]**ボタンを押します。ボタンが点滅します。ロードしているチャンネルに同じ名前で上書きする場合は、もう1度**[SAVE]**ボタンを押します。先ず名前を変更したい場合は真中の2つの**ソフトボタン18**を使って文字を選び、右のソフトボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]**ノブを回して変更します。**[DEST]**の下のソフトボタンを押して**[EFFECT TWEAK]**ノブを回すと保存メモリーが変更できます。16あるバンクのチャンネルA、B、C、Dが切り替わります。保存先を一つ選んでもう一度**[SAVE]**ボタンを押します。ボタンの点滅が止まり、選んだメモリーには以前のサウンドに代わって現在のサウンドが保存されます。保存できたら**[SELECT]**ノブを回すだけでこのサウンドをいつでも呼び出せます。（これをフットコントロールでコントロールする方法は**第8章**をお読みください。）

PODxtのチャンネルメモリーを使わず、マニュアルモードでノブ調整したサウンドをメモ

リーに保存するのも同じ方法です。**[SAVE]**ボタンを押してから**DEST表示下のソフトボタン(▲)**、**[EFFECT TWEAK]**でメモリーを選び、もう一度**[SAVE]**ボタンを押します。

保存を始めているときに、保存したくない、と気が変わったら他のいずれかのボタンを押すと保存操作がキャンセルできます。(または**[SAVE]**ボタンを押してから15秒以上何も操作しないでいると自然に保存操作がキャンセルされます。)

また、あやまって大切なサウンドの上に上書きしてしまってもだいじょうぶです。**[SAVE]**ボタンでアクセスするページから、チャンネルメモリーの工場プリセットをそのまま呼び出すことができます。詳細は、4章をお読みください。

[SAVE]ボタンを使って、アンプモデルやエフェクト設定を自分の好みにカスタム化することもできるので、**[AMP MODELS]**ノブや**[EFFECTS]**ノブを回すとすぐにカスタム化されたアンプやエフェクトも選べます。詳細は、**4章**をお読みください。

22 [EDIT]ボタン

[EDIT]ボタンを押してサウンドを満足ゆくまでエディットできます。このボタンが点灯している時に**[SELECT]**ノブを回すと、チャンネルメモリーを構成しているすべてのパラメータを搭載した各ページが選択できます。ここでエフェクトパラメータを設定したり、キャビネットとマイクを選択したり、パラメータを**[EFFECT TWEAK]**ノブに割り当てたりします。エディットの詳細は**4章**をお読みください。

23 [TUNER/SYSTEM]ボタン

このボタンを押すと、デジタルのクロマチックチューナー機能を使用することができます。アンプモデルもエフェクトもすべてバイパスされるので、弦の音がはっきりきこえます。

弦を弾くと、該当音符名と、それがナチュラルかフラットかという表示が出ます。つまりG#の場合はA♭と表示されます。チューニングしたい弦の音程をペグで上下させるとそれにつれて表示がシャープやフラットになり、小さな丸印が、シャープなら右へ、フラットなら左へ動きます。正しい音程にチューニングできていると真ん中で止まります。**[TUNER/SYSTEM]**ボタンをもう一度押すとチューナーモードから抜け出て通常使用モード状態に戻ります。

チューニングのバイパス/音量:チューニング中はサウンドはミュートされます。チューニング音を聞きたい場合は「MUTE」表示下のソフトボタンを押して**[EFFECT TWAEK]**ノブを回してバイパスを選びます。あるいはFBV、FBVシュートボードを接続している場合は、ボリュームペダルでも調整できます。

チューニングの基準:A=440Hz以外の基準ピッチを使いたいときは、チューナーモードのときに「440Hz」表示下の**ソフトボタン**を押してディスプレイを見ながら**[EFFECT TWEAK]**ノブを回します。ディスプレイ表示が変わり、基準ピッチは436Hz〜445Hzの間で設定できます。変更した基準ピッチは、毎回設定する必要はありません。

24 [TAP]ボタン

エフェクトのテンポ（またはスピード）を設定します。任意のテンポでボタンをタップして（押して）ください。エディット画面の最後のページにはテンポに関するパラメータもあります。これはタップ設定を微調整したいときに便利です。エフェクトがタップしたテンポに従うよう設定するには、**4章**をお読みください。

PODxt Pro

以下のコントロール類、端子はPODxt Proにのみ搭載されています。

25 [INPUT LEVEL]スイッチ

ふだんはこのスイッチをNORMALに設定します。CLIPインジケータ 28 が点灯する場合はPODxt Proの入力が過負荷状態になっています。これが頻繁に発生するようであれば、スイッチをPADに設定してください。アクティブ・ピックアップ搭載のギター、キーボードやその他の音源など、高レベルな信号に対応した回路に切り替わります。ギター以外の音源は、リアパネルの**[Line Level]**入力端子 29 も便利です。これはバランス型TRSコネクタです。内蔵DSPでクリッピングが生じている場合は、ディスプレイに別のCLIPインジケータが点灯します。

26 [I/O & DIG SELECT]ボタン

ベストなサウンドが得られるようPODxt Proに接続先を教え込むため、またデジタルオーディオやその他のオプションを選択する時にこのボタンを押します。

- 一度押すと、入力音源を接続するPODxt Proの端子を指定し、デジタル出力から出力したい信号を選択します。
- もう一度押すと、PODxt Proをスタジオで使用するかライブで使用するか、エフェクトループをどのように接続したか、またPODxt Proにどんなデジタル機器を接続したかを設定します。
- 更にもう一度押すと、ページがクリアされ、ディスプレイはこのボタンを押す前の状態に戻ります。

27 [SIGNAL]インジケータ

信号が入力されていることを表示するインジケータです。オーディオ信号がPODxt Proに入っているはずなのに、音が聞こえず、このインジケータも点灯しない場合は、[I/O & DIG SELECT]ボタン 26 を押して、選択した入力ソースが正しいかを確認してください。（このインジケータはUSBからの入力信号を表示しませんのでご注意ください。）

28 [CLIP]インジケータ

入力レベルが高すぎることを表示するインジケータです。（このインジケータもUSBからの入力レベル表示ではありませんのでご注意ください。）本機に入る信号レベルを下げるか、**[INPUT LEVEL]**スイッチ 25 をPADに設定してください。ギター以外の音源は、次のラ[Line Level]入力端子を使用してください。

29 [Line Level]入力端子

ギター以外の音源、あるいはワイヤレスギターのラインレベル出力用のバランス型端子です。すでに録音したギターをもう一度PODxt Proに入力して再処理する、という「リアンプ処理」にも使用します。この端子を使うには、**[I/O & DIG SELECT]**ボタン 26 を押してライン入力を選択してください。信号が入力されているかは、フロントパネルの**[SIGNAL]**インジケータ 27 でわかります。また入力信号が過負荷ぎみで入力信号レベルを下げる必要がある場合は、**[CLIP]**インジケータ 28 が点灯します。

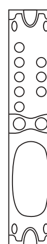
30 [Unprocessed Guitar Out]端子

この端子には少なくとも2種類の使い方があります。ラックマウントのチューナーをお持ちの場合は、この端子にチューナーを接続できます。しかし、主な使い道は、**Pro ToolsでLine 6のAmp Farmプラグインをお使いの方が活用したい機能**で、録音後でもギターサウンドに多少の調整ができるものです。

この端子からの信号を録音してから、ミックス時にその録音をPODxt Proの**[Line Level]**端子 29 に戻して、アンプやエフェクトなどのギター音色の要素を変える、というわけです。

アンプやエフェクトからのサウンドを聞かずに満足ゆくギターのテイクを録音するのはむずかしいですよね。エフェクトも何もかかっていないドライサウンドでソロを弾くなんて、考えられますか？録音中は、この未処理の信号を聞かずに、PODxt Proの左右出力（処理済み信号）をモニターします。未処理のギター信号と処理された左右出力からの信号を同時に録音できるので、後で音色調整するのも自由自在です。もちろん、すでに録音したものをそのまま使ってもかまいません。詳細は**3-11**ページをお読みください。

信号をデジタルで録音したい場合は、PODxt Proのデジタル出力から未処理の信号を送り出すこともできます。この設定は、**[I/O & DIG SELECT]**ボタン 26 を押して表示させるディスプレイのページで行います。



31 32 [Effect Send/Return]端子

このエフェクトループはラックマウントのエフェクタなどのラインレベル用にデザインされており、ペダル・エフェクターはフロントパネルに接続します。モノでセンド／リターンするには左の端子を使います。**[I/O & DIG SELECT]**ボタン 26 を押して表示させるディスプレイのページで、ループをシリーズ（直列）にするかパラレル（並列）にするかを選択します。ループをシリーズに設定しても[RETURN]端子に何も接続されていないと、ループは自動的にキャンセルされるので、サウンドが途切れることはありません。詳細は**3-9**ページをお読みください。

33 [Unbalanced Analog Outs]端子

[I/O & DIG SELECT]ボタン 26 を押して表示させるディスプレイのページで、この出力端子がスタジオ用かライブ用かを設定します。スタジオモードでは、この端子をレコーダーのアンバランス型-10 dBV入力端子に接続できる設定になっています。ライブモードではスピーカーのシミュレーション設定はなく、ステージ上のパワーアンプに接続できる設定になっています。いずれにしても、フロントパネルの[OUTPUT]ノブ 4 でこの端子からの出力レベルを設定します。モノ出力にはどちらの端子でも使えます。

34 [Balanced Analog Outs]端子

[I/O & DIG SELECT]ボタン 26 を押して表示させるディスプレイのページで、この出力端子がスタジオ用かライブ用かを設定します。スタジオモードでは、この端子をレコーダーのバランス型+4 dBu入力端子に接続できる設定になっています。ライブモードでは、-10 dBVの信号をハウスのサウンドシステムやP.A.に送る設定になっており、フロントパネルの**[OUTPUT]**ノブ 4 の設定は、この端子からの信号レベルに影響しないので、P.A.のレベルを変えずに自分の音量だけをステージ上で調整できます。

35 [GROUND]スイッチ

XLRバランス型アナログ出力端子のアースを解除するスイッチです。他の接地済み機器に接続している時にグラウンドループのハムノイズが生じる場合は、このスイッチでアースを解除してください。

36 [AES/EBU] & [S/PDIF]入出力端子

デジタルオーディオ信号を送受信する端子です。**[I/O & DIG SELECT]**ボタン 26 を押して表示させるディスプレイのページで、使用する端子、サンプリングレート、ワード長（量子化ビット数）などの詳細を設定します。デジタル入力とアナログ出力を同時に、またアナログ入力とデジタル出力を同時に、あるいはその任意の組み合わせで使えま

す。デジタルオーディオのPODxt Proへの入力とPODxt Proからの出力を、異なるサンプリングレート、ワード長にすることも可能です。

PODxt Proには独立したクロック端子はありませんが、アナログ入力でオーディオをPODxt Proに送り込んでいる場合でも、任意のデジタル入力端子でデジタルオーディオを受信して、そのクロックに同期できます。たとえば、デジタルミキサーからのデジタル出力信号をPODxt ProのS/PDIF入力端子に入力する場合、**[I/O & DIG SELECT]**ボタン**26**を押して、**FORMAT**（フォーマット）パラメータを**MATCH SPDIF**（SPDIFに一致）に設定すれば、PODxt Proはミキサーからの入力信号に同期します。また、入力信号のフォーマットに合わせて出力デジタルオーディオのフォーマットを設定します。

セットアップ

白ヌキ数字は本取扱説明書巻頭のイラストにある数字に対応しています。

PODxTは何を接続しても、世界一流のサウンドを出してくれます。ステージ上で使い慣れた自分のアンプに接続することも、最高級のレコーディングシステムに接続することもできます。本章では以下の内容について説明します。

PODxT—スタジオ内でのセットアップ

PODxT—ライブでのセットアップ

PODxT Pro—接続と設定

基本操作

1. 電源をコンセントとPODxTの電源端子に接続します。
2. ギターを**[INPUT]**（PODxT Proは[GUITAR IN]）**2**に接続します。
3. PODxTの出力をアンプなどの機材に接続します。**[OUTPUT]**端子**5**はバランス型1/4インチTRS（チップ／リング／スリーブ）フォン端子です。業務用＋4dBuのバランス型機器に対応します。また、アンバランス型－10dBV機器と標準のギターケーブルにも対応します。PODxTをモノで使用する場合は**[LEFT OUTPUT]**端子を使用してください。
   PODxT Pro：リアパネルの出力ペア端子を使用します。本章後述の「接続と設定」をお読みください。**[I/O & DIG SELECT]**ボタン**26**を押して、入力ソースとしてギター（またはご使用になる楽器）を選択します。

PODxT—スタジオ内でのセットアップ

PODxT Proをお持ちの方は本章最後の「PODxT Pro—接続と設定」に進んでください。

USB端子を使うには、Line 6ホームページwww.line6.comでPODxT USBドライバ・ソフトウェアをダウンロードしてください。ファイルに含まれているUSBドライバ・ソフトウェアの使用説明もお読みください。

接続先(WHAT ARE YOU CONNECTING TO?)ページ

接続機材によって、PODxtのサウンドを最適な状態にしてやることが必要です。**[TUNER/SYSTEM]** 23 ボタンを押して**[SELECT]** 16 ノブを右に回すと、次の画面が表示されます。



DESTパラメータの下のソフトボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]** 14 ノブで**STUDIO: DIRECT**モードを選択します。このモードではLine 6オリジナルのA.I.R. II DSPが起動します。このDSPを使うと普通のギターアンプやマイク設定では物足りなくなるような、仮想のスピーカー/キャビネット/雰囲気/マイク体験ができます。

DESTパラメータ設定は記憶されるので、電源を入れるたびに設定しなくてもすみます。これを一時的な用途で別の設定に変えた時は、忘れずに元の設定に戻しておいてください。ヘッドフォンをPODxtに接続すると、自動でSTUDIO:DIRECTが選択されるので、周りに音を出さずにベストなサウンドで練習ができます。

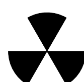
入出力

PODxtをレコーダー、ミキサーなどの機器に接続する場合は、マイクレベル入力やギターレベル入力ではなくラインレベル入力にPODxtの出力を接続してください。PODxtはSSLのような業務用コンソールからカセットレコーダーまで、様々な機器に対応できます。PODxtの出力端子をスタジオの他の機器に接続するときは必ず他の機器のラインレベル入力端子に接続してください。(マイクレベルやギターレベルの入力端子には適応しません。)これは最適なSN比でノイズを最低に抑え、ギターサウンドの良質な部分を拾うためです。機器によってはマイクレベルソースでもラインレベルソースでも同じ入力端子を使い、入力時点で低レベルの信号(マイク信号など)をトリムで持ち上げるものがあります。そのような入力端子にPODxtをつなぐ場合は、トリムを最低に落として、PODxtの**[OUTPUT]** 4 ノブと**[CHANNEL VOLUME]** 11 ノブを最大に設定してください。接続機器にラインレベル専用の入力端子が2つあるなら、それを使ったほうが、レンジの広いマイク/ラインレベル入力でトリムを使うよりも、よい結果が得られます。

レベルの設定

まず、PODxtを使いたいサウンドに設定し、ギターを思いっきり弾いた時にディスプレイのCLIPインジケータが点灯しない程度で、**[CHAN VOL]** 11 をなるべく最大に設定します。次に**[OUTPUT]**ノブとシステムの入力ボリュームを調整しながら弾いて、システムへの入力信号にオーバードライブがかかりすぎて不要なディストーションがかからない程度に、PODxtからの出力サウンドを最大レベルにします。

[ヒント]:気に入ったサウンドはなるべく音量を大きくして弾きたいけれど、リードギターとリズムサウンドとの音量差、あるいはクリーンなサウンドと濁ったサウンドの音量差も適度に付けたい、というのであれば、うまいバランスを出すために、まず好みのクリーンサウンドから設定します。ギターを思いっきり弾いた時にディスプレイのCLIPインジケータが点灯しない程度で、各クリーンサウンドの[CHAN VOL]をなるべく高く設定して保存します。次に、各サウンド間のバランスをチェックして、音量が大きすぎるものがあれば他のサウンドと同じくらいになるよう下げます。今度は濁ったクランチ／リード音色を選び、これがクリーンサウンドとうまく噛み合うよう、[CHAN VOL]ノブのレベルを多少低く設定して保存します。あとでPODxtを使うときは、[OUTPUT]ノブで出力レベルを必要に応じて設定するだけです。こうすれば、音色間の音量差を心配せずに各種サウンドを切り替えることができます。



電子機器のノイズについて

特にシングルコイルのピックアップのギターを使っている場合、ギターの近くにあるコンピュータのモニターからノイズがかなり入りやすくなります。CRTディスプレイは一日中、光量子を放射しています。ギターのピックアップはこのモニターが放射する電子磁気を受信し増幅して、オーディオ信号にハムノイズを生じさせます。モニターから離れギターがコンピュータの画面に向かないようにして最小限に抑えてください。それでも狭いスタジオでどうしても録音する必要がある場合、そしてこのモニターによるノイズに悩まされる場合は、次の手段を試してみてください。録音準備をしてプリロールを始めたら、コンピュータの画面の電源を切ります。ギターのパートだけ録音したら録音を止めてモニターの電源を入れます。再生してノイズが入っていないか確かめてください。

フラットなLCDモニターではこの問題はありません。ところでLine 6の**Variax**ギターは従来の磁気ピックアップを使用していないので、このようなハムノイズとは無縁です。

ペダル機能

PODxtのオプションとして二種類のフット・コントローラ:**Line 6 FBV**および**FBV Shortboard**があります。詳細は後半の章で説明しますが、どちらのペダルでもPODxtのチャンネルを選択したり、エフェクトのスピード、タイム、テンポをタップ入力したり、チューニングモードに切り替えたり、ワウ／ボリュームコントロールとして使用したりします。いずれのペダルも[PEDAL] **6** 端子に接続してください。以前のLine 6 Floor BoardおよびFB4には対応しておりませんので、ご注意ください。

MIDI機能

MIDI機能を使ったスタジオではMIDIでPODxtのコントロールができます。MIDIでチャンネルを選んだり、パラメータを自動設定したりします。詳細は、**「エディットとMIDIコントロール」**の章をお読みください。

PODxt — ライブでのセットアップ

PODxt Proをお持ちの方は本章最後の「PODxt Pro — 接続と設定」に進んでください。

ラックマウント

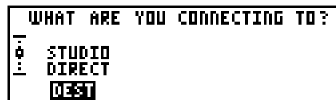
ステージ上でPODxtを手元の便利な場所に置きたい、というのが人情です。オプションのPODxtマイクスタンド／アンプトップアダプターを使用するといいでしょう。Line 6のホームページではこのアダプターについてご紹介しています。またそのページでご購入もできます。また買うハメになるの？と思われるかもしれませんが、ライブ演奏中にいろいろ操作したい場合はとても便利です。そうそう、専用のキャリーケースもおすすめです。

セットアップ方法

ライブでPODxtを使用する時はさまざまなセットアップ方法があります。PODxtの出力をハウスシステムに直接接続して、マイクやキャビネット、その他のステージ上の機材を使わずに素晴らしいサウンドを聞かせる方法。あるいは、PODxtをパワーアンプ／スピーカーキャビネットに接続して、究極のプリアンプとして使う手もあります。はたまた、ギターとギターアンプの間に入れて、PODxtをアンプのフロントエンドでのトーン・シェーピングとして使用する方法。いずれにしても、まずどんな接続をするのかを、PODxtに教えてあげることが親切というものです。

接続先（WHAT ARE YOU CONNECTING TO?）ページ

3種類の接続先から選択します。まず**[TUNER/SYSTEM]** **24** ボタンを押してから**[SELECT]** **16** ノブを回して以下の画面を表示します。



STUDIO DIRECT:

直接PAに接続するかモニターシステムを使う場合は、この設定を選択します。**DEST**パラメータの下のソフトボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]** **14** ノブで**STUDIO DIRECT**を選びます。

LIVE 2x12またはLIVE 4x12:

コンボアンプ、ヘッドアンプ／キャビネット、またはパワーアンプとキャビネットに接続する時に選択します。A.I.R.のマイク（MIC）とルーム（ROOM）の要素がオフになり、キャビネットモデルもそれに合わせたサウンドになります。

VIBE:

LIVEモードを選んだ時は、**VIBE**パラメータの下にあるソフトボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]**ノブ**14**を回してチューニング設定を選択すると、セットアップに最適なサウンドが作れます。

注：スタジオモニターやヘッドフォンでなく、ギターアンプにPODxtを接続している時は、スピーカー／アンプの組み合わせによってサウンドが大きく変わります。LIVEやVIBE設定の名前は参考程度にして、ご自分のセットアップにはどのサウンドがベストか、いろいろ試してみてください。

DESTパラメータと**VIBE**パラメーターの設定は記憶されるので、電源を入れるたびに設定しなくてもすみます。これを一時的に別の設定に変えた時は、忘れずに元の設定に戻しておいてください。

アンプでベストなサウンドを出すには

PODxtをギターコンボに接続するときは、そのアンプが「ニュートラル」の状態から始めてください。つまり、アンプにボリュームコントロールが1つだけある場合は、これを十分低く設定してクリーンなトーンが得られるようにします。このようにしてPODxtのサウンドをなるべく混じり気のないピュアなサウンドに保つようにします。ボリュームコントロールのほかにマスターボリュームがある場合は、最初のボリュームコントロールでマスターボリュームを歪ませないように設定します（こうしてクリーンなサウンドを保ちます）。アンプによって多少違うかもしれませんが、クリーンで歪みのないサウンドを得るには、ふつうインプットボリュームをマスターボリュームより小さくします。通常の（パッシブ）トーンコントロールがある場合は、MIDを最大に、TREBLEとBASSをゼロにします（これはほとんどのアンプでは「フラット」なイコライゼーションとなります）。PODxtの音に余分な音色が加わらないよう、アンプを歪ませないでください。アンプ入力時の歪みを避けるためPODxtの出力レベルに注意してください。

ギターアンプにエフェクトリターン端子がある場合やパワーアンプの入力に直接接続できる端子がある場合は、PODxtの出力をその端子に接続すると、アンプのトーンコントロールをバイパスするのでPODxtのサウンドに余分な音色がつきません。エフェクトリターンやパワーアンプの入力に直接接続した場合は、接続先（WHAT ARE YOU CONNECTING TO?」ページで**LIVE 2×12またはLIVE 4×12**を選択してください。

外部ペダルとPODxt

ギターを長年弾いていれば、好みのペダルをお持ちのことでしょう。PODxtとともにお使いになれる最新のエフェクトペダルやラックエフェクトもありますが、これまで使い慣れているペダルもそのまま利用できます。このようなペダルをPODxtの前に接続すると、PODxtで選択したアンプモデルによって様々な異なるサウンドが出ます。組み合わせが違うとサウンドも違ってくるからです。ディストーションペダルからPODxtに入る信

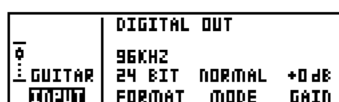
号レベルを最大に上げると、かなり耳にキツいディストーションがかかる場合もあります。ペダルのボリュームを下げて、PODxtの**[DRIVE]**ノブでゲインを上げるか、PODxt内のエフェクトを使うといいでしょう。

PODxt Pro ― 接続と設定

USB端子を使うには、Line 6ホームページwww.line6.comでPODxt USBドライバ・ソフトウェアをダウンロードしてください。ファイルに含まれているUSBドライバ・ソフトウェアの使用説明もお読みください。

入力の選択

[I/O & DIG SELECT]ボタン**26**を1回押して下記の画面を表示させます。ここではPODxt Proのアナログ／デジタル入力を選択します。



INPUTパラメータの下にある一番左のソフトボタンを押して、以下の選択肢から選択します。

GUITAR IN: ギターをフロントパネルの**[INPUT]**端子**2**に接続している時は、これを選択します。リアパネルのラインレベル入力、デジタル入力は無視されます。

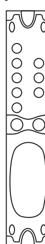
LINE IN: PODxt Proに通したい音源がリアパネルの**[Line Level]**入力端子**29**に接続されている時は、これを選択します。フロントパネルからの入力とデジタル入力のオーディオは無視されます。

AES LEFT/AES RIGHT/AES L+R: リアパネルの**[AES/EBU]**デジタル入力端子**36**を使う時はこれを選択します。PODxt Proはモノ入力のみを受け付けるので、**AES L+R**は左右のAES入力がモノになります。フロントおよびリアパネルのアナログ入力はすべて無視されます。

SPDIF LEFT/SPDIF RIGHT/SPDIF L+R: リアパネルの**[S/PDIF]**デジタル入力端子**36**を使う時はこれを選択します。PODxt Proはモノ入力のみを受け付けるので、S/PDIF L+Rは左右の**S/PDIF**入力がモノになります。フロントおよびリアパネルのアナログ入力はすべて無視されます。

入力／デジタル出力の設定

[I/O DIG SELECT]ボタン**26**を押して下記の画面を表示させ、入力やデジタル出力の設定を行います。



FEATURE FOCUS
PODxt PRO
POD XT PROでのみ有効な機能についての説明です。

FORMATパラメータ：

サンプリング周波数、ワード長（量子化ビット数）、クロックソース

FORMATパラメータの下にあるソフトボタンを押し**[EFFECT TWEAK]**ノブ**14**を回して、16/20/24ビット、44.1/48/88.2/96 kHzの中から選択します。PODxt Proは内部クロックを使って設定サンプリング周波数を発生します。

FORMATパラメータの**MATCH AES IN**または**MATCH SPDIF IN**を選択すると、PODxt Proのクロックは受信した信号のサンプリング周波数に同期して、同じ周波数／ビット数でデータを出力します。

外部機器へのクロック同期：（アナログのGUITAR INやLINE INなども含め）選択した入力が何であろうと、**FORMAT**パラメータの**MATCH AES IN**または**MATCH SPDIF IN**を選択して、PODxt Proを他のデジタル機器に同期させることもできます。たとえば、デジタルミキサーの出力をPODxt Proのデジタル入力に接続して、**FORMAT**パラメータで該当するソースを選択すると、PODxt Proはデジタルミキサーのクロックに同期し、デジタルオーディオのフォーマットに合わせます。

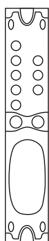
MODEパラメータ：

NORMAL/DRYGTR

MODEパラメータの下にあるソフトボタンを押し**[EFFECT TWEAK]**ノブ**14**を回して、**NORMAL**（デジタル出力からアンプ／キャビネット／エフェクト／マイク／ルーム処理したサウンドを出力）か、**DRYGTR**（デジタル出力から未処理のギターサウンドを出力）を選択します。詳細は**3-11**ページをお読みください。

GAINパラメータ：

デジタル出力のゲイン増加

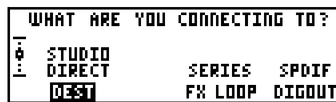


GAINパラメータの下にあるソフトボタンを押し**[EFFECT TWEAK]**ノブ**14**を回して、デジタル出力のみのゲインを12 dBまで上げます。ディストーションがあまりかかっていないデジタル信号や、レベルを上げるような設定をしていないデジタル信号の出力レベルを上げます。

注意！
エフェクトのかかっていないギターのドライ信号をデジタル出力から録音し、後でPODxt Proにデジタル接続でフィードバックして信号をリアンプ処理する場合は、**ゲインをあげずに、**信号レベルを+0 dBに保ったまま、レコーダーからPODxt Proのデジタル入力へレベル調整せずに戻してください。これを守らないと、最初に録音した時とは違うレベルで、信号がPODxt Proにフィードバックされるので、PODxt Proへの入力ゲインが変わったことで、クリーンなサウンドが得られなくなったり、思ったよりゲインの上がらないサウンドになってしまいます。もちろん、リアンプ中に思いがけない結果を期待している場合は別ですが…。詳細は**3-11**ページをお読みください。

接続先（WHAT ARE YOU CONNECTING TO?）ページ

3種類の接続先から選択します。**[I/O & DIG SELECT]**ボタン**26**を2回押して以下の画面を表示します。



STUDIO DIRECT:
PODxt Proを直接PAに接続するかモニターシステムを使う場合は、**DEST**パラメータの下にあるソフトボタンを押し**[EFFECT TWEAK]**ノブ**14**を回して、**STUDIO DIRECT**を選択します。このモードではLine 6オリジナルのA.I.R. II DSPが起動するので、普通のギターアンプやマイク設定では物足りなくなるような、仮想のスピーカー／キャビネット／ルーム／マイク体験ができます。これならPAシステム全体と同じくらいパワフル。ミックスに入ることも間違いなしです。

LIVE 2x12またはLIVE 4x12:
ギターキャビネットとパワーアンプに接続している時に選択します。A.I.R.のマイク（MIC）とルーム（ROOM）の要素がオフになり、キャビネットモデルも選んだスピーカーに合わせたサウンドになります。
DESTパラメータ設定は記憶されるので、電源を入れるたびに設定しなくてもすみます。これを一時的に別の設定に変えた時は、忘れずに元の設定に戻しておいてください。

FX LOOP（エフェクトループ）パラメータ

FX LOOPパラメータの下にあるソフトボタンを押し**[EFFECT TWEAK]**ノブ**14**を回して、ループを**SERIES**（シリーズ）か**PARALLEL**（パラレル）に設定します。



ループを**SERIES**に設定すると、PODxt Proから信号全体がエフェクターに送られ、エフェクターから戻った信号が出力されます。エフェクトをオフにするか出力レベルをゼロにすると、何も聞こえません。ループに接続されたエフェクターのミックスコントロールを使って、ウェット／ドライ信号のバランスを調整します。

ループを**PARALLEL**に設定すると、PODxt Proからループに信号が送られるのと同時に、出力端子にも信号が送られます。サウンドの一部だけがエフェクトを通るので元の音色の輪郭がそこなわれず、この設定を好む人もよくいます。パラレルの時は、ループに接続したエフェクターのミックスコントロールを100%ウェットに設定してください。ドライ／ウェット信号のバランスは接続エフェクターの出力ボリュームコントロールで調整します。

注意：パラレル設定にすると、満足いくエフェクトサウンドにならない場合があります。これは、エフェクターから戻ってくる信号が、PODxt Pro内でエフェクターに送られなかった信号とフェイズが合っていないためです。これは、外部エフェクトが100%ウェットの設定であれば、ディレイやリバーブでは通常問題ありません。ところが、未処理のサウンドと処理済みのサウンドが混じるモジュレーション・エフェクト（コーラス、フェーズ、フランジなど）、コンプレッションなどでは問題になることがよくあります。このようなエフェクトでは、ループをシリアルに設定した方がいいでしょう。

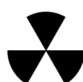
ループのオン／オフはFBVフット・コントローラ、または**EDIT**画面の最後のページにあるLOOP ON/OFFパラメータで設定します。このオン／オフ状態はチャンネルと一緒に保存されるので、ループがオンのチャンネル、ループがオフのチャンネルの両方が共存することになります。

AES/EBUフォーマットとS/PDIFフォーマット

PODxtのAES/EBUとS/PDIFの両方のデジタル出力は常に同時にアクティブとなっており、各デジタルフォーマットに対応した電気特性を持っています。0と1で構成され、AES/EBUおよびS/PDIFフォーマットで転送されるデジタルデータの中身はほとんど同じです。

PODxt Proの実際のデジタル出力端子は常に同じデータを送り出すので、AES/EBU、S/PDIFのどちらでデータをフォーマットするかを、**DIGOUT**パラメータで設定します。デジタル機器のほとんどはどちらのフォーマットにも対応しますが、どちらのフォーマットにするかわかっている場合は、このパラメータを設定してください。





電子機器のノイズについて

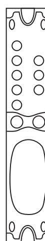
特にシングルコイルのピックアップのギターを使っている場合、ギターの近くにあるコンピュータのモニターからノイズがかなり入りやすくなります。CRTディスプレイは一日中、光量子を放射しています。ギターのピックアップはこのモニターが放射する電子磁気を受信し増幅して、オーディオ信号にハムノイズを生じさせます。モニターから離れギターがコンピュータの画面に向かないようにして最小限に抑えてください。それでも狭いスタジオでどうしても録音する必要がある場合、そしてこのモニターによるノイズに悩まされる場合は、次の手段を試してみてください。録音準備をしてプリロールを始めたら、コンピュータの画面の電源を切ります。ギターのパートだけ録音したら録音を止めてモニターの電源を入れます。再生してノイズが入っていないか確かめてください。フラットなLCDモニターではこの問題はありません。ところでLine 6のVariaxギターは従来の磁気ピックアップを使用していないので、このようなハムノイズとは無縁です。

ペダル機能

PODxt Proのオプションとして二種類のフット・コントローラ：**Line 6 FBV**および**FBV Shortboard**があります。詳細は後半の章で説明しますが、どちらのペダルでもPODxt Proのチャンネルを選択したり、エフェクトのスピード、タイム、テンポをタップ入力したり、チューニングモードに切り替えたり、ワウ／ボリュームコントロールとして使用したりします。いずれのペダルも[PEDAL] 端子 **6** に接続してください。以前のLine 6 Floor BoardおよびFB4には対応しておりませんので、ご注意ください。

MIDI機能

MIDIが使えるスタジオではMIDIでPODxt Proのコントロールができます。MIDIでPODxt Proのチャンネルを選んだり、パラメータを自動設定したりします。詳細は、**「エディットとMIDIコントロール」**の章をお読みください。



PODxt Proでのリアンプ

未処理の「ドライ」なギターサウンドを録音し、ミックス時にこれをエフェクトをかけて処理すれば、音色調整が自在にできます。この過程がリアンプ処理です。これは、リバーブをかけずにボーカルを録音する手法と似ています。ボーカル録音中はリバーブを多少かけてモニターしますが、レコーダーに送られるボーカル信号にはリバーブがかかっていません。このため、ミックス時に最終的なリバーブの音色や量を決めることができます。常にリアンプに頼るつもりはなくても、リアンプできるドライなギターサウンドと、すでにエフェクトをかけたギターサウンドの二種類を録音して、どうしても必要になった時はドライサウンドのリアンプを行うようにすれば便利です。

アナログのリアンプ

いつもの録音と同じ要領でギターをPODxt Proのフロントパネル上の**[GUITAR IN]**端子に接続し、PODxt Proの左右の**アナログ出力**をオーディオシステムに接続してモニターできるようにします。ギターを弾いてサウンドを確かめます。

次に、リアパネルの**[Unprocessed Guitar Out]**端子をレコーダーのアナログ入力に接続し、録音トラックにパッチします。これがレコーディング後のミックス時にリアンプ処理できる信号です。PODxt Proの左右の出力信号も同時にレコーダーに録音することもできます。

未処理のギターサウンドが入る録音トラックからのモニター出力を、PODxt Proリアパネルの**[Line In]**端子に接続します。**[I/O & DIG SELECT]**ボタン**26**を1回押して、以下の画面を表示させます。

```
        DIGITAL OUT
        96KHZ
 LINE   24 BIT   NORMAL   +0dB
 INPUT  FORMAT   MODE     GAIN
```

INPUTパラメータの下にあるソフトボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]**ノブ**14**を回して**LINE IN**を選択します。これで、PODxt Proの**[Line In]**端子で受信した信号が処理され、同時に未処理のギター信号が**[Unprocessed Guitar Out]**端子に送られます。

いつものように音色を調整して録音します。ドライ信号が録音され、同時にアンプ、キャビネット、エフェクト処理されているPODxt Pro内のサウンドが聞こえます。録音中にリバーブのかかったボーカルを聞きながら、録音トラックにはリバーブのかからないボーカルが入る、という手法と同じです。

ミックス時にはギターサウンドを心ゆくまで調整できます。[DRIVE]ノブを多少上げたり、[Chorus]を抑えたり。あるいはアンプモデルを変えたり、異なるモデルのマイク選択を使ったり。こうして処理したサウンドに満足したら、左右のアナログ出力、またはデジタル出力からレコーディングシステムに録音します。

デジタルのリアンプ

ここではPODxt Proのアナログ出力を録音する一方で、ギターのドライサウンドをデジタルで録音して、あとで必要に応じてこのドライサウンドを使って音色調整できるようにします。

ギターをPODxt Proのフロントパネル上の**[GUTAR IN]**端子に接続し、PODxt Proの左右の**アナログ出力**をオーディオシステムに接続してモニターできるようにします。ギターを弾いてサウンドを確かめます。

以下の画面が表示されていなければ、**[I/O & DIG SELECT]**ボタン**26**を1回押して表示させます。

DIGITAL OUT
GUITAR INPUT | 96KHZ 24 BIT FORMAT | DRYGTR MODE | +0 dB GAIN

INPUTパラメータの下にあるソフトボタンを押し**[EFFECT TWEAK]**ノブ**14**を回して**GUITAR IN**を選択します。**MODE**パラメータは**DRYGTR**に設定します。PODxt Proの**[AES/EBU]**または**[S/PDIF]**デジタル出力をレコーダーに接続します。録音中に、この信号はモニターしません。この信号はあとで必要に応じてミックス時に調整するためのものです。

GAINパラメータが+0 dBであることを確認してください。録音トラックにこれより高レベルな信号を入れるためにゲインを上げても、SN比が良くなるとか音質が向上することはありません。むしろ、この信号を使って後でリアンプする際に問題が生じてしまいます。これ以上ゲインを上げないようにしてください。

メインのアナログ出力をレコーダーに録音しながら、ギターのドライサウンドを別のトラックに録音するわけですが、エフェクトのかかったギター信号をモニターしながらパンチイン／アウトするのも、他のアナログ信号をレコーディングソフト／機器に録音するのと同じ要領で行ないます。ここでの特典は、未処理のギター信号もデジタル録音されるので、それを使って後でまったく新しいサウンドを作ったり加えたりできることです。

ところで、デジタル録音したギターのドライサウンドを利用したい場合は、これをレコーダーからPODxt Proのデジタル入力端子に送ります。INPUTパラメータは、この例ではAES LEFTを選択しています。

DIGITAL OUT
AES LEFT INPUT | 96KHZ 24 BIT FORMAT | NORMAL MODE | +0 dB GAIN

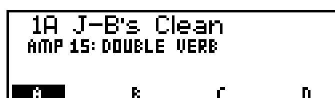
この時、ドライサウンドの再生音量を変えないでください。録音されたレベルを変えずにそのままPODxt Proに送ります。次に、PODxt Proのアナログまたはデジタル出力をレコーダーに接続し、必要に応じて音色を調整したギターサウンドを録音します。

サウンドの作成と保存

本章ではPODxtでサウンドをエディットする方法について説明します。音色のロードや変更から始まって、アンプ／エフェクトモデルをまったくカスタム化するまでをカバーします。すでにPODxtを使いこなしている方でも、様々なヒントやトリックが学べますので、続けてお読みください。

チャンネル・メモリーの呼び出し

最初に電源を入れると、次のような画面が表示されます。



[SELECT]ノブで16バンク内に分類されているチャンネルを選択します。各バンクには4つのチャンネル・メモリー（A、B、C、D）が入っています。（**8章**では“ 足 ”を使った操作方法を説明します。）

[SELECT]ノブを回して好きなサウンドを探しましょう。トーン、ボリューム、**リバーブ**用ノブの他に、便利なエフェクトのオン／オフ切り替えボタン、大切なエフェクトのパラメータがすぐに変更できる**[EFFECT TWEAK]**ノブもあります。

エフェクト設定の呼び出し

PODxtの便利な機能の一つは、カスタムのエフェクト設定を作成、保存できることです。つまり、すでに接続したペダルボードやプログラム済みのラックマウントのエフェクタがすでにあるようなものです。本体内に6 4 個の設定が保存でき、**[EFFECTS]**ノブを回してこれにアクセスします。このノブを回して次々と表示される名前を確認し、そのサウンドを聴いてみましょう。本章後半ではカスタムのエフェクト設定を保存する方法を説明します。

ペダル感覚のコントロール

いつもお使いのペダルと同じような要領で、PODxtの4つのエフェクトがオン／オフできます。***ディスプレイの上にあるボタンを使います。***

COMP (GATE)：スタジオ標準のコンプレッサーLA-2A(Unei)をモデリングしており、それをオン／オフします。2回続けて押すと***エディット画面***に入り、そこでコンプレッサー設定をしたり、***ノイズゲート***の調整、オン／オフができます。

STOMP：ディストーション・ペダルやその他のペダル・コンプレッサーが入っています。ボタンを押してオン／オフ、2回続けて押すと**エディット画面**に入ります。

MOD：PODxtにはいくつかのモジュレーション・エフェクトをが入っています。このボタンを1回押してロードしたエフェクトをオン／オフし、2回押して**エディット画面**に入ります。

DELAY：ディレイのモデルが入っています。1回押してオン／オフ、2回押して**エディット画面**に入ります。

エディットの基本操作

ここではPODxtの調整方法を説明します。ノブ、ボタン、ディスプレイを使えば詳細な設定がダイレクトに行なえます。元祖PODではコンピュータにつないで詳細設定を行いましたが、このモデルではそれが不要です。

エディットモードに入るには、**[EDIT]**ボタンを押してボタンを点灯させます。次に**[SELECT]**ノブを回すと、どんな設定でも選ぶことができます。ディスプレイに表示されたパラメータの変更は、その下にある**ソフトボタン**を押して、**[EFFECT TWEAK]**ノブを回します。ここで調整した内容は**[SAVE]**ボタンを押して保存先のチャンネル・メモリーを選ぶと記憶されます。

2回押しで簡単なアクセス

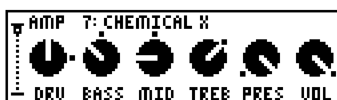
モジュレーション・エフェクトを変更したりディレイを切り替えたい場合は？**[COMP]**、**[STOMP]**、**[MOD]**、**[DELAY]**ボタンのいずれかを2回続けて押すと、該当エフェクトの最初の**エディット画面**に入ります。もう一度同じボタンを2回続けて押すと、エディット画面から抜け出ます。（ただし**[CAB/A.I.R.]**ボタンだけは1回押すだけでエディット画面へ入ります。）

エディットメニューの中身

[EDIT]ボタンが点灯している時は、ディスプレイの左にグラフ（スクロールバー）が表示されています。[SELECT]ノブを回すと、そのスクロールバーの中の四角が上下に動きます。スクロールバーの中の各ドット（点）が、そのエフェクトのEDITページ画面を示します。このバーで、現在の**エディット画面**の位置がわかります。

アンプノブ設定

[EDIT]ボタン点灯時にノブを左に回して、エディットメニューから最初のページ画面を選択します。このページには次のように、現在のチャンネルのノブ設定が表示されています。

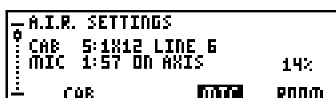


ディスプレイ上部にはアンプモデル名も表示されています。ここで**[AMP MODELS]**ノブを回してトーン・コントロールがどのように変化するか見ましょう。これはLine 6のエンジニアたちがアンプモデルごとにプログラムした設定です。これをどのようにカスタム化するかを説明します。

ところでノブのそばにある小さな点が見えますか？これは、最後に保存されたノブの設定位置です。[DRIVE]ノブを回してみてください。ディスプレイ上のノブアイコンも動くはずです。一方、小さな点は移動しないので、保存されている設定との比較ができます。

キャビネット／マイク設定

アンプノブが表示されたら**[SELECT]**ノブを1目盛り右へ回します。（または、直接**[CAB/A.I.R.]**ボタンを押します。）次のような画面が表示されます。



これはA.I.R.の詳細設定画面で、キャビネットとアンプを組み合わせたりマイク設定を調整したりします。

ディスプレイの**CAB**という文字のすぐ下にあるボタンを押してから**[EFFECT TWEAK]**ノブを回してキャビネットモデルを選びます。

同じ要領でマイクを入れ替えたり部屋の空間の広がりを変更したりします。**MIC**という文字の下にあるボタンを押してから**[EFFECT TWEAK]**ノブを回してマイクを選び、**ROOM**の下のボタンを押して空間の広がりを調整します。

このような設定でA.I.R.と呼ばれる仮想の録音環境によるサウンドを完璧にカスタム化できます。このエディット画面に入るには、**[CAB/A.I.R.]**ボタンを1回押すだけです。

エフェクトのエディット

PODxtのエフェクトも同じようにエディットできます。任意のエフェクトボタンを2回押してエディット画面の最初のページを表示させ、調整したいパラメータの下にあるボタンを押してから、**[EFFECT TWEAK]**ノブで調整します。他のページに移

るには、**[EDIT]**ボタン点灯時に**[SELECT]**ノブを回します。左のスクロールバーで現在のページ画面の位置がわかります。

ほとんどのエフェクトパラメーターは2ページに収っており、よく使うパラメータは最初のページにあります。目的のパラメータが最初のページにない場合は、**[SELECT]**ノブを右に一目盛り回して次のページを表示させてください。

試しに**[STOMP]**ボタンを2回押してみましょう。ペダル・エフェクターには次のようなエディット画面が1ページだけあります。



他のエフェクトと同様、ディスプレイの下の一番左のボタンでエフェクトモデルを選択します。また**VETTA COMP**には感度を調整するノブ(**SENS**)とレベル用ノブ(**LEVEL**)があるのがわかります。**SENS**の下にあるボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]**ノブを回して調整します。

ディレイ、**モジュレーション**などの他のエフェクトにはエディット画面が2ページあります。

ディレイのエディットページ1



ディレイのエディットページ2



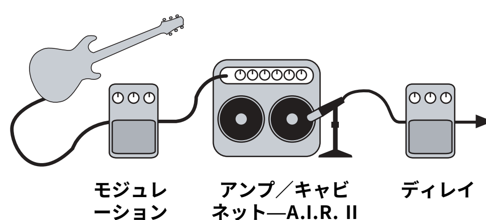
2ページ目にあるCONFIGはPODxtのボリューム・ペダル、ディレイ、モジュレーション用パラメータで、以下の内容を設定します。

PRE:ペダルを接続するアンプの前の位置

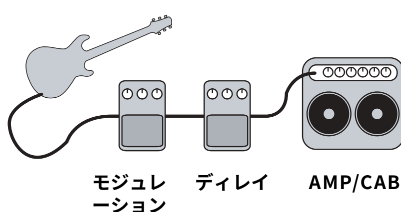
POST:ラックマウントのエフェクタを接続するアンプの後の位置

次の図を見るとわかりやすいでしょう。

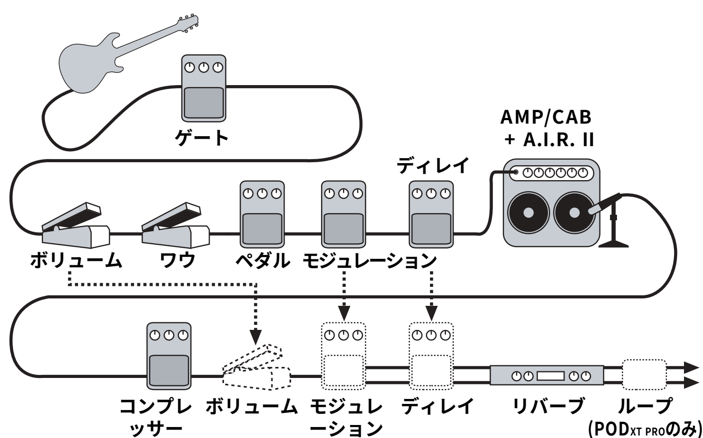
MODを**PRE**、**DELAY**を**POST**にした典型的な接続



MODと**DELAY**を**PRE**に設定した接続



次の図は、モジュレーション、ディレイ、ボリューム・ペダルのPRE、POST設定も含めた、全体の信号の流れを示したものです。



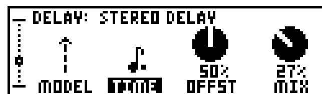
音色をテンポに合わせる

エフェクトにグルーヴ感を与えるカギはノート値です。ノート値は現在のテンポを使用し、計算を行って音楽に完全にノッたディレイタイムやモジュレーションスピードを設定します。たとえば16分音符のトレモロを付点8分音符のディレイに合わせる、という芸当ができるわけです。

以下の手順で、モジュレーションスピードやディレイタイムにグルーヴ感を加えましょう。

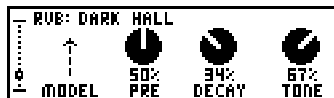
1. ディレイの**TIME**パラメータまたはモジュレーションの**SPEED**パラメータの下にあるボタンを押します。
2. **[EFFECT TWEAK]**ノブを左に回して、ミリ秒やヘルツ値が表示されるところに、小さな音符を表示させます。
3. **[TAP]**ボタンを2回タップしてテンポとディレイまたはモジュレーションがタップテンポに合うように設定します。

ディレイがたとえば付点八分音符になるよう設定したら、**TIME**パラメータは次のようになります。



リバーブ

次にリバーブのページを見ましょう。ここではリバーブモデルを変更したり、グルーヴ感を持ったリバーブにするためのパラメータを調整します。リバーブミックスのパラメータは表示されていませんが、これは専用の**[REVERB]**ノブで調整します。



ワウとボリューム

リバーブのエディット画面で**[SELECT]**ノブを一目盛り右へ回すと、次のように**WAH**、**VOLUME**パラメータが表示されます。



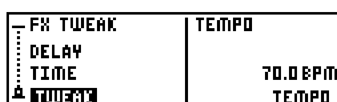
まずワウを見てください。PODユーザーの方々から、ワウのオン／オフ状態をチャンネル・メモリーに保存する機能があるといい、というリクエストを受けました。そうすれば、そのチャンネルを呼び出した時にワウが自動的にオンになるからです。そこで、この機能を取入れました。しかも、ワウの位置も保存できます。この位置設定は**POSI**（ポジション）パラメータの下のボタンを押して**[EFFECT TWEAK]**ノブを回します。

VOLUMEパラメータは、Line 6 EX-1などのエクスプレッション・ペダルをオプションのFBV Shortboardに接続した時の動作を設定します。**PEDAL**パラメータが**VOLUME**に設定されていると、EX-1はPODxtのボリュームをコントロールし、Shortboard搭載ペダルが専用のワウ・コントロールになります。一方、**PEDAL**が**TWEAK**になっていると、ペダルをヒール・ポジションからトー・ポジションに動かすと、次に説明するように**FX TWEAK**で割り当てたパラメータが最小値から最大値に変化します。

FX TWEAKのノブ機能割り当て／テンポの割り当て

たとえばとても大事なコンサートの真っ最中に、どうしてもエフェクト・パラメータを調整したくなったら･･･。

次の**エディット画面**では**[EFFECT TWEAK]**ノブの割り当てができます。



ここでは、チャンネル・メモリー内で**[EFFECT TWEAK]**ノブが調整するパラメータを指定します。**TWEAK**パラメータの下にあるボタンを押して、**[EFFECT TWEAK]**ノブでパラメータを選択します。

ディスプレイの右には、このチャンネル・メモリーのテンポが表示されています。このテンポを使って、ディレイやモジュレーションのタイム／スピードが計算されます。テンポ設定は、**[TAP]**ボタンを2回押すか、TEMPOパラメータの下にあるボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]**ノブを回して希望のテンポを指定します。

保存操作

全部で64個の音色がPODxtに保存できます。出荷時にはプリセットの音色がすでに入っていますが、自由にエディットして上書き保存してください。まずプリセット音色を試して、どの音色をとっておきたいか、どの音色なら上書きしてもいいかを決めてください。プリセット音色は後で説明するように、いつでも呼び出すことができます。またwww.line6.comでトーン・トランスファー用データベースをチェックしてダウンロードしたり、逆にあなたの自慢のサウンドをアップロードすることもできます。

チャンネル・メモリーの保存

一番簡単な操作は、チャンネル・メモリーを呼び出して調整し、名前を変更せずにそのままそのチャンネルに保存することでしょう。エディットしたチャンネルをそのまま保存するには、**[SAVE]**ボタンを2回押すだけです。

別の場所に保存したり名前を変更することも簡単にできます。

エディットした音色を新しい場所に保存：サウンドをエディットし、**[SAVE]**ボタンを押します。次のような画面が表示されます。



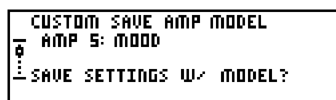
ディスプレイの**DEST**（デスティネーション：保存先）パラメータの下にあるボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]**ノブで別のチャンネル・メモリーを選択します。**[SAVE]**ボタンをもう一度押して保存操作を確定しチャンネル・メモリーに上書きします。

音色の名前を変更：サウンドをエディットし、**[SAVE]**ボタンを押します。上の画面が表示されるので、**カーソル[◀]/[▶]**ボタンで変更したい文字の下にカーソルを移動します。**CHAR**（キャラクタ：文字）パラメータの下にあるボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]**ノブで文字を変更します。最後に**[SAVE]**ボタンを押して完了します。

アンプモデルのカスタムセーブ

カスタム化した特別な音色ばかりを保存して、これを**[AMP MODELS]**ノブを回すことでロードします。このカスタム化した音色には、キャビネットモデル、マイク設定、ルーム設定も含まれます。これなら、たとえば[AMP MODELS]ノブを回してPLEXI-45モデルをロードしようとすると、実際にはカスタム化されたPLEXI-45（コントロール類もすべて自分用に設定済み）がロードされます。次の手順に従ってください。

任意のアンプモデルを選択し、キャビネットを変更し、ルームを調整、別のマイクを指定します。**[SAVE]**ボタンを押してから[SELECT]ノブで次のような画面を表示させます。



これが**CUSTOM SAVE**（カスタムセーブ）画面です。このアンプモデルと一緒に現在の設定を呼び出せるようにするには、**[SAVE]**ボタンを押します。

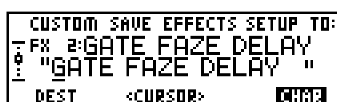
アンプモデルと一緒に次のコントロール 設定が保存され、後で**[AMP MODELS]**ノブを回せばその設定もロードされます。

カスタム化できるコントロール設定
アンプモデル
キャビネットモデル
マイクモデルとルームサイズ
DRIVE、BASS、MIDDLE、TREBLE、PRESENCE設定
チャンネルボリューム

エフェクト設定のカスタムセーブ

すでに述べたように、**[EFFECTS]**ノブを回すだけで、ペダル・ボードやラックマウントの64種類のエフェクトに簡単にアクセスできます。すでにプリセットの設定は入っていますが、たとえば、エディットしたファズボックスを好みに設定したアナログ・ディレイ・ペダルにつなぎ、アンプの後でフェーズをいっぱいにかけて、それをいろんなアンプモデルと組み合わせて何回も使う、という場合は、自分のカスタムエフェクト設定をまず作ってください。そうすれば、カスタム化したアンプモデルとその設定をいつでも組合わせることができます。

[SAVE]ボタンを押し、**[SELECT]**ノブで次の画面を表示させます。



保存先：DEST（デスティネーション：保存先）パラメータの下にあるボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]**ノブで保存先を選択します。現在の位置、または64個の位置の中から選択します。

名前：エフェクト設定に名前を付けます。**カーソル[◄]/[►]**キーで、変更したい文字の下にカーソルを移動し、**CHAR**（キャラクタ：文字）パラメータの下にあるボタンを押して、**[EFFECT TWEAK]**ノブで文字を選択します。

保存確定：[SAVE]ボタンをもう一度押すと、現在の**COMP**、**GATE**、**STOMP**、**MOD**、**DELAY**、**REVERB**設定が保存されます。

1つのチャンネルの呼び出し

気に入ったプリセットを上書きしてしまっても心配はいりません。以下の手順で好きなプリセットが呼び戻せます。

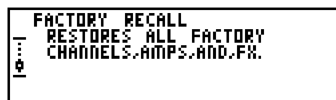
[SAVE]ボタンを押し、**[SELECT]**ノブで以下の画面を表示させます。



もう一度**[SAVE]**ボタンを押して、選択されたチャンネル・メモリーを呼び出します。または、**[EFFECT TWEAK]**ノブを回して別のチャンネル・メモリーを選びます。もう一度**[SAVE]**ボタンを押せば、なくしたプリセットがよみがえります。

プリセット一式の呼び出し

PODxtのメモリー全部を出荷時のプリセットにリセットしたい場合は、以下の手順で行ないます。**[SAVE]**ボタンを押し、**[SELECT]**ノブで次の画面を表示させます。



このまま操作を進めていいかよく考え、それでも進めたい場合は、**[SAVE]**ボタンをもう一度押します。これで工場出荷時のメモリー状態に戻ります。

重要注意：この操作によって、すべてのチャンネル、カスタム化されたアンプやエフェクト設定がすべて消えてしまいます。十分注意して操作してください。

MIDIダンプ

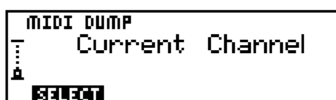
2台のPODxt間で音色を転送したり、PODxtとMIDIデータレコーダー、ワークステーション、コンピュータ、シーケンサーなどとの間で音色をやりとりしたい場合は、MIDIケーブルでPODxtの**MIDI OUT**と受信機器の**MIDI IN**を接続します。

以下のデータが転送できます。

- **全チャンネル**
- **現在のチャンネル**
- **エフェクト設定**
- **アンプ設定（カスタム設定も含む）**

全チャンネル・メモリーの送信：チャンネル・メモリーを全てMIDIで送信してバックアップします。

[SAVE]ボタンを1回押し、**[SELECT]**ノブで次の画面を選択します。



SELECTパラメータの下にあるボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]**ノブを左に回してAll Channelsを選択します。



[SAVE]ボタンをもう一度押すと、64個のチャンネル・メモリーがすべてMIDI端子から送信されます。もう1台のPODxtが接続されていると、そのPODxt内にこのデータが入るので、PODxtチャンネルのクローンができるわけです。

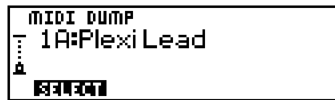
指定チャンネルのみの送信：1つまたは複数の特定チャンネル・メモリー、エフェクト設定、またはアンプモデルだけを別のPODxtに転送するには、以下の手順で行ないます。

[SAVE]ボタンを1回押し、**[SELECT]**ノブで次の画面を選択します。



[EFFECT TWEAK]ノブを回して転送したい内容を選択します。

任意のチャンネル・メモリー



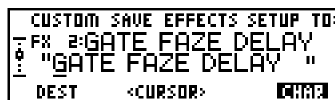
全チャンネル・メモリー



全アンプモデル



全エフェクト設定



[SAVE]ボタンをもう一度押すと、選択したMIDIダンプデータが受信側のPODxTまたはコンピュータなどのMIDI機器に送信されます。

アンプ＆キャビネットモデル

モデルとなったアンプ＆キャビネットについて

Line 6のスタッフは皆、サウンドを追求して止まないタイプです。あるアンプのソフトウェア・エミュレーションを作ろうとなったら、研究対象となるアンプの中でも最良のモデルを選びます。このように一つ一つていねいに選んだアンプ、スピーカーキャビネットをもとにしてPODxtのソフトウェアモデルを作り上げました。

アンプモデルの名前は長年変わらなくても、回路の改善や部品の代替などによって回路設計が大幅に変更されることがあります。たとえば57年、62年、65年、67年、75年、2001年の各アンプは同じモデル名であっても、音色や周波数特性、外観がまったく違うことがあります。

また、同じ回路設計で同じ時代に作られた2つのアンプでもサウンドがみごとに異なる場合もあります。これは、コンポーネントの耐久性等々、の違いによっても影響を受けます。また、年数を経てどんなキャラクターに落ち着くか、というのも個々のアンプによって異なります。それはまるで人間のようで、年とともに性格が丸くなる人もいれば、そうでない人もいます。このような理由から、PODxtのモデルとして選んだアンプは、すべて最高品質のサンプルを手に入れるよう努力しました。また、本書ではアンプサウンドを再現したPODxtのモデルを説明する時に、実際にどのアンプをモデルにしたかがよくわかるよう、写真も掲載しています。

それではPODxtのアンプモデルと、その土台となったオリジナル製品について説明しましょう。

PODxtには32種類のアンプモデルと22種類のキャビネットモデルが入っています。**[AMP MODELS]**ノブを回してアンプとキャビネットの組み合わせを選びます。**[CAB/A.I.R.]**ボタンを押して別の組み合わせを選び、**[EFFECT TWEAK]**ノブを回して別のキャビネットモデルを選ぶことができます。（**第4章**ではこの組み合わせをカスタマイズする方法を説明しています。）

5•1

製品名はすべて該当所有者の商標であり、Line 6社との関わりはありません。製品名、説明内容、写真は、本機のサウンドモデル開発中に研究対象となった製品を説明するためにのみ使用しています。

LINE 6のオリジナル

ヴィンテージ製品だけでは得られない音色も提供するLine 6オリジナルのアンプモデルからご紹介しましょう。

LINE 6 CLEAN

このアンプモデルはRolandの有名な「JAZZ CHORUS」ソリッドステートコンボJC-120の高音域とクラシックなMarshall JTM-45チューブヘッドアンプの低音域を加えることで、ソリッドステートアンプのクリーンなサウンドにチューブアンプ風のリッチな低音を加えました。

Line 6 JTS-45

初期のMarshallアンプの設計はFender Tweed Bassman回路をもとにしたので、Line 6のJTM 45のプリアンプとスピーカーを、58年型Tweed Bassmanのパワアンプ／トランスフォーマーと合わせたらどうなるか、と思ったのです。その結果できたのがJTS45。荒々しく力強いパンチ力があります。

Line 6 Class A

ギタリストが「これぞ最高!」と思えるようなトーンの体験の一つは、パワーアンプのレベルを上げてサウンドがちょうど歪み出してはいるが完全にクリッピングする直前の状態で演奏した時でしょう。これは「スイート・スポット」と呼ばれる「ツボ」のようなもので、多くのギタリストが求めているものです。デジタルの世界でアンプを作成している時は物理上の現実に制約されないので、このモデルではスイート・スポットだけを再現することにしました。思いがけないうれしい副作用は、フィードバックを簡単に引き出せることです。

Line 6 Mood

お気に入りのグランジギターサウンドをもとにした幻想的なサウンドです。

Line 6 Spinal Puppet

ハードロックを演奏すれば聴衆も皆リズムに合わせて頭を縦に振る、そんなサウンドです。

Line 6 Chemical X

どんなアンプを基にしてどのミュージシャンのサウンドを再現したのか、設計エンジニアが絶対に打ち明けてくれなかった、不可思議なオリジナルサウンド。ゲインをあげるとパンチ力が強調され、音量を下げるとすっきりとクリーンなサウンドになります。

LINE 6 INSANE

LINE 6 CLEANとLINE 6 DRIVEを組み合わせたものです。複数のアンプを同時に使って全体のサウンドを作り上げるのはどんなギタリストやプロデューサーも経験しているテクニックです。たとえばスティービー・レイ・ボーンはギター信号を分岐しMarshall、Fender Vibroflex、Dumble Steel String Singerを同時にドライブして素晴しいサウンドをレコードに収めました。このアンプモデルは伝統的でクリーンなギター音にLINE 6 DRIVEに手を加えたサウンドを重ね合せたものです。[DRIVE]ノブを左いっぱいに回すと低域に厚みのあるクリーンなサウンドに、右いっぱいに回すと超ドライブのかかったサウンドになります。それ以外の位置ではこの2種類のサウンドが重なったサウンドになります。

Line 6 Piezacoustic 2

アコースティック・ピックアップを内蔵した最新流行のブリッジを持つソリッドボディーのエレキギターに搭載された、Piezoピックアップの出力によく合ったモデルです。このタイプのギターではフィードバックでギターのボディーが振動するのを心配しなくてもいいので、このモデルは中域の下部と低域レンジを強調して作りました。

Zen Master



Budda Twinmaster 2x12コンボをモデルにしました。Buddaのサウンドは暖かみがあって超一流のClass A/Bサウンドを持っています。Buddaの原理は何といってもパワフルなチューブ（真空管）によるディストーションで、シンプルの一言に尽きます。入力時のゲインが比較的低く、トーン・コントロールは非常にインタラクティブで、整流器のパワーがふっと落ち込むようなアンプなので、小規模なセッションやレコーディングなどでクラシックなサウンドを思いきり出したい時に最適です（わずか18W!）。オリジナルには中域コントロールがなかったので、**[MIDDLE]**ノブでポスト・アンプモデル信号の中域に輪郭を付けられるようにしました。飾り気のないBudda風のヴァイブに乗るには、このノブを12時の位置に設定してください。

Small Tweed



1953年の通称「ワイドパネル」Fender Tweed Deluxeをモデルにした、うなるようなサウンドです。元のアンプにはトーン・コントロールが高域1つしかないので、**[TREBLE]**ノブでこの高域カットをコントロールします。**[BASS]**と**[MIDDLE]**ノブは、風格あるオリジナルのサウンドを損なわないよう、いずれもアンプモデルの後でEQを調整します。アンプサウンドを録音した後でミキサー上でEQを調整する要領です。**[BASS]**と**[MIDDLE]** ノブは真ん中（「ニュートラル」）に、**[PRESENCE]**を0に設定してから、**[TREBLE]**ノブを真ん中より上にすると、クラシックなツイードのサウンドが得られます。

Tweed B-Man



58年型クラシックのFender Bassman 4x10コンボはすぐにプレイできるアンプでした。もともとはベースアンプでしたがBassmanは6弦ギタリストのブルースの象徴になりました。ベースアンプによくあるように低域がファットですが、高域にはFender特有のビビーンッとした鳴りがあります。ジム・マーシャルがケン・ブランと一緒に最初のアンプを作ったときも、このBassmanの初期モデルに大いに影響されました。Bassmanの面白い特長の一つが、中域と高域のコントロールが相互に影響し合うということです。中域コントロールはふつうのトーンコントロールによく見られるのと違ってバンドパスではありません。高域コントロールがもう一つあるような感覚なのです。この両方が付加されるので、**[MIDDLE]**ノブを半分以上に高く設定すると、**[TREBLE]**ノブで調整する高域が思わぬほど明るくなってしまいます。一方**[MIDDLE]**ノブを低くした場合は**[TREBLE]**をブーストしたほうがいいでしょ

う。BassmanはPODxtのモデルとなった他のアンプと同じように、マスターボリュームがありませんでした。そこで高ゲイン設定でBassmanのトーンを出すためには、そばにいる人が難聴になるくらいボリュームを上げることが必要でした。ところがPODxtでは寝室でもスタジオでも、ヘッドフォンを通してでもそんな音を何なく出してしまいます。[DRIVE]ノブを4〜5あたりに設定すると、おなじみのR&Bサウンドが作れます。

Tiny Tweed



1961年型Tweed Champを基にしたモデルで、ドライブをかなり上げると素晴しいサウンドになります。このアンプはもともと初心者向けでしたが、低ボリュームでもけっこう使えるディストーションサウンドが得られることをロックンローラーたちが素早く見い出したのです。50年代のクラシックギターソロの多くはこのChampを通して録音されました。Champにはトーン・コントロールがなく、ボリューム・コントロールしかありません。PODxtではクラシックなChampサウンドが簡単に出せます。**[BASS]**、**[MIDDLE]**、**[TREBLE]**ノブを12時の位置(「フラット」)に設定して、サウンドにトーン・コントロールをかけないようにするのがコツです。**[PRESENCE]**は0にすれば、Champの正真正銘のサウンドをシミュレートできます。もっと冒険したい方はノブをいろいろに調整してください。

Blackface Lux



ブラックフェースのFender Deluxe Reverbはブルース、カントリー、ルーツのギタリストにとって憧れでした。FlextoneとPODの開発で究極のデラックス・リバーブを探してモデル候補のアンプをいろいろと試聴したあげく、64年型のDeluxeに突き当たりました。

ギターのボリュームノブをほんのわずか絞ってからDeluxeで7くらいに上げるとジャリジャリッとしたカッコイイサウンドが出ます。ドライブを変化させると、トーン・コントロールの反応も変化するのにご注意ください。クリーンな設定ではピシッと筋の通ったサウンド。ドライブを最大限にかけると高域がやんわりとメローになります。これがDeluxeアンプの典型です。Deluxeアンプは低域と高域のコントロールしかありませんでしたが、PODxtの**[MIDDLE]**ノブを使ってモデルアンプ処理後の中域の輪郭をつけ、**[PRESENCE]**でプレゼンスを加えるようにしました。**[MIDDLE]**ノブを12時の位置（半分の「ニュートラル」の位置）にして**[PRESENCE]**ノブを0に設定すると、クラシックなDeluxeサウンドとなります。レベルを上げれば骨太で通りの良いサウンドになります。モデル作成時には、ヴィブラートチャンネルのINPUT 1に接続しました。

Double Verb



懐かしのブラックフェースFender Twin（1965年Twin）はジャズ、カントリー、ロックまで幅広く使われました。ジョニー・ウインターもコンサートでリック・デリンジャーと一緒にそれぞれ6つのTwinをピラミッド形に積み上げて使っていました。2階のバルコニー席から聴いてもかなりのボリュームだったことを覚えています。Twinは音質が柔軟でいろんな状況でも安心して使えます。オーバードライブがかかりすぎて歪むこともなく、ボリュームだけはひたすら大きいのです。

クラシックなサーファーサウンドにピッタリです。スプリングリバーブを上げトレモロをオンにしてボリュームをアップしてサーフィンサウンドをお楽しみください。

モデリング時にはノーマルチャンネルのINPUT 1に接続しました。

Two-Tone



Valco/Supro作製のアンプ、Gretsch 6156です。興味深いのは、出力トランスフォーマーがアンプ本体ではなく10インチ・スピーカー上に取り付けられていることです。また、前面パネルを布で巻いてあるという、50年代にしては未来的なデザインになっています。

Hiway 100



Hiwatt DR-103に基づいたこのモデルは、どんな環境でも通りが良いパンチ力のあるサウンドを出力し、ボリュームをいっぱいに上げても音の枠組みをしっかりと維持しています。設計者であるデイブ・リーヴスが1966年にDallas Arbiter社のSound City部門を後にしてHyLight Electronicsを結成した時に求めていたサウンドが、このサウンドだったのです。彼の最初のデザインは当時のVoxやSelmerアンプを思い出させるものでしたが、間もなくリーヴスは60年代のブリティッシュ・ロックのファンがよく耳にするようになったアンプを作り出しました。「戦車」のような構造で知られており（これは多分にリーヴスが雇った配線スペシャリスト、ハリー・ジョイスの影響があるでしょう）、ピート・タウンゼントも長年愛用しました。Hiwattを使ったのはピート・タウンゼントだけではありません。ピンク・フロイド、ムーディー・ブルース、マンフレッド・マン、ジェスロ・タルなど当時のブリティッシュ・ロック・ミュージシャンもHiwattを使用しました。ボリュームを思いっきり上げてガガーンと突き抜けるような音を楽しんでください。

Plexi 45



このアンプモデルはMarshallロゴが現在の「筆記体」になる以前の「ブロック体」の文字を使いフロントに金のプレキシグラス（アクリル樹脂）を施した、1965年のJTM-45ヘッドアンプです。.イギリスで見つけたこのアンプに、私達はすっかり虜になってしまいました。アンプにはオリジナルのKT-66がまだ搭載されていました。これは今まで聞いた中でも最もすばらしいJTM-45の例で、会社では、今度の週末は誰がこのアンプを家へ持って帰るか、ということでいつも喧嘩になったものです。

JTM-45が登場したのは、Marshallアンプがメローなフェンダー風のサウンドから明るさの目立つ「バリバリッ」とした今のMarshallサウンドに移行し始めた頃です。

Plexi Lead 100



世界中の音の玄人から羨望のまなざしを浴びた、Marshall "Plexi" Super Leadをモデルにしました。世界中を文字どおりくまなく探して、オランダでこのSuper Leadのすばらしいサンプルを見つけました（運命とはこのことでしょう）。このアンプが作られた1968年ころまでにはMarshallアンプの回路は、Fender 6L6パワーチューブの伝統から離れ、EL34チューブへと移りました。もう一つのサウンドの大きな違いは、必要とされる出力と電源トランスの変化によるものです。こうしていろいろと試行錯誤して、ロックギターと永遠の結合をするサウンドを作り上げたわけです。この時代のアンプはマスターボリュームがなかったので、このサウンドを出すにはSuper Leadモデルのボリュームを最大に上げることが必要です。ジミー•ヘンドリックスはこの

時代のMarshallを使いました。20年後ヴァン・ヘイレンの最初の2枚のアルバムの倍音豊かでパワフルなサウンドは100ワットのPlexiアンプで出しています。（事実、モデルとなったSuper Leadアンプには、68年型モデル特有の「横型」タイプのトランスフォーマーがありました。ジミ・ヘンやヴァン・ヘイレンのMarshallも同様です。）プレキシアンプからバリバリッとしたサウンドを出すには入力レベルとトーンコントロールを10まで上げてください。このモデルは「元のアンプとまったく同じようなサウンドを作る」という基本概念を貫いて、それに近いサウンドに仕上がっています。

Plexi Jump Lead



ギターをプレイするってことは常に実験また実験の繰り返しですよね。また、手持ちの機材を使って、できる限りのディストーションを生み出す方法を見つけることでもあります。

プレキシアンプでできる面白い実験は、短いギターケーブルでチャンネルIとチャンネルIIを接続してサチュレーションを高めてみることです。そのサウンドがとても気に入る人もけっこういて、アンプのケースを外して内部でジャンパーをつないでしまう人もいます。

サウンド狂の私達としても、その音色をお届けせずにはいられません。

Plexi Variac



ああ、これこそ伝説の代物。エドワード・ヴァン・ヘイレンが「Brown Sound」で見せた魔法のサウンドの背景には、可変ACトランスフォーマー（通称「Variac」）で高電圧をかけてMarshallの100ワット、Super Leadを使用した、という伝説があるのです。

貴重な機材に損傷を与えるような高電圧での実験はお勧めしませんが、私達は義務としてこの伝説が本当なのかを確かめる必要がありました。そこでVariacを140Vまで上げて68年型Super Leadのパワーを試してみました。（アンプは無事でしたからご心配なく）。その結果、この伝説も真実から遠からず、と思っています。

Brit J-800



世界中どこでも評判の高いMarshallのJCM 800です。プレキシアンプの後続バージョンで、Marshallの伝統を維持しつつ新世代のロックギタリストのためにゲインとエッジを追加したものです。一番大きな違いはトーン・コントロールがプリアンププチューブの後にあるということです。

JCM 800のバージョンによっては、ダイオードをクリッピングさせてディストーションをかけるものがあります。このアンプモデルに使ったオリジナルのアンプはチューブを使ってディストーションをかけています。

このアンプこそMarshallを有名にしたメタルサウンドです。Marshallをクリーンなサウンドに使う人はあまりいませんが、サウンド自体が良いのでぜひドライブ設定を低くして試してみてください。もちろんドライブをかけてガンガンにプレイするのもいいですけど。

Brit JM Pre



MP-1はMarshallのラックマウントのプリアンプ第一号で、パワーアンプの圧縮のない、タイトでサチュレーションの高いサウンドを求めるミュージシャンや、ロングヘアのメタルバンドが好んで使っています。また、MIDIでコントロールできる最初のプリアンプでもあります。

JMPのオーバードライブ感はMesa Boogie風で、ADA MP-1やMesa Boogieプリアンプに相当するのがこのJMP-1だと見ている人も多くいます。JMPは90年代初期に登場し、タイトでアグレッシブ、かつパワーアンプの中域落ち込みによる圧縮がなく、枠組みのしっかりしたサウンドを求める新しいメタルバンドの間で最近人気が高まっています。7弦プレーヤーならこのモデルが気に入るはずです。

Match Chief



Matchless Chieftainをモデルにしました。MatchlessにはEL-34パワードClassAがあります。とてもユニークな音です。(複雑なEQ回路によります)

ChieftainはMatchlessのマーク・サンプソンが、Fender/Marshallタイプのフロントエンドにクラシックの「スポンジ」感のあるとても敏感なClass Aのパワーセクションをブレンドするために設計しました。

次のアンプモデルDC-30よりもゲインが高く、ルーツミュージックに最適です。フロントのロゴのあるネームプレートが点灯するセクシーな外観はサウンドには関係

ありませんが、確かにカッコよくみえます。

Matchlessが店を閉めたとき、ChieftainとDC-30は収集家の間でかなりの高値が付き、その中古品などは元の値段より10万円以上も高くなることもしばしばです。PODxtのMatchlessモデルでMatchlessの遺産をよみがえらせてください。

Match D-30



Matchless DC-30をモデルにしました。

DC-30はMatclessの名を広めたアンプです。アンプ設計者であるマーク・サンプソンは、ワイドなレンジのサウンドに対応し、ツアーコンサートにも耐えられるClass Aアンプを作ることにしました。

戦車のような作りで（重量もそれだけのことはあります）、Voxの初期のアンプを元に作成したので、Vox AC-30（PODxtのアンプモデルにもあります）がお好きなら、このDC-30モデルも使ってみてください。

モデル作成時にはチャンネル1を使いました。

Recto Dual



2001年型3チャンネルのMesa Boogie Dual Rectifier Solo Headをモデルにしました。

Dual Rectifierはロングヘアのロックンローラーが好む、モダンで高ゲインのアプ

ローチをしたものです。それ以前のMesa Boogieに比べて、Dual Rectifierのトーン・コントロールには高ゲイン設定での影響が大きいので、中域を思いきりカットして超低域をアップできます。

モデリング時には、Modern設定でチャンネル3を使い、背面のスイッチ類をそれぞれBold、Tube Rectifierにしました。

Cali Crunch



Mesa Boogie Mark IIc+をモデルにしました。

Mesa Engineeringは、ランドール・スミスが古いFenderのPrincetonアンプをサンフランシスコ近辺のミュージシャン用に改造することでスタートしました。何年もかけてアンプは進化し、エフェクトループ、切り替えチャンネル、ランドールのSimul-Classデザイン（出力チューブの1組をClass ABで、もう1組をClass Aでドライブ）などが加わりました。Mesa Boogieは真の意味で最初のモダンギターアンプと言え、小型ながらパワーがほしい多くのプレーヤー達がすぐに飛びついたものです。

Jazz Clean



Roland JC-120をモデルにしました。このトランジスターアンプはきしむようなクリーンなサウンドと内蔵ステレオコーラスで有名です。このアンプモデルを使うときは高域を上げるとどんなミックスでも突き抜けて聞こえるクリーンサウンドが得られます。80年代の「ニューウエーブ」サウンドにも最適 です（ポリスのアンディサマーズのお気に入りアンプでした）。またすべてのノブが12時の位置で暗っぽい

ジャズサウンドになります。基本的にはレスポンスがフラットで、ジャズのコードや単音のメロディーに適したバランスの取れた音がフレットのどこでも得られます。

Solo 100



Soldano SLO-100ヘッドアンプをモデルにしました。

マイク・ソルダーノが有名になったのは、Marshallアンプにいろんな面白いモジュレーションを加えることができたからです。そしてまもなく彼はクロームのトランスフォーマと枠組みを持つ自分独自のアンプを作り始めました。このアンプは防弾構造、軍隊仕様の配線や部品でも有名でした。

高ゲインで知られていますが、すばらしいクリーンサウンドも持ち、エリック・クラプトンがアメリカで人気の土曜日深夜のコメディーショー「Saturday Night Live（サタデーナイト・ライブ）」でSoldano SLO-100を使って演奏してからは、このアンプが脚光を浴びました。

Super O



まだまだある伝説のアンプ。ジミー・ペイジは58年モデルのテレキャスターとSuproアンプを使ってレッド・ツェッペリンの最初の2枚のアルバムをレコーディングしました。ただ問題なのは、Suproのどのモデルを使ったかをはっきり言わなかったことで、彼の「Supro」という一言で質屋や楽器店に先を争って買いに行く人が殺到し、それがどのモデルであっても手に入れることはできなくなってしまいました。

「Led Zeppelin II」のレコーディング中に実際にその場にいた知り合いまで連絡を

取ったりして、そのアンプが何だったか覚えているか尋ねました。モデル番号までは覚えていませんでしたが、それが「グレーとシルバーのちっぽけなアンプ」だったようです。また別の筋からは、1x12インチのモデル、という情報が入りました。このため、ジミー・ページがしゃべってくれるまでは謎のままですが、真実が何であれ、このPODxtのモデルでツェッペリンのアルバム「Houses of the Holy」を弾いたら誰もが納得するでしょう。

ところで、このアンプにはカーステレオのような6x9インチのスピーカーが入っています。

Class A-15



これもVoxを基にしたアンプモデルです。チャンネル1の1960年型AC 15をベースにしています。サウンドはVettaに使ったVox AC 30に似ていますが、それより小さめのアンプです（12インチのスピーカーを1つだけ使っています）。このため、もっと暖かく「木質」的なサウンドになります。元のアンプにはトーンコントロールが高域カット1つしかありませんでしたから、それを忠実に再現したと同時に、低域、中域の輪郭付けをアンプモデルの後でできるように細工しました。**[BASS]**と**[MIDDLE]**を12時の位置（真ん中のニュートラルの位置）、**[PRESENCE]**を0に設定し**[TREBLE]**コントロールを使って、アメリカへ上陸したあの時代のイギリスのバンドのサウンドを出してください。

モデリング時にはINPUT 1より多少暗めのサウンドのINPUT 2に接続したので、AC 15の懐かしく有名な暖かみのあるサウンドが出せます。

Class A-30 TB



60年代初期に音楽シーンが変化してギタリストたちはブリリアンスやトゥワングを取り入れるようになりました。そこでVoxアンプのメーカーであるJennings Companyは、すでに搭載されていたトレブルカット用ノブに、高域コントロールと低域コントロール（そして12AX7のゲイン段）を追加することにしました。この追加回路が有名なTop Boost（トップブースト）です。（トレブルカットのノブはスライディング・バンドパス・フィルターで、ノブを回すと高域がカットされる、というように、普通のトレブルノブとは全く逆に作用するノブでした。）

トップブースト搭載のAC 30は60年代にアメリカに上陸した数々のイギリスのバンドによって有名になりました。Voxサウンドのユニークな特性の多くは、Class AアンプがClass ABとはだいぶ違ったオーバードライブの仕方をする、という点にあります。クイーンのブライアン・メイ、トム・ペティー／ハートブレーカーズのマイク・キャンベル、U2のエッジは皆AC 30を使いました。普通はけっこうクリーンなサウンドでプレイしますが、AC 30をブーストするとクイーンの初期のアルバムで聴けるブライアン・メイ風の素晴しい密度の高いリードサウンドが出せます。

このアンプモデルでは、PODxtの**[MIDDLE]**コントロールがAC 30のオリジナルのカットノブの役割をします。

モデリング時には、ブリリアントチャンネルのHIゲイン・インプットを使用しました。また、オリジナルのトップブースト搭載アンプでは、ノブ設定を上げるほど低域、高域が下がりましたが、PODxtでは標準のトーン・コントロールと同じような動作になるよう変更しました。

Tube Preamp

ギターアンプにほど遠いのですが、「PODxtを手にしたら、きっといろんなことに使いたくなるはず。キーボードサウンドを暖かめにしたり、ドラム音をピシッと決めたりボーカルにドライブをかけたり、」というわけでこのモデルを作ったのです。プロデューサーやエンジニアがスタジオでヴィンテージのチューブを使ってよくやるように、どんな音源でも暖かみのあるサウンドにします。ボーカルに切れ味がほしい場合は、ボーカルトラックをPODxtに通します。あるいはシンセベースのトラックをPODxtに通してドライブとEQコントロールを上げて好みのサウンドに仕上げます。このモデルはギターアンプモデルではありませんが、素晴しいギターサウンドも使えます。ベースのダイレクトボックスとしても使用可能です。その場合は[DRIVE]コントロールをリバーブのミックスノブのように使って、信号の量をコントロールします。PODxtに通す前のサウンドと通した後のサウンドをミックスすると音がムラになるので、それは避けましょう。その代わり音源を直接PODxtに入れてから、PODxt処理後のサウンドだけをモニターします。トーンコントロールが12時の位置でEQがフラットになります。

キャビネットモデル

PODxtでは次のキャビネットモデルが使用できます。**[CAB/A.I.R.]ボタンを押したまま[EFFECT TWEAK]ノブを回して**選んでください。

Cabinet Model	ベースにしたモデル
1×6 Super O	6×9 Supro S6616
1×8 Tweed	1961 Fender Tweed Champ
1×10 Gibtone	1×10 Gibson
1×10 G-Brand	Gretsch 6156
1×12 Line 6	Line 6 1×12
1×12 Tweed	1953 Fender Tweed Deluxe
1×12 Blackface	1964 Fender Blackface Deluxe
1×12 Class A	1960 Vox AC-15
2×2 Mini T	2×2 ”Fender Mini Twin
2×12 Line 6	Line 6 2×12
2×12 Blackface	1965 Fender Blackface Twin
2×12 Match	1995 Matchless Chieftain
2×12 Jazz	Roland JC-120
2×12 Class A	1967 Vox AC-30
4×10 Line 6	Line 6 4×10
4×10 Tweed	1959 Fender Bassman
4×12 Line 6	Line 6 4×12
4×12 Green 20 ’s	1967 Marshall Basketweave with Greenbacks
4×12 Green 25 ’s	1968 Marshall Basketweave with Greenbacks
4×12 Celest T-75	1978 Marshall with stock 70s
4×12 Celest V-30	1996 Marshall with Vintage 30s
4×12 Recto	4×12 Mesa Boogie
キャビネットなし	ギター以外の音源にチューブのプリアンプを使うときのキャビネットモデル。アンプモデルでTUBE PREAMPを選択すると、初期設定でこれが選ばれます。

5•18

エフェクト

ペダル・エフェクターについて

ペダル・エフェクターが好きじゃないギタリストなんていないはず、PODxtにはLine 6のDM4 Distortion Modeler、MM4 Modulation Modeler, DL4 Delay Modelerの当社フラッグシップコンボ類から採用したすばらしいペダル・エフェクターのモデルが搭載されています。また、さらにピンポン、ステレオディレイ・エフェクトも搭載しています。

本章では、モデルとなったオリジナルのペダル・エフェクターの説明だけでなく、その調整の方法もご案内します。

エフェクトの基本的なエディット

PODxtにはアンプモデルと組み合わせができる様々なペダル・エフェクターやエフェクトモデルが入っており、チャンネルの切り替え、ペダル感覚のオン／オフ、タップテンポなどが可能です。オプションのフット・コントローラFBVまたはFBV Shortboardを加えればまったく手を使わずにこれができます。また、コンピュータを使わずにすべてのパラメータが調整できます。エフェクトのオン／オフは、ディスプレイの上にあるエフェクト切り替えボタンを押すだけです。

4つのエフェクト切り替えボタンがあります。

[COMP (GATE)]ボタン：LA-2Aコンプレッサーモデルをオン／オフします。2回続けて押すとコンプレッサーの設定を変更できます。**ノイズゲート**にもアクセスできます。

[STOMP]ボタン：ディストーション・ペダルやコンプレッサー・ペダルにアクセスします。1回押すごとにオン／オフが切り替わり、2回続けて押すと**エディット画面**に入ります。

[MOD]ボタン：モジュレーション・エフェクトもいくつか用意しています。1回押すごとにオン／オフの切り替え、2回続けて押して**エディット画面**に入ります。

[DELAY]ボタン：ディレイ・エフェクトが入っています。1回押すごとにオン／オフの切り替え、2回続けて押して**エディット画面**に入ります。

詳細なエディット

PODxtのペダル・エフェクターも各種エフェクトもエディット方法は同じで、その詳細は**4章の「サウンドの作成と保存」**で説明しています。ここでは2つの基本をおさえておきます。

A. **[EDIT]**ボタンを押し、**[SELECT]**ノブでページを移動してエディットしたいパラメータを見つける。

B. エフェクト切り替えボタンを2回続けて押して、そのエフェクトの最初のエディット画面に入る。

ペダル・エフェクター：ディストーションとオーバードライブ

ファズ、ディストーション、オーバードライブが登場する前に、ギタリストたちはスピーカーをカミソリの刃で切れ目を入れることで、濁って歪んだサウンドを出しました（例として懐かしのリンク・レイの「Rumble」を聞いてみてください）。音はすばらしかったのですが、その後で同じアンプを使ってバラードをプレイするなんてことは無理でした。

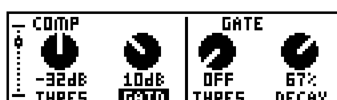
ここでファズボックスが登場します。最初に登場したファズボックスは、故障したミキサーのインプットモジュールのサウンドを再生するために設計されたものでした。これが真実かはともかく、まもなく誰もがペダルのディストーションという現代のミラクルに満足するようになりました。

ペダル・エフェクター：コンプレッサー

コンプレッサーは、サウンドレベルの高低を比較的なめらかにする役割を持っています。このため、レベルの高いサウンドがそれほどうるさくならず、レベルの低いサウンドが高いサウンドレベルに近付きます。その結果、ギターを弾いた時に音が減衰していく部分のレベルをブーストして、音のディケイ部分を長くします。つまり、アンプの前でコンプレッサーのペダルを踏むと、サスティンが強調されるわけです。おまけに、コンプレッサーによってアタック部分の粒が揃い、ゲイン補正でレベルを上げることもできます。（つまり、アンプのフロントエンドで強く弾いても、ふつうならアンプへの入力レベルをブーストするとディストーション・ペダルが生み出すようなディストーションが生じません）。PODxtには数々のコンプレッション・ペダルのモデルが入っていますから存分に楽しんでください。

コンプレッサー／ゲート・エフェクト

レコーディングスタジオでよくやるように、レベルをスムーズにしたい時は、**[COMP (GATE)]**ボタンでコンプレッサーにアクセスします。**THRES**（スレッショルド）でコンプレッサーの程度を設定します。値が小さいほどコンプレッサーがかかる程度が大きくなるため、たとえばー32dBはー16dB設定よりもかかり方がキツくなります。**GAIN**は、コンプレッサーによって全体のレベルが下がるため、これを補正するためにレベルを上げるパラメータです。



演奏していない時のヒスノイズを抑えたい場合は、ゲート・エフェクトを使います。特に高ゲインのサウンドには便利です。ゲートは通したいものをサッと通すためにすぐに開き、用のないものは通さないよう、すぐに閉るものでないといけません。**THRESH**を最小にするとゲートは無効になります（**THRESH**パラメータの値は上記画面のように**OFF**になります）。**THRESH**パラメータは、どれだけのレベルで演奏したらゲートが開くかを設定します。値が小さいほど（マイナス記号に続く値の数字自体が大きくなり、画面のコントロールノブ表示が左に回るほど）、演奏ボリュームが小さくてもゲートが開きます。値が大きいほど（マイナス記号に続く値の数字自体が小さくなり、画面のコントロールノブが右に回るほど）、ボリュームを大きくして演奏しないとゲートは開かなくなります。**DECAY**はゲートが閉る速度を設定します。ゲートを急いで閉めるほど足を挟んでしまう可能性が大きくなるように、ゲートによって弾いた音符の尻尾の部分をカットしてしまうことになります。ゲートを閉めるのが遅いと、自分の後に誰か続いて入って来てしまうことがあるように、弾いた音のディケイ部分と一緒に不要なノイズも入って来ることがあります。**DECAY**パラメータの設定は、使用するギター、演奏スタイル、サウンド設定などに合わせて適度になるよう、いろいろと試してみてください。

モジュレーション・エフェクト

モジュレーション・エフェクトは、フェーズ・シフターからフランジャー、コーラスまで、音にうねりやパルス、震えを加えます。モジュレーションとは「変調」のことで、低周波を使って、信号の振幅や周波数を変調することです。変調波とは、うねり、パルス、震えを生み出すものです。

モジュレーション・エフェクトにはスピード**(SPEED)**とデプス**(DEPTH)**パラメータがあります。**SPEED**は変調波のうねる速さを、**DEPTH**は変調波の全体の振幅、つまりエフェクトの強さを設定します。**MIX**パラメータなどもあります。詳細は各エフェクトのリストをご覧ください。

タップテンポ

PODxtのディレイ／モジュレーション・エフェクトのほとんどは、**スピード**または**ディレイタイム**を曲のテンポに合わせることができます。**[TAP]**ボタン、またはFBVの**[TAP]**スイッチをビートに合わせてタップします。最低2回タップするだけでテンポが合います。

特定のエフェクトをタップテンポに合わせるには、**[EFFECT TWEAK]**ノブで**SPEED**またはディレイの**TIME**を最小値よりも下まで下げます。ディレイなら20ミリ秒以下に下げると、ディスプレイに全音符が表示されます。そのまま回していくと、今度は四分音符になります。次に2回タップすると、タップしたテンポにディレイタイムが同期するのがわかります。**TIME**値を二分音符にすると、ディレイは先ほどより2倍遅くなります。二分音符は四分音符の2倍の長さだからです。

モジュレーションの速度をタップテンポに合わせるのも同じ要領です。モジュレーション・エフェクトの**SPEED**パラメータを選択し、**[EFFECT TWEAK]**ノブを回して音符を表示させ、**[TAP]**ボタンをタップします。

これはDELAYページで**TIME**パラメータに音符を選択した画面です。



テンポの値が正確にわかっている場合は、**[EDIT]**ボタンを押して点灯させ、**[SELECT]**ノブを回してエディット画面の最終ページを表示させます。ここでは**TEMPO**パラメータ、つまり現在のチャンネルのテンポ（拍数／分）を設定します。これで、このノート値を使うように指定したチャンネル内のエフェクトすべてが、設定テンポに従います。

リバーブ

PODxtの製作に取りかかった時、妥協ない真のエフェクトを開発することにもかなりのエネルギーを注ぎました。

PODxtのリバーブモデルには、ルームやホールなどの物理的な環境をシミュレートしたものがあります。また、大きなスチールのプレートや金箔、スピーカー、プレートの振動を拾う複数のピックアップを使用したプレートリバーブも持っています。ギタリストが一番良く知っているスプリングリバーブ、聴いてみないとわからない新しいユニークなモデルなどもあります。

スプリングリバーブ

スプリングリバーブといえばサーフ・ミュージック。あと必要なのは、ベーシストが波にのってキミのアンプに突っ込んだ衝突音でしょう。

Lux Spring
2つのスプリングリバーブのタンクを内蔵したブラックフェースのFender Deluxeアンプをモデルにしました。

Standard Spring
ブラックフェースのFender Twin Reverbが長年愛用されてきたのは、そのリッチで密度の高いリバーブサウンドです。3つのスプリングでFender初期のスプリングリバーブより更に複雑なサウンドを生み出します。

King Spring
Line 6のオリジナルで、高級スプリングベッドのマットレスに感化されました。3つのスプリングがカッコいいなら、キングサイズのベッドにいっぱい詰まったスプリングのリバーブはいかが？もっとリッチで密度も高く、熟睡できること間違いなし。

製品名はすべて該当所有者の商標であり、Line 6社との関わりはありません。製品名、説明内容、写真は、本機のサウンドモデル開発中に研究対象となった製品を説明するためにのみ使用しています。

ルームリバーブ

何年もの間、創作的なレコーディングエンジニアたちは、どんな部屋でも無理矢理リバーブの効く部屋に仕立て上げました。階段、廊下、地下室などは人気の場所でした。PODxtは素晴らしいルームリバーブを提供します。

Small Room
昔はデジタルリバーブなんてありませんでした。レコーディング時にサウンドに部屋の臨場感を与えたかったので、音がよく反響する大きなからっぽの部屋を作ったらどうか、というアイデアが生まれました。部屋の中にスピーカーを置き、そのスピーカーからサウンドを出して、マイクから残響を拾って元の音楽にミックスするというものです。このような初期のリバーブチェンバー（ルーム）にはそれぞれ個性があり、そのリバーブサウンドゆえに名声を覇せたスタジオもありました。PODxtのSmall Roomモデルは60年代にあった中規模のスタジオのリバーブチェンバーをモデルにしています。

Tile Room
ギターを大きな浴室で録音したようなものです。陶器の床やバスタブは素晴らしい残響を作り出します。昔はサックス演奏者がよく風呂場で録音したようです。少なくとも、そのようにサックス演奏者たちは語り継いでいますが…。

Brite Room
生き生きと明るいルームを再現しています。

ホール

これは居間と寝室の間にあるホールのことではありません。もっと大きい空間を指します。

Dark Hall
反射音の多い大きなコンサートホールです。設定を最大にしてもけっして邪魔にならない背景リバーブに最適です。

Medium Hall
反射音のかなり多い中程度の大きさのホールです。

Large Hall
これより大きいホールはないという、広いコンサートホールです。

チャンバー
ひと昔前までは、デジタル・リバーブなるものは存在しませんでした。でも、サウンドにもっとスペース感を加えたい人も多く、音が心地よく反射する大きい空き部屋を作ればいい、というアイデアが浮かびました。そこにスピーカーを積み上げ、そのスピーカーから音を出し、部屋に置いた複数のマイクで拾うと、部屋の音響、雰囲気も一緒に録音されたわけです。このような部屋はリバーブ・チャ

ンバーと呼ばれ、そのチャンバーごとに固有の特性を持っていました。この独自のリバーブサウンドによって有名になったスタジオもいくつかあります。

Rich Chamber
クランチサウンドがさらにファット（太く）になります。

Chamber
典型的なスタジオルームで、どんなサウンドにも合います。

Cavernous
実は、Large Hallより大きいホールでした。

プレート

プレートリバーブは最初の「メカニカル」なリバーブです。基本的な設計は、大きなスチール板か金箔のシートとそれをドライブするスピーカー、それにプレートの振動を拾う複数のピックアップから構成されています。

Slap Plate
サム・フィリップスがエルビス・プレスリーで有名になったメンフィスのサン・スタジオで録音したような初期のロックンロールの残響です。

Vintage Plate
いつまでも心に残る、ヴィンテージのプレートリバーブです。

Large Plate
ホールにLarge HallとCavernousがあるので、プレートも対抗してビッグにしました。バックグラウンドのビッグなリバーブとして最高です。

The Stomp Effects — Facial Fuzz



1966年の終わり頃、悪名高き丸いペダル・エフェクターがロンドンのミュージック・シーンに登場しました。製作したのはArbiter Music社。Fuzz Faceという名前で、伝説のギタリスト、ジミ・ヘンドリックスも使って有名になりました。

初期のペダル・エフェクターと同様、このFuzz Faceも様々な設計変更や改訂を行いました。モデル対象としたのは、ゲルマニウム・ダイオードを使用したものです。上の写真はかなり初期のユニークな「グレーのボディーに黒いスクリーンを付けた」オリジナルのArbiter Fuzz Faceです。PODxtのFuzz Faceモデルを呼び出してドライブをガンガンに上げれば、目の前に" パープル・ヘイズ "が見えてくるかも。

Fuzz Pi



イギリスに負けじと、アメリカでもファズ人気に乗じて色々なファズ・エフェクトが作られました。Electro-Harmonixではマイク・マシューズと彼の仲間たちはすでにいろんなエフェクトの構想を練っていましたが、中でもディストーション／ファズペダルに注目しました。一番人気があったのは、Electro-Harmonix Big Muff Piで、ファジーなサウンドというよりも甘いサスティンで知られました。

Electro-Harmonixは余った部品を使うことで有名で、その結果、回路設計や部品仕様がくるくるとよく変わりました。上記の写真はBig Muffですが、これらのペダル・エフェクターは、マイクと仲間達がその場で見つけた部品を使ったので、それぞれ外観が違っています。一番かわいいのは真ん中のペダルで、ノブが三角状に並んでいるので「三角ノブ」モデルと呼ばれています。Pi（パイ）と呼ぶからには、アップルパイか何かの一切れに似ているのかと思わせますが、実際には想像もつきません。

Screamer



スティービー・レイ・ボーンからマイケル・ランドウまで、シンプルなIbanez Tube Screamerは世界中でよく耳にするオーバードライブです。このゲインが中程度のペダルは80年代初期に登場しました。ブルース仲間の間では、これを使わずにソロをプレイするのは厳禁になっています。

何年もわたって、Ibanezはこの尊敬すべきTube Screamerの様々なバリエーションを作りましたが、いずれも、TS-808（写真のモデル）のようなステータスを築くことはありませんでした。もちろん、ヴィンテージの808のどれをモデリングするかをじっくり考えましたが、結局この緑の宝石をモデルにしたら、PODxtには貴重なアイテムになるのではないかと思ったのです。

Classic Distortion



70年代後半に生まれ育ったProCo Ratは、ディストーションボックスの新世代の始まりでした。ファズよりも怒ったような攻撃的なサウンドは、次第に頭角を現わしてきた新しいタイプのメタルバンドで使われるようになりました。

Ratは様々な仕様変更を経てきましたが、全員一致で選んだのは、写真のモデルです。この2つのRatは同じ基板を使っており、回路もまったく一緒です。（モデリングには小さい方を使いました。）

PODxтのRatモデルでの**[TONE]**ノブはオリジナルのフィルター・コントロールと同じで、設定を低くすると明るいサウンドに、設定を高くすると暗いサウンドになります。一度使ってみれば、Rat（ねずみ）の名の通り「食い込む」ようなサウンドです。

Octave Fuzz



なんだこのサウンドは？過去の偉大なギタリストの幽霊に取り憑かれたお化けギターのようなサウンド、それならたぶんTycobrahe Octaviaのエフェクトでしょう。

Octaviaはファズ＋オクターブエフェクトの例です。このエフェクトのパイオニア的なユーザーはジミ・ヘンドリクスです。Tychobrahe Octaviaは特に、ジェフ・ベックが使用し、またマイケル・ランドウの音造りキットの要素となっています。

Octaviaはオーディオ出力トランスフォーマーと、ギター信号の整流用に2つのゲルマニウム・ダイオードを使っており、高いオクターブタイプのサウンドを作り出します。PODxтのモデリングには、上記の写真にある甘美なサウンドのペダルを使いました。

Blue Comp



Roland/Bossはこのモデル、コンプ／サスティンCS-1でコンプレッサーのペダル・エフェクター市場に参加しました。圧縮比が固定されているので、PODxтのモデルではコンプレッサー回路のスレッショルドを変化させる**SUSTAIN**パラメータがあります。**LEVEL**はレベルを調整します。

Red Comp



もっとも広く使われているペダル・コンプレッサーで、よく比較対象になる業界標準のDynacompは、圧縮比が固定、スレッショルドとゲインは可変です。PODxtではそれをそのまま再現しました。

SUSTAINパラメータは圧縮のスレッショルドを調整し、**LEVEL**はレベルを設定します。

Auto Wah



Mu-Tron IIIのエンベロープ・フォロワーを使わないフィルターなんて想像できませんね。オートワウとトリガーフィルターを足して2で割ったもので、Mu-Tron IIIをモデルにしたエフェクトは両方向のワウ効果が可能です。シャツの胸元を開けてベルボトムのジーンズを履けば、気分はもう70年代にタイムスリップ!

SENSで演奏に対するフィルターの感度を調整し、**Q**でフィルターの幅を設定します。

Vetta Comp

Line 6のオリジナルです。圧縮比が2.35:1、スレッショルドは**SENS**ノブで－9dB～－56dBの範囲で調整します。**LEVEL**ノブで最高12dBまでのゲイン調整が可能です。つまり、SENSの下のノブで信号を好きなだけ圧縮し、LEVELの下のノブで音量を調整します。

Auto Swell

BOSS SG-1や他のペダルに似た、エンベロープジェネレータエフェクトです。立ち上がり時間を調整することで、バイオリンのように弓で弾いたようなアタック効果を出せるので、アタック音ごとに小指でギターのボリュームノブをいちいち回さなくても済みます。立ち上がり時間を長くしてディレイとリバーブをかければ、そのサウンドにどんなコードがいいか考えながら1〜2時間は楽に過ごせます。エディット画面には**RAMP** TIMEパラメータがあり、スウェルの持続時間を設定できます。また**DEPTH**はアタックの音量をどれだけ落とすかを設定します。

モジュレーション・エフェクト

Sine Chorus

モジュレータとして正弦波を使ったベーシックなデジタルコーラスです（CE-1モデルのアナログ的なヴァイブとは異なります）。**BASS**と**TREBLE**で低域、高域を調整します。

Line 6 Flanger

Line 6のオリジナルで、**CONFIG**パラメータをPOSTに設定すると効果的です。ステレオのスウィープが互いにずれ合って、甘美なハーモニーのゆらめきを奏でます。

Opto Trem

64年型Deluxeや65年型Twin Reverbなど、ブラックフェースのFenderアンプで使用したオプチカル・トレモロ回路をモデルにしました。基本的には電球とフォトレジスタで、明かりが明るくなるほど、トレモロのレベルも大きくなります。とても滑らかで、Fenderのアンプモデルに最適です。

Bias Trem

古いけれど人気のあるVoxトレモロ（およびブロンドやブラウンのFenderアンプに搭載された同様の回路）をモデルにしました。パワーアンプチューブの偏差（バイアス）を変化させることでパルスを発生します。これによって、実はアンプの出力チューブの寿命が縮まったのですが、美しく流れるような、しかも不揃いでけっこう凹凸のあるサウンドは、Uni-Vibeや他のフェイズシフターに似た所があります（これは、チューブのバイアスをこれほど無造作に扱ったためにフェイズシフトが生じたためです）。

Auto Pan

Pannerとも呼ばれ、左右チャンネル間で音を交互に振ります。

Analog Chorus



コーラスペダルの元祖Boss CE-1がなければ、PODxtは完成しません。CE-1が登場したのは1977年。暖かくグルーヴィーでビッグなコーラスサウンドで評判になりました。アンディー・サマーズがすぐに取り入れて愛用し、ポリスのアルバムで聞くことができます。コントロール類にはスピード、デプス、コーラス／ヴィブラートモード切り替えスイッチがあります。CE-1は空間の広がりを感じさせ、ディストーションをかけたアンプに入るとすばらしいサウンドが生まれます。

PODxtのCE-1モデルもオリジナルと同様、暖かく心地よいサウンドです。

「ちょっと待てよ、オリジナルのCE-1には便利なピッチヴィブラート・モードがあったんじゃないの。」と思い出した方はご安心ください。コーラスとはピッチヴィブラートをドライ信号とミックスしたもので、CE-1のヴィブラート・モード・スイッチの機能は、このドライ信号をオフにすることでした。この機能を再現するには、**[MIX]**ノブを100%ウェットにします（つまり右いっぱいに回します）。また、**DEPTH**でエフェクトを好みの強さに設定します。

Jet Flanger



スタジオでも安心して使えるA/DAフランジャーをモデルにしました。このペダル・エフェクターはスウィープ範囲が35～1、トーン回路と共に作動するコンプレッサーを内蔵して、A/DAの有名なジェット機音のスウィープ効果を作り出します。ユニークな波形でドラマチックなエフェクトを提供し、極端な設定ではリング・モジュレータのような効果も出すことができます。

DEPTHの下のノブでスウィープレンジを調整し**FDBK**でフィードバック（エフェクトのかかった信号をどれだけエフェクトの入力に再入力させるか）を調整します。

MANUALはスウィープにかけてフランジ効果を生じさせる、極端に短いディレイの長さを設定します。

デプスとフィードバックを上げればジェット機も離陸準備完了！

Phaser



この写真にある、楚々としたメタルのボックスこそが、世界を変えたフェイザー、MXR Phase 90です。Phase 90は他のフェイザーに比べると効果が微妙なので、エフェクト自体が自らスポットライトを浴びるというよりも、音色の一部となっているような地味な効果があります。みずみずしく有機的、かつグルーヴィーな渦巻きが、ヴァン・ヘイレンの最初の2枚のアルバムや、ジミー・ペイジの「Physical Graffiti」で聴けます。

Phase 90は4段のフェイザーで、一つのノブを使ってスピードのみをコントロールします。本機のモデルは**MIX**コントロールで柔軟性を、**FEEDBACK**コントロールでエフェクトを強調することを追加しました。

U-Vibe



今では伝説的となったUni-Vibeも、元はといえば1969年にジミ・ヘンドリックスがその名を広めてくれました。4段のフェイズシフターで、官能的なトーンで知られています。ジミ・ヘンの「Machine Gun」を聞けば、なるほどとわかるはずです。

CE-1モデルの「隠密」的なヴィブラート・モードと同様、Uni-Vibeのヴィブラート・スイッチの効果を再現するには、**MIX**設定を100%ウェットに設定します。（これもオリジナルのモデルでのヴィブラート・スイッチをシミュレート）。**DEPTH**コントロールはこのU-Vibeをさらに際立たせます。

Rotary Drum+Horn



上品な家具と素晴らしいサウンド。Leslie 145は両方を兼ね持つチューブアンプです。持ち上げようとしても重くて持ち上がらないアンプは、ベルトドライブの回転式高周波ホーンと、上部でドラムが回転する下向きの15インチスピーカーを使っています。元々ハモンドのB3オルガンプレーヤーが主流でしたが、ギタリストやボーカリストまでがこのサウンドを聴いて虜になりました。3次元的な渦を巻いた大きなサウンドを作ります。

[SPEED]ノブでドップラー効果のピッチシフト量を設定します。

TONEと**MIX**設定ができます。レスリーにはドライ信号の経路がないので、本物の回転サウンドを得るには、**MIX**を最大にしてください。

Rotary Drum



ギタリストたちがレスリーを使いはじめると、Fenderも独自のギター専用の渦巻きマシンを作ることにしました。12インチのスピーカーの前で発砲スチロールの防音装置が回転して、サウンドを四方八方に送り出します。Fender Vibratoneのサウンドで有名なのは、スティービー・レイ・ボーンの「Cold Shot」です。

Vibratoneのエディットパラメータは、Leslie 145と同じです。

The Delay Effects — Analog Echo



DM-2のようなアナログエコーはそれ以前に使われていたテープエコーを改善したもので、「バケツリレー式」電子回路を採用したので、テープによるディレイよりも信頼性があり、電池でも作動する低電力回路という利点も兼ね備えたエコーでした。

アナログディレイの好まれる点は、暖かく歪んだトーンを生むことです。PODxtのDM-2モデルもデジタルの世界ながらも同じようなアナログ的効果を生み出します。

Analog w/Mod



他のアナログエコーの「バケツリレー式」回路を使用し、コーラス回路を加えたペダル、Electro-Harmonix Deluxe Memory Manをモデルにしました。調整自在なコーラスはエコーのみにかかるので、ダイレクト信号には影響ありません。

Memory Manは暖かで歪んだサウンドとヒタヒタと寄せる波ようなエコーで多くのギタリストにとって大切なツールとなり、最初のU2のアルバムのギターサウンドでは重要な役目を果たしました。

Deluxe Memory Manがどうしてデラックスかというと、ディレイタイムが500ミリ秒もあるからです。VettaのMemory Manではディレイタイムを2秒に延長して、このクラシックなMemory Manをシミュレートします。

2ページ目には**MOD SPEED**、**MOD DEPTH**パラメータがあり、ディレイにかかるコーラスを設定します。

Tube Echo



クラシックなエフェクター、1963年のMaestro EP-1はEchoplexシリーズの最初の製品で、シカゴのハリス・テラーが作成しました。Maestroの広告でも唱われていたように、Echoplexの「特殊なエフェクトは巧妙なハイスピードリバーブからドキドキ胸いっぱいのエコーまでを網羅」しています。

Echoplexのデザインの主な特長は、1/4インチの特殊なループテープカートリッジで、テープが別個の録音ヘッドと再生ヘッドを通過することです。再生ヘッドを移動してディレイタイムを60〜650ミリ秒の範囲で調整できました。VettaのEP-1モデルはクラシックなEchoplexのサウンドに2秒のディレイタイムを加えています。

エディット画面2ページ目には**FLUT**（ワウ／フラッター）、**DRIVE**パラメータがあり、オリジナルサウンドのチューブ（真空管）の暖かいサウンドをシミュレートするだけでなく、キャプスタンが汚くてテープがすべるようなユニークなサウンドも提供します。

Multi-Head



Bossブランドのペダルが発売される以前、Space Echoはエフェクター市場に進出したローランドの最初の製品でした。Echoplexのような可動再生ヘッドの代わりに、複数の静止ヘッドを搭載していました。このヘッド間を切り替えることでディレイタイムを変更し、モーターの速度コントロールでディレイタイムを微調整しました。このエフェクターの面白い点は、複数のヘッドで同時再生するとマルチタップ・ディレイ効果が得られたことです。

エディット画面の2ページ目には**HEADS**パラメータがあり、Space Echoモデルの4つのバーチャル・テープヘッドの組み合わせを選択できます。またEchoplex EP-1モデルと同様、**FLUT**（ワウ／フラッター）パラメータもあります。

Sweep Echo

Line 6のオリジナルモデルです。最初に登場したのはDL4 Delay Modelerですが、ユーザーの間でけっこう人気になりました。

2ページ目のノブは、スウィープフィルターのスピードと深さを設定します。スウィープ**SPEED**はフィルター・スウィープの速さを、スウィープ**DEPTH**はフィルターがかかる周波数レンジを設定するので、音色を様々に変化させることができます。微妙なニュアンスからまったく奇妙きてれつなサウンドまで、このエフェクトは様々な顔を持ちます。FBXペダルでミックスをコントロールし、比較的短いディレイを使ってみると面白いでしょう。

Digital Delay

このモデルは**BASS/TREBLE**トーン・コントロールが2ページ目にある、基本的なデジタルエコーです。

Stereo Delay

U2のエッジが「Where the Streets Have No Name」であのグルーヴィーなサウンドをどうやって出したのか、わかりますか？答えは「ステレオディレイ」です。これは、80年代後半の「Big L.A. Solo」のサウンドを含め、U2の数々の曲の隠し味となっています。ステレオの片方のチャンネルでリピートの多い速いエコーを、もう片方のチャンネルでリピート数の少ないゆっくりとしたディレイを設定しています。

このエフェクトをステレオで聞くには、片方のディレイを左に、もう片方を右にポスト設定します。**TIME**パラメータは左のディレイ・タイムを設定し、**OFFSET**パラメータは右のディレイ・タイムを、左のディレイタイムの割合（%）で表します。たとえば、**TIME**を500 msに設定し、**OFFSET**を50%にすると、右のディレイ・タイムは500 msの50%、つまり250 msになります。左のディレイ・タイムの値を無視すると、50%という値は、右のディレイが半分の時間で発生する、ということです。左のディレイを四分音符とすると、右のディレイは八分音符となるわけです。このモデル音色の次のページ画面には、それぞれ独立した左右の**FEEDBACK**（フィードバック）コントロールがあります。たとえば左のディレイのフィードバックを低くしてリピート数を少なくし、右のフィードバックは大きくしてリピート数を多くします。

Ping Pong Delay



ピンポン・ディレイは、ポスト・ディレイエフェクトとして使えるディレイですが、ペダル・エフェクトとしては使えません（この種のディレイはステレオ出力が必要だからです）。2つのディレイチャンネルが互いに交差して相手のチャンネルにそれぞれ出力される、というピンポンゲームのように前後に移動する、ディレイの二つのセパレートチャンネルです。

1ページ目の**TIME**は左側のディレイラインの時間を設定します。

2ページ目の**OFFSET**は右側のディレイラインの時間を、左のディレイの**TIME**値に対する割合で設定します。**SPREAD**は、ステレオ音像をモノ～左右いっぱいに振ったパンの範囲で設定します。

むずかしそうに思えたら、**TIME**の下のノブだけを使って（または[TAP TEMPO]ボタンで）長いほうのディレイタイムを設定してから、**OFFSET**の下のノブを回して短いディレイタイムを調整します。OFFSETを12時の位置に設定すると、左右のディレイが均一な間隔になります。次に、ディレイタイムを設定したら、**SPREAD**でディレイのリピートがステレオ音像に現れる位置を調整します。

Reverse Delay

!にうよのズルトービやスクッリドンヘ・ミジ・・・（後ろから読んで！）。新しいリバース・ディレイでタイムトラベルしてみましょう。最高2秒まで設定したディレイが弾いた音にかかって、逆に演奏されます。このエフェクトをうまく使うには、リバース再生を無視してとにかくレガートのフレーズを弾いてみます。レガートで長い持続音を弾くほど面白いフレーズになって返ってきます。トム・ペティーのギタリスト、マイク・キャンベルがLine 6 DM4 Delay Modelerペダル・エフェクターのリバース・ディレイを利用して、逆さまのギターソロをライブで弾いていたのをテレビで見たことがあります。

このモデルを使う時は、**[MIX]**ノブを右いっぱいに回して（100%ウェット）リバースサウンドだけが聞こえるようにすると、逆さまのギターソロがすぐに聴けます。

エディットとMIDIコントロール

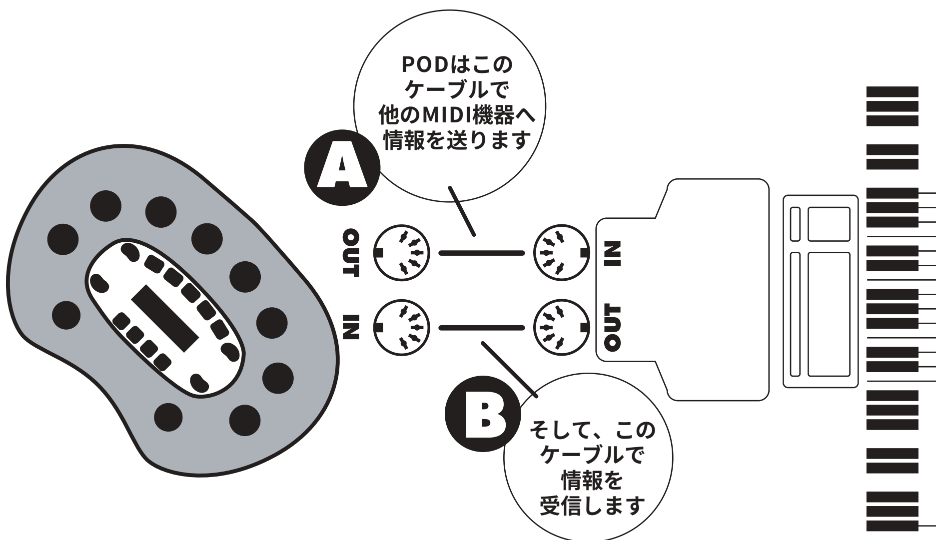
MIDIの基本

MIDIとは？

MIDI（Musical Instrument Digital Interfaceの略）は音楽を作るためのさまざまな機器の間で情報を交換するための共通の通信言語です。すべての機器がそろって作動するように、常に1台の機器がその他の機器をコントロールします。

MIDI IN、MIDI OUT

PODxtには**MIDI IN端子**、**MIDI OUT端子**が1つずつあります。この端子とMIDIケーブルでPODxtを他の機器に接続します。接続はそれぞれ片方向です。つまりMIDI情報を**MIDI OUT端子**から別の機器の**MIDI IN端子**に送信します。情報を受信するにはもう1本のMIDIケーブルでPODxtの**MIDI IN端子**と別の機器の**MIDI OUT端子**を接続します。



MIDIチャンネル

MIDI情報はMIDIケーブルを介し16チャンネルを使って受送信されます。MIDIチャンネルはPODxtのサウンドを保存するプリセットチャンネルとは関係ありません。

テレビやラジオ放送でチャンネルを選ぶように、PODxtでMIDIチャンネルを選び、PODxtと接続した機器が同じチャンネルでMIDI情報を送信するように設定します。PODxtのMIDIチャンネルは[TUNER]ボタンで設定します。このボタンを押すとボタンのインジケータが点灯します。



CHANL（チャンネル）

CHANLパラメータの下にあるボタンを押し**[EFFECT TWEAK]**ノブを回すと、MIDIチャンネルが変わります。チャンネル1〜16またはOMNI（全MIDIチャンネル）から選択します。他にMIDI機器が接続されていなければ、OMNIでもかまいません。システムエクスクルーシブメッセージはどのチャンネルでも受信できるので、システムエクスクルーシブメッセージのみを扱う場合は、この設定によって、PODXTの送信チャンネルが決まります。

PROGRAM（プログラム・チェンジ）

入力されるMIDIプログラム・チェンジ・メッセージを処理するか（**PGM ON**）、メッセージを無視するか（**PGM OFF**）、受信メッセージをそのまま通すか（**PGM ECHO**）を選択します。

OUTPUT（アウトプット）

このパラメータをOUTにすると、**MIDI OUT**からはPODxtで生成したMIDIメッセージが送信されます。MIDI THRUにもできます。その場合は出力MIDIメッセージを生成せず、MIDI INで受信したメッセージをそのままMIDI OUTから出力するので、PODxtが受信したものと全く同じMIDIメッセージを接続MIDI機器に送ることができます。スルーモードでは、MIDI INで受信した信号がそのままMIDI OUTから出力されますが、入力メッセージとPODxtのMIDIメッセージが一緒に組み合わされるわけではありません。

MIDIメッセージ

MIDIでさまざまな目的のためにメッセージを送信できます。

MIDIプログラムチェンジ

サウンドやセットアップを切り替えるメッセージです。PODxtではチャンネルメモリーが切り替わります。たとえばプログラムチェンジナンバー1を受信すると、バンク1、チャンネルAが選ばれます。プログラムチェンジナンバー2を受信するとバンク1、チャンネルBに切り替わります。詳細は付録Bをご覧ください。

MIDIコントローラー

機器のパラメータをリアルタイムでコントロールします。たとえばMIDIコントローラーを使ってPODxtの**ドライブ**設定や**リバーブ**レベルを変更します。PODxtのパラメータはそれぞれMIDIコントローラーに割り当てられているので、PODxtをこのメッセージで完全にコントロールできます。各PODxtのパラメータに割り当てられているコントローラーと、コントローラーの機能を付録Cに記載しています。PODxtに接続したFBV/FBVシュートボードのワウペダル、ボリュームペダルもMIDIを介してMIDIコントローラーメッセージを送信します。

MIDIシステムエクスクルーシブ

システムエクスクルーシブメッセージは特定の機器だけに通用する特殊なコマンドです。ほとんどすべてのMIDI機器が送受信できるプログラムやコントローラー、その他の一般的なメッセージと違って、その機器だけ（exclusive）に使用されるのでエクスクルーシブと呼ばれます。PODxtはシステムエクスクルーシブメッセージを使って、チャンネルメモリーを別の機器に送信したり、新しいチャンネルを他の機器から受信したりします。このデータのやりとりを「ダンプ」と呼びます。システムエクスクルーシブメッセージはPODXTの任意のチャンネルで受信できます。MIDIチャンネルの設定によって、PODXTがシステムエクスクルーシブメッセージを送信するチャンネルが決まります。

PODxtのプログラムを他の機器にバックアップ

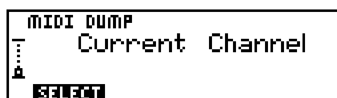
PODxtにプログラムしたサウンドを他の機器にバックアップして、万一のときにはそのバックアップが利用できるようにしてください。PODxtから他のMIDI機器（MIDIファイルプレーヤー、シーケンサー、キーボードワークステーションなど）にサウンドを転送してバックアップするのは、PODxtからPODxtへのサウンド転送とほとんど同じ要領です。この場合もMIDIケーブルが必要です。

PODxtのMIDI OUT端子を受信側MIDI機器のMIDI IN端子に接続します。PODxtの**[TUNER/SYSTEM]**ボタンを押すとボタンのインジケーターが点灯します。**[SELECT]**ノブを回してMIDIページを表示します。

全チャンネルの送信

PODxtのプリセットをすべて接続MIDI機器にバックアップします。

[SAVE]ボタンを1回押し、**[SELECT]**ノブを回して次の画面を表示させます。



SELECTパラメータの下にあるボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]**ノブを左に回してAll Channelsを表示させます。

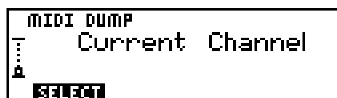


[SAVE]ボタンをもう一度押すと送信が行われます。画面に**SENDING SYSEX... STANDBY**と表示され、送信が終わると消えます。

一部データの送信

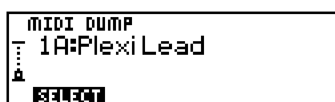
特定のチャンネル・メモリー、エフェクト設定、あるいはアンプモデルだけを接続MIDI機器に送信します。

[SAVE]ボタンを1回押し、**[SELECT]**ノブを回して次の画面を表示させます。



SELECTパラメータの下にあるボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]**ノブを左に回して送信したいチャンネル・メモリー、アンプモデル、エフェクト設定などを選択します。

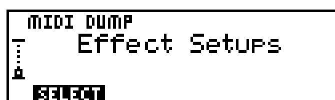
任意のチャンネル・メモリー



アンプモデルすべて（カスタムのモデルも含む）



エフェクト設定すべて（カスタムの設定も含む）



[SAVE]ボタンをもう一度押すと送信が行われます。

データの呼び出し

PODxtにデータを呼び出すには特別な操作は不要です。MIDIでPODxtにデータを送信すると、データが受信され、どのデータが受信されたかが画面に表示されます。

MIDIを使ってできること

MIDIプログラムチェンジでPODxtのチャンネル切り替え

MIDIでできる一番基本的なことは、チャンネル切り替えです。MIDIプログラムチェンジメッセージを送信するフットコントローラーやその他の機器をお持ちの場合は、その**MIDI OUT端子**をPODxtの**MIDI IN端子**に接続し、両方の機器のMIDIチャンネルを同じ設定にして、**付録B**を参照しながら、フットコントローラーのどのプログラムナンバーがPODxtのチャンネルを切り替えるかを調べます。**マニュアルモード**も**チューナーモード**もMIDIプログラムチェンジメッセージで選べます。またMIDIシーケンサーからPODxtにプログラムチェンジメッセージを送信して、シーケンスに同期したPODxtのサウンド切り替えも可能です。

MIDIコントローラーを使ったPODxtのサウンド調整

MIDI「フェーダーボックス」、アサイナブルMIDIコントローラーのあるキーボード、MIDIシーケンサー（単体またはコンピュータソフトウェア）などをお持ちの場合は、MIDIでPODxtのパラメータを調整できます。**付録C**はPODxtのパラメータをコントロールするMIDIコントローラーの表です。PODxtとコントロール側の機器のMIDIチャンネルを必ず一致させてください。**MIDIでパラメータをコントロールするときにノイズを最小限に抑えるには、設定を徐々に変更していくといいでしょう。**

PODxtのMIDIオートメーション

MIDIシーケンサーでPODxtを使う場合、MIDIコントローラーメッセージでPODxtのパラメータをオートメーションできます。Pro Tools TDMシステム用にLine 6が開発した有名なAmp Farmプラグインソフトウェアと同じような機能を、Pro Toolsシステムを使わずに利用できるわけです。

PODxtのフロントパネルのノブからは（別売のFBVフットコントローラーのワウペダル、ボリュームペダルも同様）、MIDIコントローラーメッセージが送信されるので、MIDIシーケンスに合わせてPODxtを通して演奏しながらMIDIトラックに記録できます。

PODxtのMIDI OUT端子をシーケンサーのMIDI IN端子に接続し、シーケンサーのMIDI OUT端子をPODxtのMIDI IN端子に接続します。PODxtとシーケンサーが同じMIDIチャンネルになるよう設定します。**TUNER/SYSTEM**モードでの**MIDI OUTPUT**設定が**OUT**になっていることも確認してください。また、シーケンサーでMIDI EchoまたはSoft Thru機能をオフにして、PODxtから送られたMIDIデータすべてがまたPODxtに戻ってしまわないようにしてください。

MIDIオートメーションを行うには、シーケンサーのMIDIトラックにPODxtのMIDI OUT端子からのデータを記録します。手順は、まずPODxtのMIDI OUTからのデータを受信するためのMIDIトラックをセットアップし録音可能状態にしてから、シーケンサーの録音を始めます。次にPODxtの**[DRIVE]**ノブをいっぱいまでゆっくり上げてから今度はいっぱいまで下げ、シーケンサーを停止します。今シーケンサーのMIDIトラックに記録されたのは、MIDIコントローラー#13のメッセージです。これはPODxtのドライブパラメータに割り当てられているコントローラーです。PODxtを通して演奏しながら録音したMIDIトラックを再生すると（またはPODxtを通して録音されたギターを再生すると）、ドライブが変化するのがわかるはずです。**MIDIでパラメータをコントロールするときにノイズを最小限に抑えるには、設定を徐々に変更していくといいでしょう。**

MIDIセットアップ時のトラブルシューティング

1 SoundBlasterなどのカードには複数のMIDIドライバーがついています。システムは通常、カード上の内蔵シンセ用ドライバーを初期設定として使用するので、外部MIDI端子は選択されません。つまりソフトウェアがPODxtを認識するためには、まず正しいドライバーを選択することが肝心です。

2 MIDIケーブルは必ずMIDI OUTとMIDI INを接続してください。（PODxtのMIDI INとコンピュータのMIDI INを接続しないでください。PODxtのMIDI IN端子は必ずコンピュータのMIDI OUTと接続します。）情報が流れる方向を考えてみましょう。PODxtから出て（OUT）コンピュータへ入る（IN）。コンピュータから出て（OUT）PODxtへ入る（IN）。という具合です。

3 MIDIチャンネルを必ず一致させてください。一番単純なのは、PODxtのMIDIチャンネルを**OMNI**にすることです。

フット・コントローラの利用

FBVシリーズ・フット・コントローラ

PODxт用のフット・コントローラとして、オプションのLine 6 FBV/FBV Shortboardフット・コントローラがあります。FBVはVettaシリーズのアンプ用に必要なフット・コントロール機能をすべて搭載しているため、PODxтでは使用しないコントロール類もたくさん入っています。一方、FBV ShortboardはPODxтの機能に焦点を当てているため、ここではFBV Shortboardの使い方について説明します。標準のFBVをお持ちの方も使い方は同じです。

FBV Shortboardについて

FBV Shortboardは特にライブ演奏などでPODxтをコントロールするときに威力を発揮します。FBV ShortboardはPODxтの機能を操作するフット・スイッチであり、ワウ・ペダルやボリューム・ペダルとしても使え、またLine 6のエクスプレッション・ペダルEX-1用のインプットとしても機能します。

FBV Shortboardの接続

FBV Shortboardには接続に必要なケーブルが同梱されていますので、そのケーブルをPODxтの背面にある**[PEDAL]**端子に接続してください。(新しいケーブルを購入する場合は、標準のCAT-5 Ethernetケーブルをお求めください)。FBV Shortboardはケーブルから電源をとりますので、電源コードは不要です。

スイッチ操作

1 BANK ▲/▼

PODxтのチャンネル・メモリーの16バンクから任意のバンクを選択します。チャンネル・メモリーをロードするには、[CHANNEL A/B/C/D]のいずれかを押します。[BANK]スイッチを押したままにすると、バンクナンバーがスクロールします。

2 CHANNEL A/B/C/D

現在のバンクにある4つのチャンネル・メモリーの一つをロードします。

3 FX LOOP

PODxt Proのループをオン／オフします。他のFBVスイッチは踏むたびに働きますが、これは足を離さないとループを切り替えません。PODxtをお持ちの方は、付属の**COMP**ステッカーをこの文字の上に貼れば、コンプレッサーのオン／オフスイッチになります。

4 STOMP

ペダル・エフェクターをオン／オフします。オンにするとスイッチの上のインジケータが点灯します。

5 STOMP BOX 2（Shortboardにはありません）

PODxtのコンプレッサーをオン／オフします。

6 STOMP BOX 3（Shortboardにはありません）

PODxtのゲートをオン／オフします。

7 REVERB

PODxtのリバーブをオン／オフします。

8 MODULATION

モジュレーション・エフェクトをオン／オフします。オンにするとスイッチの上のインジケータが点灯します。

9 DELAY

ディレイ・エフェクトをオン／オフします。オンにするとスイッチの上のインジケータが点灯します。

10 TAP

2回タップして、PODxtのテンポを設定します。現在のテンポ（BPM）に合わせてスイッチの上のインジケータが点滅します。**[TAP]**スイッチを2秒間押さえると**チューナー**機能が起動します。FBV Shortboardのディスプレイには弾いた音名が表示されるので、シャープかフラットかがわかります。

11 [WAH]/[VOLUME]インジケータ

FBV Shortboard搭載のペダルでワウまたはボリュームのコントロールをする時は、このいずれかのインジケータが点灯します。エクスプレッション・ペダルを接続してボリューム・コントロール用に設定すると、**[VOLUME]**インジケータは点灯しません。

12 ワウ／ボリューム・ペダル

このペダルをつま先いっぱいまで踏んでトー・スイッチを押すと、ペダル機能が**ワウ**または**ボリューム**になります。エクスプレッション・ペダルをFBV Shortboardの背面にある1/4インチ端子に接続して**ボリューム**・コントロール用に設定すると、FBV Shortboardの方は**ワウ**のコントロールのみになり、トー・スイッチはワウのオン／オフスイッチになります。エクスプレッション・ペダルで**EFFECT TWEAK**パラメータをリモートコントロールする場合は、**ワウ／ボリューム**・ペダルは**ワウ**と**ボリューム**間で切り替わります。詳細は、**4章の「サウンドの作成と保存」**をお読みください。

13 外部ペダル端子

Line 6 EX-1などのエクスプレッション・ペダルを接続する1/4インチ端子です。接続したペダルは**ボリューム**または**EFFECT TWEAK**パラメータをコントロールするよう設定できます。エクスプレッション・ペダルの設定については、**4章の「サウンドの作成と保存」**をお読みください。

注： PODxtで使用しないFBVスイッチは、PODxtのMIDI OUT端子からMIDIメッセージを送信するので、他の機器をコントロールできます。詳細は、付録Cをお読みください。

FBV Shortboardを使った保存とネーミング

8・3

保存操作を行う前にまず工場プリセットのサウンドを試聴して、どのサウンドが欲しいか不要かを決め、不要なサウンドは後で上書きできるよう、バンクナンバーとチャンネルをメモしてください。

1 **保存：[FX LOOP (COMP)]**スイッチを押したままにして**NAME EDIT**を表示させます。

2 **ネーミング：**FBV Shortboardの**[STOMP]**および**[MODULATION]**スイッチ（小さい文字で**CURSOR**（カーソル）とも記載されています）で、変更したいチャンネル名の文字を選択します。**[DELAY]**および**[REVERB]**スイッチ（小さい文字で**CHARACTER**（文字）とも記載されています）で、文字／数字／記号を選択します。名前を変更したら次のステップ3に進みます。

3 **バンクの選択：[BANK]▲/▼**スイッチで保存先のバンクを選択します。

4 **最後に：[CHANNEL A/B/C/D]**のいずれかのスイッチを押して、チャンネル・メモリーをバンクに保存します。ディスプレイには**「SAVING**（保存中）**」**と表示されます。

操作のキャンセル

[TAP]スイッチを押すと保存操作がキャンセルされます。

注： FBVをお持ちの方も保存操作は同じですが、[REVERB]と[PITCH/TREMOLO]スイッチがカーソル機能、[MOD]と[DELAY]スイッチが文字機能になります。

EX-1の使用

FBV ShortboardにはLine 6のEX-1などエクスプレッション・ペダルを接続して、ボリューム・ペダルとして使用したり、**[EFFECT TWEAK]**ノブに割り当てられているパラメータをリモートコントロールします。これによって、たとえばロータリー・ドラム・スピードをリモートコントロールすると同時に、FBV Shortboard搭載ペダルで**ワウ**や**ボリューム**をコントロールできます。これはチャンネル・メモリーと一緒に保存もできるので、演奏中に簡単に切替が可能です。次の手順で設定します。

1 [EDIT]ボタンを押し[SELECT]ノブを回してWAH/VOLUMEパラメータを表示させます。



2 **PEDAL**パラメータの下にあるボタンを押し、ボリュームをコントロールするなら**VOLUME**を、**EFFECT TWEAK**パラメータをコントロールするならTWEAKを選択します。

3 変更内容を必要に応じて保存します。

PEDALパラメータを**EFFECT TWEAK**に設定すると、接続したEX-1をヒール・ポジションからトー・ポジションに動かした時に、**FX TWEAK**で割り当てられたパラメータが最小値から最大値に変化します。一方、**PEDAL**を**VOLUME**に設定すると、FBV Shortboardの[VOLUME]インジケータが消灯し、EX-1はPODxtのボリュームをコントロールし、FBV Shortboard搭載ペダルはワウ・ペダル専用になります。ディレイ／モジュレーション・エフェクトと同様、ボリューム・ペダルの位置を**PRE**（アンプモデル前）または**POST**に設定することもできます。

付録A：アンプモデル

アンプモデル名	対象アンプ	対象キャビネット	対象マイク
Tube Preamp	Tube Instrument Preamp	No Cab	67 Condenser
Line 6 Clean	Line 6 21st Century Clean	2×12 Line 6	57 On Axis
Line 6 JTS-45	Line 6 JTS-45	4×12 Green 25 's	67 Condenser
Line 6 Class A	Line 6 Class A	1×12 Tweed	421 Dynamic
Line 6 Mood	Line 6 Mood	4×12 Green 20 's	57 On Axis
Spinal Puppet	Line 6 Spinal Puppet	4×12 Brit V30 's	421 Dynamic
Line 6 Chem X	Line 6 Chemical X	4×12 Brit T75	421 Dynamic
Line 6 Insane	Way too many hours of shredding	4×12 Brit T75	57 On Axis
Line 6 ACO 2	Line 6 Piezacoustic 2	No Cab	67 Condenser
Zen Master	Budda Twinmaster 2×12 Combo	2×12 Line 6	57 On Axis
Small Tweed	'53 Fender Deluxe	1×12 Tweed	421 Dynamic
Tweed B-Man	'58 Fender Bassman	4×10 Tweed	57 On Axis
Tiny Tweed	'60 Tweed Fender Champ	1×8 Tweed	421 Dynamic
Blackface Lux	'64 Fender Deluxe	1×12 Blackface	57 On Axis
Double Verb	'65 Blackface Fender Twin	2×12 Blackface	421 Dynamic
Two-Tone	Gretsch 6156	1×10 G-Brand	57 On Axis
Hiway 100	Hiwatt DR-103	4×12 Green 25 's	57 Off Axis
Plexi 45	'65 Marshall JTM-45	4×12 Green 20 's	57 Off Axis
Plexi Lead 100	'68 Marshall ' Plexi ' Super Lead	4×12 Green 20 's	57 On Axis
Plexi Jump Lead	'68 Marshall Super Lead Jumped	4×12 Green 25 's	421 Dynamic
Plexi Variac	'68 Marshall Super Lead Variac 'd	4×12 Green 25 's	67 Condenser
Brit J-800	'90 Marshall JCM-800	4×12 Brit T75	67 Condenser
Brit JM Pre	Marshall JMP-1	4×12 Brit T75	421 Dynamic
Match Chief	'96 Matchless Chieftain	2×12 Match	57 On Axis
Match D-30	Matchless DC-30	2×12 Match	57 On Axis
Recto Dual	'01 Mesa Boogie Dual Rectifier	4×12 Recto	57 Off Axis
Cali Crunch	'85 Mesa Boogie Mark IIc+	1×12 Line 6	57 On Axis
Jazz Clean	'87 Roland JC-120	2×12 Jazz	67 Condenser
Solo 100	Soldano SLO-100 Head	4×12 Brit T75	57 On Axis
Super O	Supro S6616	1×6 Super O	57 On Axis
Class A-15	'60 Vox AC 15	1×12 Class A	57 Off Axis
Class A-30 TB	'63 Vox AC 30 with Top Boost	2×12 Class A	57 Off Axis

Fender、Marshall、Vox、Boogie、Soldano、Roland、Matchless、Budda、Arbiter、その他のアンプモデル名とエフェクト名はすべて該当する所有者の商標で、Line 6とは何の関わりもありません。このような商標や名前はLine 6のモデリング技術で作り出したアンプサウンドを説明するためにのみ使用しています。

付録B：MIDIプログラムチェンジ

MIDIプログラムチェンジでPODxtのチャンネル切り替えができます。MIDI機器によってはデバイスナンバーが0で始まるものと1で始まるものがありますが、PODxtでは0で始まります（マニュアルモード）。次の表は保存チャンネルに対するプログラムチェンジナンバーの割り当てです。

PODのチャンネル	MIDIプログラムチェンジ	PODのチャンネル	MIDIプログラムチェンジ	PODxtのチャンネル	MIDIプログラムチェンジ	PODxtのチャンネル	MIDIプログラムチェンジ
Manual	0	5A	17	9B	34	13C	51
1A	1	5B	18	9C	35	13D	52
1B	2	5C	19	9D	36	14A	53
1C	3	5D	20	10A	37	14B	54
1D	4	6A	21	10B	38	14C	55
2A	5	6B	22	10C	39	14D	56
2B	6	6C	23	10D	40	15A	57
2C	7	6D	24	11A	41	15B	58
2D	8	7A	25	11B	42	15C	59
3A	9	7B	26	11C	43	15D	60
3B	10	7C	27	11D	44	16A	61
3C	11	7D	28	12A	45	16B	62
3D	12	8A	29	12B	46	16C	63
4A	13	8B	30	12C	47	16D	64
4B	14	8C	31	12D	48	Tuner	65
4C	15	8D	32	13A	49		
4D	16	9A	33	13B	50		

付録C：MIDIコントロール

パラメータ	ノート	コントロール No.	送信MIDI コントロールNo.	受信MIDI コントロールNo.
Amp Settings				
Amp Model	アンプモデルを選択	11	0-32	0-32
Drive		13	0-127	0-127
Bass		14	0-127	0-127
Mid		15	0-127	0-127
Treble		16	0-127	0-127
Presence		21	0-127	0-127
Chan Vol		17	0-127	0-127
Pan	0=左, 64=中央, 127=右	10	—	0-127
A.I.R. Settings				
Cabinet Model	0-22	71	0-22	0-22
Mic Selection	0=Shure SM-57, 1=Shure SM-57 Off Axis, 2=MD-421, 3=U-67	70	0-3	0-3
Room Level	0-100%	76	0-127	0-127
COMPRESSOR				
Compression Gain	0 to +31dB	5	0-127	0-127
Compression Threshold	−63dB<>0dB	9	0-126	0-127
Comp Enable	On, Off	26	Off=0/On=127	0-63=Off 64-127=On
NOISE GATE				
Gate Threshold	0 to -96dB	23	0-96	0-96
Gate Decay Time	0=.1ms; 127=1 sec	24	0-127	0-127
Noise Gate Enable	On, Off	22	Off=0/On=127	0-63=Off 64-127=On
STOMP Category Effects	（ペダルパラメータは変更されます）			
STOMP Model	0=Facial Fuzz, 1=Fuzz Pi, 2=Screamer, 3=Classic Dist, 4=Octave Fuzz, 5=Blue Comp, 6=Red Comp, 7=Vetta Comp, 8=Auto Swell, 9=Auto Wah	75	0-9	0-9
STOMP Param 1	Not Used	27	0-127	0-127

パラメータ	ノート	コントロール No.	送信MIDI コントロールNo.	受信MIDI コントロールNo.
STOMP Param 1 Note value	未使用	78	*注意1 (9-6ページ)	*注意1 (9-6ページ)
STOMP Param 2	Model dependent	79	0-127	0-127
STOMP Param 3	Model dependent	80	0-127	0-127
STOMP Param 4	Model dependent	81	0-127	0-127
STOMP Param 5	Not Used	82	0-127	0-127
STOMP Volume/Mix	0<>100%	83	0-127	0-127
Stomp Enable	On, Off	25	Off=0/On=127	0-63=Off 64-127=On
MOD Category Effects	（MODパラメータは変更されます）			
Modulation Model	0=Sine Chorus, 1=Analog Chorus, 2=Line 6 Flanger, 3=Jet Flanger, 4=Phaser, 5=U-Vibe, 6=Opto Trem, 7=Bias Trem, 8=Rotary Drum+Horn, 9=Rotary Drum, 10=Auto Pan	58	0-10	0-10
Mod Param 1	Model dependent	29	0-127	0-127
Mod Param 1 Double Precision	Model dependent	61	0-127	0-127
Mod Param 1 Note value	Model dependent	51	*注意1 (9-6ページ)	*注意1 (9-6ページ)
Mod Param 2	Model dependent	52	0-127	0-127
Mod Param 3	Model dependent	53	0-127	0-127
Mod Param 4	Model dependent	54	0-127	0-127
Mod Param 5	Model dependent	55	0-127	0-127
Mod Volume/Mix	0<>100%	56	0-127	0-127
Mod Pre/Post	Pre, Post	57	Pre=0/Post=127	0-63=Pre 64-127=Post
Mod Enable	On, Off	50	Off=0/On=127	0-63=Off 64-127=On
DELAY Category Effects	（ディレイパラメータは変更されます）			
Delay Model	0=Analog, 1=Analog w/Mod, 2=Tube Echo, 3=Multi-Head, 4=Sweep Echo, 5=Digital Delay, 6=Stereo Delay, 7=Ping Pong, 8=Reverse Delay	88	0-8	0-8

パラメータ	ノート	コントロール No.	送信MIDI コントロールNo.	受信MIDI コントロールNo.
Delay Param 1		30	0-127	0-127
Delay Param 1 DBL Precision		62	0-127	0-127
Delay Param 1 Note value		31	*注意1 (9-6ページ)	*注意1 (9-6ページ)
Delay Param 2	Model dependent	33	0-127	0-127
Delay Param 3	Model dependent	35	0-127	0-127
Delay Param 4	Model dependent	85	0-127	0-127
Delay Param 5	Model dependent	86	0-127	0-127
Delay Volume/Mix	0<>100%	34	0-127	0-127
Delay Pre/Post	Pre, Post	87	Pre=0/Post=127	0-63=Pre 64-127=Post
Delay Enable	On, Off	28	Off=0/On=127	0-63=Off 64-127=On
REVERB Category Effects				
Reverb Type	0=Lux Spring, 1=Std Spring, 2=King Spring, 3=Small Room, 4=Tiled Room, 5=Brite Room, 6=Dark Hall, 7=Medium Hall, 8=Large Hall, 9=Rich Chamber, 10=Chamber, 11=Cavernous, 12=Slap Plate, 13=Vintage Plate, 14=Large Plate	37	0-14	0-14
Reverb Decay	Model dependent	38	0-127	0-127
Reverb Pre-Delay	Model dependent	40	0-127	0-127
Reverb Tone	0<>100%	39	0-127	0-127
Reverb Mix	0<>50%	18	0-127	0-127
Reverb Pre/Post	Pre, Post	41	—	0-63=Pre 64-127=Post
Reverb Enable	On, Off	36	Off=0/On=127	0-63=Off 64-127=On
WAH WAH				
Wah Position	0<>127	4	0-127	0-127
Wah Enable	On, Off	43	Off=0/On=127	0-63=Off 64-127=On

パラメータ	ノート	コントロール No.	送信MIDI コントロールNo.	受信MIDI コントロールNo.
Volume Pedal				
Vol Pedal Position	値は保存不可	7	0-127	0-127
Volume Pre/Post	Pre, Post	47	Pre=0/Post=127	0-63=Pre 64-127=Post
Volume/ Tweak Pedal Assign		65	Volume=0 Tweak=127	0-63=Volume 64-127=Tweak
TEMPO Settings				
Tempo MSB	30.0-240.0 BPM	89	0-127	0-127
Tempo LSB		90	0-127	0-127
Tap	Tap	64	Tap Button or FBV sends 127	64-127=a Tap
Tweak	Tweak Controller	1	0-127	0-127
EFFECTS Setups				
Effect Setup	Effectノブ、 値は保存不可	19	0-63	0-63
Tweak Param Select	有効値は使用エフェクトにより変わる	108	0-13	0-13

注1：

ノート値		*コントローラの値*
1	=	全音符
2	=	付点二分音符
3	=	二分音符
4	=	二分三連符
5	=	付点四分音符
6	=	四分音符
7	=	四分三連符
8	=	付点八分音符
9	=	八分音符
10	=	八分三連符
11	=	付点十六分音符
12	=	十六分音符
13	=	十六分三連符

付録D：FBVシリーズMIDIコントロール

PODxt パラメータ	FBVコントロール	コントロール No.	送信MIDI コントロールNo.
Stomp On/Off	FBV“ Stomp 1 ”switch FBV Shortboard“ Stomp ”switch	25	Off=0/On=127
Modulation On/Off	“ Modulation ”switch	50	Off=0/On=127
Delay On/Off	“ Delay ”switch	28	Off=0/On=127
Reverb On/Off	“ Reverb ”switch	36	Off=0/On=127
Tap (momentary)	“ Tap ”switch	64	Off=0/On=127
Wah	Left pedal on FBV Shared pedal on FBV Shortboard	4	0-127
Volume	Right pedal on FBV Shared pedal on FBV Shortboard	7	0-127
Tweak	Volume pedal can be assigned via PODxt Edit pages to operate Tweak parameter	1	0-127
Comp On/Off	FBV“ Stomp Box 2 ”switch FBV Shortboard“ FX Loop ” switch controls this parameter when connected to PODXT; this parameter cannot be controlled from a Shortboard connected to PODxt Pro	26	Off=0/On=127
Gate On, Off	FBV“ Stomp 3 ”switch (not available on Shortboard)	22	Off=0/On=127
Do not control PODxt parameters; can be used for control of other connected MIDI devices	FBV“ Amp 1 ”switch	111	Off=0/On=127
	FBV“ Amp 2 ”switch	112	Off=0/On=127
	FBV“ Pitch/Tremolo ”switch	113	Off=0/On=127
FX Loop On/Off (PODxt Pro only)	“ FX Loop ”switch	107	Off=0/On=127